
国立魔法学園

東野 暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

国立魔法学園

【Nコード】

N0513I

【作者名】

東野 暁

【あらすじ】

国立魔法学園西暦2100年突如として発生した魔法と呼ばれる超常現象。魔法の発生の理由は理解できないものの、その魔法の研究は進んでいた。その最先端である国立魔法学園そこへ通うことになった幼馴染の琥珀と空。学園で出会う友達と、二人との物語。

EPISODE 1 - 1

「く、く…く、おきて。こゝはくく！朝だよ！」

「…さ、寒い…」

まだ4月ということもあり、肌寒い。
いや、むしろ寒いと言ってもいいぐらいだ。

「もう。琥珀もすぐ起きてよ。ほら朝ごはんだよ。」

「もう少し起こし方ってないのか？いきなり布団を取ると寒いんだが…」

と文句も言っているうちに空はそうそうにリビングに行ってしまった。

「さて、俺も用意しないとな。」

~~~~~

「遅いよ、琥珀。早く食べないと間に合わないよ？」

「そういうセリフは待ってるやつが言うセリフだ。いただきます。  
毎朝朝食を空が作るようになっていたので、今朝もそれを食べる。  
最初こそ人が食べられるようなものではなかったが、今では立派なものだ。」

日々の楽しみになりつつある。

~~~~~

食事を終え、空と共にこれから通うことになる学び舎に向かう。

これから3年間空と一緒に通うことになる国立魔法学園

高校ということにはなっているが、実質は魔法の習得がメインになっている。

高校としての役割はいわばおまけである。

2人は学園に着くと、まずその大きさに改めて驚いた。

試験の時に訪れていたが、いざ通うことになって見てみると驚くほど大きかった。

「体育館はどこだ？」

琥珀と空は入学式が行われる体育館を探し始めた。

あまりにも校内が広く、体育館ひとつ探すのも一苦労だ。

研究棟や、特別教室の部屋が多くあり、空は楽しそうに歩いていたが、琥珀はこの広さにいいかげんうんざりしていた。

探し始めて10分ぐらい歩き回って、やっと目的の建物を見たとき驚きよりもまずほっと一安心した。

次にまた体育館の広さに驚いた。

「じゃあ、私は挨拶しなきゃいけないから行くね。」

空は琥珀に手を振って、近くにいた教師らしき人に話しかけていた。

（疲れたし、さっさと座ろ。）

手近にいい席を見つけたので、琥珀はそこに座ることにした。
まだ時間も十分にあつたので、ポケットから携帯端末を取り出して
ニュースなどを見始めた。

「ん」

気がつくと体育館も大勢の人で席が埋まってきていた。

(もうすぐ始まるな。)

手の端末をポケットにしまった。

一度伸びをして座りなおした。

「隣、いいか？」

突然話しかけられて、声の主を見る前に答えた。

「どうぞ。空いてるから。」

(少しそっけなかっただろうか？)

「さんきゅ。俺、三島明ってんだ、よろしくな。」

そう言われて初めて顔を上げた。

明は琥珀のそっけない態度を気にすることも無く続けざまに話しかけた。

(なんと言うか…ワイルドな奴だな)

背は高く、180は余裕でありそんな身長と、ごっごつした体が特徴的で、肌の色も少し浅黒かった。

「…冴原琥珀だ。」

とりあえず名前は名乗っておいた。そうしているうちに入学式は始まった。何年たっても、どれだけ年月を経ても校長の話とは長いものだ。そんなくだらないことを考えていたら、ふと聞いた声が聞こえてきた。

「なあ。」

となりの、三島から声をかけられた。

「今スピーチしてる奴って新入生代表だよな？」

空に視線を移してから

「ああ、そうだな。」

「すっげえかわいくね？」

「…ん、そうだな。どちらからと言えばそうだと思う。」

元氣よくスピーチをしている空を見た。

周りの男子が少しそわそわしているようだった。それは琥珀の気のせいかもしれないが。

「お前って理想高いな。十分すぎるほどかわいいだろ。」

(相変わらず空は男子にウケのいい奴だな。)
こんなことも相変わらずである。

背はそれほど高くなくて、160ぐらいで、髪の毛はセミロング程度の長さで下ろしている。

顔立ちも整っていて、しかし年相応の幼さも残っていた。

「三島はタイプみたいだな。」

「明でいい。そりゃあんだだけかわいけりゃ誰だってそうだろう。」

「おいそこ、静かにしないか。」

しゃべっていた俺と明は近くの教師に怒られた。

空は目線を少しこちらにやっていた。

式が終わるまで俺と明は一応怒られた手前、静かに座っていた。

それは必ずしもまじめに話を聞いていたとは言えないが…

「よっし、琥珀行こうぜ。」

明の声を合図に立ち上がった。

~~~~~

「琥珀のクラスはどこだ？」

「Fみたいだ。明は？」

「俺もFだ。どうやら俺たちは落ちこぼれみたいだな。」

そう言って明は豪快に笑った。

琥珀にだけそう見えただけかもしれない。

(ワイルドだな。)

「琥珀！」

名前を呼ばれて振り向くと、空が走ってきていた。

「おっ、おい琥珀。あの子と知り合いなのか!？」

隣で明が焦っている。

今にも額から汗が出そうだ。

(見かけよりシャイなのかもしれないな。)

琥珀は明に対してそんなことふと思った。

「ああ、空か。あいつは幼馴染だ。」

「くっそ〜、なんだその18禁ゲームのような設定は。」

本気で明がうらやましそうな目をしている。

明はそんなゲームをしているのか、という疑問を口に出さずに空に向かって話しかけた。

「どうした、空?」

「どうしたじゃないよ。琥珀は何組だった?」

「ん、予想通りFだった。空はSだろ?」

「えっ、違うクラスなの!?!なんで!?!」

(なぜ空が驚いているんだか。)

明は隣でジトツとした目で見ている。



それに気が付きながらも、気にしないように空に話続けた。

「なんでも何も、実技がダメだったからに決まっているだろうっ?」

(何をいまさらそんなことを。)

「だって琥珀は…」

「空、早く行こう。明も行こうぜ。」

「おう。あつ、俺は三島明だ。よろしくな。」

「あつ、うん。一条空だよ。よろしくね。」

どうやら二人はうまくいきそうだ。

廊下を歩きながらそんなことを考えていた。

明はその持ち前の明るさが存分に発揮されていた。

「なあ、琥珀。空ちゃん的笑顔がまぶしすぎる…」

こっそり明が話しかけてきた。

「明はバカなんだな。」

はっきりと言い切った。

言い過ぎたかと明を見たが、聞いちゃいないようだ。

「じゃあ私はここだから。」

教室の前で空が話しかけてきた。

「わかった。がんばれよ」

「琥珀もね。帰りは門のところにいるから。」

そう言っただけで空は教室の中に入っていった。空のことだ、すぐに友達もできるだろう。

「琥珀…なぜ一緒に帰る約束を…」

「ん、まあ家が近いからな。」

あながち嘘ではない。

だがまったくの真実ではないが、今は黙っておこう。今の明には危険すぎて言えない。

「くそう、俺にもあんな幼馴染がいれば…」

(まったく、何を考えているんだか。)

「おっ、ここみたいだぜ。」

校舎の階段を2階上り教室に着いた。

空は1階だったから、どうやら1階がS、2階がA、3階がFということのようにだ。

落ちこぼれは苦労しろってことか。

「20人か、少ないな。」

明はそう言っただけで自分の席を探し始めた。

（確かに明の言うとおり、20人は少なく感じられた。他のクラスはもう少し多いのだろうか。）

冴原と言う名前のおかげで一番窓側の席になった。

どうやら三島は、最前列のようだ。

（運がないんだな。ご愁傷様な奴だ。）

琥珀は明に対して勝手に判断していた。

~~~~~

「…話は以上だ。明日からは授業があるから気を抜かないようにな。では解散だ。」

初回というだけあって、簡単な自己紹介や諸注意で終わった。帰るか。空を待たせると大変だからな。

「琥珀、帰るのか？」

「明も一緒に帰るか？」

「マジで？もちろんだよ！」

（すごい笑顔だな。）

そんなにうれしいのか。

誘ってよかったかもしれないな。）

明の顔は誰が見ても分かるぐらいに晴れ渡っていた。

EPISODE 1 - 2

「空、待ったか？」

琥珀と明と校門に着いたときには、もう空が待っていた。

「ううん、大丈夫だよ。明君も一緒なんだね。」

「あまりにも明が淋しそうだったからな。いいか？」

琥珀は聞くまでもないとは思いつつ、念のため空に聞くことにした。空はどんなことに対しても大らかなところがある、そのことを琥珀はちゃんと知っていた。

「もちろん。」

予想通りの空の答えに明がうれしそうな顔をしていた。

「ってなわけで、よかったな明。」

「おう！」

相変わらずわかりやすい性格であった。

「じゃあ、行こっか。」

笑顔で空が歩きだした。

それを見ながら仲良く下校となった。

~~~~~

「じゃあな、明。」

「おう、またな。」

「明君ばいばい。」

途中で明と別れてから、空と2人で帰った。

空の家は、琥珀の家の前にある。

小さいときからの付き合いらしい。

らしいと言うのは、俺の記憶は、3年前からしかないからである。

以前の俺はどんな人間だったのか興味がないと言うわけではない。

ただ、空には聞けない。

それに、あまり空は昔の話はしたがらなかった。

「ねえ、琥珀。晩御飯どうしよつか。」

物思いにふけっていると、突然空に話し掛けられた。

「そうだな・・・、今日は入学式だったから少し贅沢して、外食でもするか。」

そう提案してみた。

「えっ、ホントに！？やったー。」

隣ではしゃぐ空を見て、琥珀の顔が自然とほころんだ。

「ねえねえ、何食べる？何食べる？やっぱりお寿司とかかなあ？」

お祭り騒ぎとは、この事だろう。

近くにいる空は小さな子供のようにはしゃいでいた。

「空の好きなところでいいぞ。」

ということ、晩御飯はお寿司だそうだ。

そしてその夜は、お寿司となった。

~~~~~

「じゃあまた明日ね。」

そう言っ、空は自分の家に帰って行った。

夕食から帰ってきた二人は、家の前で挨拶を交わしてそれぞれの家に入ってしまった。

（今日は早く寝よう。）

琥珀はそう思い早めにベッドに入った。

（そっか、もう3年になるのか。

早いな。）

~~~~~

「琥珀起きろー！ー！」

今日も朝から大声と、激しく身体を揺らされる感覚で目が覚める。

「おはよう、空。」

「今日から授業だよ。ほら、しゃきつとして。」

「ああ、そうだったな。すぐ行くからご飯食べててくれ。」

「二度寝したら雷落とすからね?」

「大丈夫だ。」

空のことだ、本気でやるに違いない。

空は”火”の属性が得意だが、基本属性である”火”、”水”、”風”、”土”の4属性が使える数少ない魔法遣いである。

ただ、属性が4つしかないというわけではない。

だが、今もつとも研究者の間で支持されているのはこの考え方のようだ。

大きく分けて、魔法は3種類

攻撃系統を得意とした黒魔法

回復、肉体強化を得意とした白魔法

そしてそれ以外

3つ目は魔法遣いの中でも”異能”と呼ばれている。

精神感応などである。

しかし”異能”ということもあり、あまり研究は進んでいない。

「つと、急がないとホントに落ちてきそうだ。」

~~~~~

「おつす、琥珀。」

教室に着くと、もう明は来ていた。

見た目の割にはマメなのだろうか。

「おはよ。早いな。」

まだ二日目なので、無難な挨拶にすることにした。

「ああ、どうも日が昇と目が覚めちまうんだ。」

野性的な明は動物的な感覚を持っているんだろう。

またしても明に対して失礼なことを考えていた琥珀は、のんびりと朝の用意に取り掛かった。

「そういえば、一限は実技らしいぞ。さっさと着替えて体育館行こうぜ。」

「わかった。ならさっさと行こう。」

俺と明は着替えて体育館に行った。

「なあ琥珀。」

「どうした？」

明は不思議そうに俺の顔を覗いてくる。

「それ、取らなくていいのか？」

俺の右耳のピアスを指差しながら言った。

「ああ、これはいいんだ。」

ピアスは両親の残したものである。
いわゆる形見つてやつになる。

琥珀には記憶がないからわからないが、助けられたときに握り締め
ていたそうだ。

そのことから考えても、形見ということにしてあった。

「ふん。まあいいや。琥珀はどんな魔法が得意なんだ？」

あまり興味がなかったのか、明はすぐに話題を変えてしまった。

琥珀は昔の話ができないので、すこしほっとしてその話題に乗るこ
とにした。

「んー、得意はないが苦手もないな。しいて言うなら”水”かもし
れないな。」

「ってことは…、4元素すべて使えんのか!？」

驚いた様子で明が詰め寄ってきた。

「使えなくはないが…」

そう使える。

使えるのだが、俺の場合は少し違う。

「それってすげえじゃねえか!!」

「俺の場合は、魔力のほうの問題なんだ。だからFなんだよ。」

魔法とは、

魔法を理解すること、すなわち基礎理論の理解。

魔法を使用するための魔法の構築。

そして、もつとも重要になるのが魔法を発言させるための魔力。

基礎理論、構築は後天的なものによる。

つまり努力すれば改善（より早く展開）することができる。

しかし、魔力は生まれ持ったものである。

つまり、いくら勉強し、訓練したところで魔力は増えない。

魔法は生まれた瞬間にすべて…とまではいかないものの8割は決まってしまうのである。

「なるほど。親は魔法遣いだったのか？」

明は気にした様子もなく聞いてきた。

「いや、一般人だ。」

そう両親は魔法使いではなかった。

けど琥珀には魔力があった。

俺の記憶がある範囲でだが。

両親のことは空に聞いたことがすべてであった。

「じゃあ、突然変異って感じだな。ちなみに俺は、”土”系統しか使えない。それと俺は実技以外はとことんダメなんだよ。」

そう言っつて明は笑っていた。

それにしてもまたイメージ通りの気がする。

本当にワイルドって言葉が似合う男であった。

「さて、そろそろ時間だな。ところで明、なんでこんなに生徒が多いんだ？」

明と話し込んでいるうちに続々と生徒が体育館に入ってきた。明らかに1つのクラスだけじゃないな。

「ああ、1年全員での実技だそうだ。」

「ってことは、SもAも一緒なわけか。」

そう思い空がいるのかと思ってあたりを見ようとしたら、ちょうど空に話しかけられた。

「琥珀に明君。一緒に授業だね!。」

周りの視線を一身に浴びながら、空が近づいてきた。

周りの視線がまったくもって痛い。

そんなことは、空にはわからないようだけど。

「よお、空。空も実技か?」

「そうだよー、なんか一年生の实力を見るためなんだって。」

(なるほど。)

そのための一年生全員での授業か。(

「琥珀は…取らなくていいの?」

空は右耳に視線をやった。

琥珀は軽く首を振り

「いいんだ。空も覚えてるだろ?」

「そ、そうだけど…でもっ！」

そういいかけたところで、忘れ去られていた明が割って入ってきた。

「こら、俺を忘れてないか？まったく二人だけの世界に入りやがって…」

すっかり明のことを忘れていた。
とはさすがに言えないので

「あ、悪かった。」

素直に謝っておくことにした。

「べ、べべ、別に二人の世界に入ってなんか…！」

「空、何を焦ってるんだ？」

隣で突然空がオロオロしだした。
相変わらず無駄に元気なやつだ。

「焦ってなんか！…ないよ。それよりもう授業始まるよっ。」

そう言われて、体育館の壁にあるデジタル時計に目をやった。

「ん、そうだな。空も早くクラスのこと言ったほづがいいんじゃないのか？」

「そうだね！そうするっ。」

そう言うなり空は走って自分のクラスのいるところ走到了。そんな琥珀の空に対する様子を見て、明は琥珀に話かけた。

「お前って、クールなのな。」

「??、どういうことだ、明?」

「何でもねーよ。俺たちも行こうぜ。」

そう言いながら俺たちもクラスの人の所に行った。クラスメイトの大半はもう大体きていた。

~~~~~

「では、今から魔法の実技授業に入る。名前を呼ばれたら順にこっちに来てくれ。」

どうも一人ずつ自分の使える魔法を見せるらしい。ただ、自分でコントロールできる限界の魔法を見せてほしいのと。

つまり最高位の魔法を見せなければいけないらしい。

「ん、どうしたものかな。」

「どうした、琥珀。緊張でもしてるのか?」

そういう明は、緊張とは無縁の顔をしている。

「いや、そうじゃなくて…」

「なんだよ、トイレか？」

「違う。そのなんだ、俺は上位魔法が使えないんだ。」

俺は上位魔法を使うための魔力がない。

「なんだ、そういうことか。」

あっけらかんと明が言い放った。

そんな明を見た琥珀は、

「明は魔力多そうだもんな。」

俺はそう言っつて、明を見た。

「まあ魔力はあるんだがな。どうも理論と構築がつかまらずいてて思いのほか使えないんだ。」

琥珀はなんとなく納得してしまった。

明は見た目通りに細かい作業が苦手だということがわかった。

「大雑把っつてわけか。なんだか納得できるよ。」

「琥珀もなかなか言っつてくれるな。まあ間違っつていないから何もいえないけどな。」

そう言っつて明は隣で笑っつていた。

魔法は、使っつた魔力⇨現実に現れる魔法の威力

というわけではない。

つまりは、途中でロスが出てしまっているのだ。

魔法の威力と呼ばれるものを上げる方法は3つある。

- 1つ目は、魔力を大量に使う方法。
- 2つ目は、ロスを減らし効率的に具現化する方法。
- 3つ目は、魔法具と呼ばれるものを使うこと。

「冴原琥珀。」

「はい。んじゃ行ってくるよ。」

「ほいよ、無理してぶっ倒れるんじゃねえぞ。」

「気を付けるよ。」

琥珀は明の視線を背中に感じながら、呼ばれたほうに歩きだした。

「冴原、得意な属性でいいから自分が出る限界の魔法を見せてくれ。」

（そう言われてもな・・・

実際の属性の魔法を使えるけど、上位魔法が使えないんじゃない）  
たいていの魔法が使える人間はどれかひとつ上位魔法が使えるものである。

それは琥珀にとって致命的な問題であった。

「わかりました。」

（とは言え、授業では仕方ない。  
自分出来る限界か・・・）

「水よ、集いて我が姿を写せ、アリアス」

永唱が終わると共に、周囲の空気が急速に冷却されていき水が作り出された。

そしてその水を自分の制御下に置き、コントロールして自分にそっくりな水の分身を5体作った。

「うむ。少し動かせるか？」

「はい。」

”水”は多少得意なだけあって、琥珀は教師の注文にも答えることが出来た。



上位魔法ではなく、中位魔法である。  
しかし、自らの分身を作り出すということは魔力以上に制御能力が試されるのである。

「OKだ。もういいぞ。」

そう言われてから、魔法を解いた。  
自らの姿をした分身は、構成されている水分をすべて蒸発させてその場から消え去った。

「水分身か、まあ普通だよな。ただ5体とは驚きだがな。」

終わるなり明に声をかけられた。

「ああ、魔力が少ないからな。仕方ないさ。」

そう言いつつ、空のいる方に目を向けた。  
ちょうど今から空が始めるようだった。

「おつ、空ちゃんだぜ、琥珀。」

明も気が付いたみたいだ。

（みんなが空の魔法見て落ち込まなきゃいいがな。）  
そんな心配をしていると、空が永唱し始めた。  
体育館の中に緊張が走った。

「地獄の業火よ、我が障害を焼き払え、フレイム」

やはり学年のトップの空にはみんな注目しているようだった。

琥珀は、空の集中力が爆発的に増えたことを表情から読み取ること

ができた。

次に膨大な魔力が収束していき具現化し始めた。すると、急に体育館の中の温度が上がった。

そして、空の目の前にあつた空間に黒い焰が現れた。

「うっわフレイムかよ、空ちゃん上位魔法をあつさりっちゃったぞ？」

隣で明が予想通り驚いていた。

周りの生徒たちも明と同じような反応だった。

でも空が本気になれば体育館が丸焼けになりかねない。

そこら辺は、空もしっかり考えていたようだ。

「こら、三島明！お前の番だぞ。」

突然言われて、明は何の事かわかっていない様子だったが、自分の順番だと分かるとすぐに教師の元に向かった。

「でも相変わらず空は凄まじい魔力だな。」

終わった空に声をかけた。

「まだまだだよー。」

嬉しそうに笑っていた。

(実は褒められて嬉しいのだろう。)

「ん、明。終わったのか？」

いつの間にか戻ってきていた明に気が付いた。

「・・・ひどいな、琥珀。」

明は落ち込んでいた。

( 案外ナイーブな神経らしい。 )

「すまん。それで明は何をしたんだ？ やっぱり”土”系統か？」

「まあそういうことだ。そもそも”土”しか使えん。お前達がすごいんだよ。」

「確かに空はすごいと思うよ。」

そう言つて、二人の視線は空に向かった。

「そ、そうかな!？」

空は少し照れていた。

中学までは、普通の学校に通っていたから褒められ慣れていないんだろうな。

学園は魔力がある人間ばかりだが、中学校は違った。

魔力があるというだけで、怖がられたりやつかみの対象になったりと。

それにさらに厄介だったのは、空の容姿だった。

魔力がある上にかわいかったから、女子からはあまり良くは見られていなかった。

「空ちゃんの魔法すごかったぜ。またファンが増えたんじゃないのか？」

明は周りに視線をやると、案の定男子がこちらを見ていた。空の人気ということもあるだろうが……

「俺達がFだからという可能性もあるけどな。」

「ああ、それもあつたな。」

魔法遣いの世界は、絶対的な実力社会才能のあるものは、才能を生かせるようにあらゆる特別扱いを受けることができる。

この学園でもその例外ではない。現にクラスというものが顕著に表している。

「私はそんなの気にしないよ?」

「空は気にしなくとも、周りは気にするんだ。」

「そうだな、でもそれも仕方ないんだろうけどよ。」

明はそういうこともちゃんと分かっているようだ。

「うーん、でも私は琥珀の味方だよ。」

笑顔で空が言い放った。

だから、周りの視線が……

「そして何故明まで俺を見るんだ。」

明が俺をジト目で見てきた。

「果報者が。」

そんな感じで、初めての授業は終わった。  
ただ、琥珀はさし語の明の言葉だけは理解できなかった。

~~~~~

実技の授業以外は特に目立ったことはなかった。

1世代前なら教室に教師が来て全員で授業をしていたそうだが、科学技術が発達した現在は、各個人の席に端末がありそれを使い授業を受けるという形式である。

「琥珀、飯どうすんだ？」

昼休み、明が待ちに待っていたと言わんばかりに琥珀の席にすぐに来てきた。

「特に決めてない。明はどうするんだ？」

「なら学食行ってみようぜ。うまいらしいぞ。」

「ならそうするか。学食ってどこにあるんだ？」

(そつえば、学園内のことあんまり知らないな。
帰ってから調べるか。)

「体育館の近くだったと思うぞ？」

琥珀は、明について学食に行った。

学食も予想通り無駄に広がった。

明と適当にメニューを決め、空いてる席を探して座った。

「結構混んでるんだな。」

と言っただけから、ふと空がいるかもしれないと辺りを見てみた。

「琥珀！やっぱり学食来てた。明君も一緒なんだね。」

見ていた方と全く別の所から空が現れた。

「空も学食なんだな。にしても・・・多いな。」

空の周りには5、6人の男女がいた。

さすが空と言ったところか。

もうこんなに友達ができたのか。

それとも、空がかわいいからか…どちらにしる人気者に変わりはない。

「みんなと学食に食べに来たんだ。琥珀と明君も一緒にどう？」

ニコニコと元気な笑顔を向けた空とは対照的に、周りのクラスメイト達はあからさまに嫌そうな顔をした。

普通はFに良い印象を持っている人間なんかいない。

「いや、俺も明もすぐ終わるからまた今度にするよ。」

琥珀がチラッと明を見たら、どうやら明も理解したようだ。

やはり”S”クラスの間には優越感に浸っている人間が多いようだった。

「んー、そっか。ならまた今度ね。」

そう言っただけで空は、残念そうに去って行った。
周りの反応は違ったようだが。

「やっぱりFにいるってだけでこうなるんだな。」

そう明が言い、残りの食事を済ました。

あまりその発言の内容を考えないようにして、琥珀は頼んでおいた
ラーメン定食を食べ始めた。

~~~~~

放課後

「琥珀は部活やるのか？」

「明はやるんだろ？」

明は見た目にも内面も運動部だった。

それは男子ならば一度ぐらいならあこがれた体型かもしれない。

「当たり前だ。」

やはりと言って良いほどの返事であった。

「ちなみに何部にしたんだ？」

大体想像はつくが、ここは聞いておくことにしよう。

「俺はサバイバル部だ。面白そうだろ？」

… 似合いすぎる。

あまりにも似合いすぎてどう反応を返して良いか一瞬迷った。

「… ああ、ピッタリだと思うぞ。今日は行くのか？」

「もちろんだ。琥珀はどうするんだ？」

「俺は部活をするつもりはないよ。」

俺がこの学園にきた理由は部活をするためじゃない。

「そうなのか？ そっか、まあ気が向いたら見たらいいか。」

「そうするよ。行かなくて良いのか？」

「おおっ、もうこんな時間じゃねえか。行ってくるわ。」

そう言って、明はすぐに教室から出て行った。

さて、空はどうするんだろっ。

ポケットから携帯端末を取り出し、空に電話してみた。

~~~~~

「琥珀ー、帰ろっか。」

そう言って空が教室を出ようとした時

「あれ、空ちゃん帰っちゃうの？」

教室の中から空を呼ぶ声がした。

空のクラスメイトのようだ。

そして隣にいる俺を冷めた目で見ていた。

(そんなに俺と空がいるのが気に食わないんだろうか。)

「みんなで、お茶の飲もうって話してたんだけど…」

そう言って空の様子を伺った。

「そうらしいけど、どうするんだ？」

とりあえず聞いてはみた。

「うーん、どうしよう…」

空は少し迷っていたようだが、ここは一肌脱ぐことにした。
変に対立してもギスギスするだけである。

「せっかく誘ってもらったんだから、行ったらどうだ？」

「でもそれだと琥珀が…」

「俺は一人でも家に帰れるさ。」

「…わかった。行ってくるね。」

~~~~~

琥珀は、せつかく時間が空いたので図書館で過ごすことにした。さすが日本屈指の学校というところだ、蔵書量が半端ではない。その中には部外者が閲覧することができない資料もある。

そもそもこの学校に入ったには2つ理由があった。

1つ目は、魔法の制御

2つ目は、3年前の事件のことである。

そのとき気が付くとすでに病院で寝ていた俺には何も記憶がなかった。

それどころか記憶がまったくの白紙になっていた。

自分が誰なのか、それすらわからなかった。

あとから聞かされたことだが、そのときの事件で両親も亡くなっていたらしい。

記憶がなくなってしまった俺には悲しむこともできなかった。

そして同時に空という少女を知った。

同じ日、同じ場所で同じ事件に遭っていたのだ。

空も両親が死んでしまったらしい。

空の両親は魔法遣いの間でも知らぬものがない程の使い手であった。

その当時、相当ニュースになっていた。

自分なりに調べてみたが、報道でやっていること以上のことは分からなかった。

そこで、この学校に来てみたら少しは真実が分かるかもしれないと思ってきたのだ。

まずどつちから調べようか。

棚を覗きながら見て回った。

ふと目に入った本が少し気になったので手に取って見てみることに

した。

「魔法制御基礎概論……」

いつの本だろうか。

少なくとも最近のものではないな。

近年の書籍というものは、紙と言う形式をとらない。  
電子ペーパーが多いのだ。

館内に空いている席を探して読むことにした。

持ち出しは禁止のようだ。

(当然といえば当然か。)

魔法とかすなわち、その国には兵器と同義である。

つまり、研究結果は必然的に極秘扱いになる。

他国に研究結果がわたることがあれば、国家が潰されかねないのだ。  
何世紀も前は核兵器が世界に広がって脅威の対象だった。

だが今ではそんな兵器でさえも、魔法があれば脅威でもなんでもな  
くなった。

その結果、核は兵器としての機能を果たさず、放棄されたのだが。

しばらく琥珀は、その本を読んでいたが、どうも今日中には読みき  
れそうになかった。

(しばらく通うことになるかもしれないな。)

~~~~~

「ん？なんだこれ……」

だいぶ読んだだろうか。

少し気になる項目があったので詳しく読もうとするともう下校時間であることを思い出した。

「明日にするか。」

資料のことはすこし気にかかるものの、今日は帰ることにした。

家に着くと、空が来ていた。

「琥珀、お帰り。どこか寄ってたの？」

「少し図書館に行ってた。そうだ空……」

さつき読んだ資料のことを空に聞いてみた。

そんなことが有り得るのか、そもそもそんなことが可能なのか。

「えっ……聞いたことないな。パパもママもそんな話したことなかったよ？」

「そっか……けど、気になる内容ではあったな。明日また調べてみるよ。」

そう言うってから部屋に行き、着替えて再びリビングに戻ってきた。

あの事件以来空は俺の家でご飯を作り一緒に食べるようになった。

空には記憶のことは話せないでいる。

もしかしたら空は気付いているのかもしれないが、空は何も言わなかった。

空にとっても両親の死ということ辛かっただろうに、俺にはそんな様子はめったに見せなかった。

~~~~~

「じゃあ、おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。」

ご飯を済ませて、空は帰って行った。

空が家に入ったのを見届けてから、琥珀は家を出た。

その様子を空が見ていたことに気付かずに。

~~~~~

「今日の獲物だ。確保できるならしてくれ、もし無理ならそのときは……」

「分かっています。そのために俺が来ているのですから。」

スーツを着た男に少年が言い放った。

まるでなんでもないことのように。

「じゃあ、頼んだぞ。」

そう言ってスーツの男が去っていった。

「獲物は第三倉庫か。」

少年は歩みを始め、右のピアスはずした。

「おい、こんなとこでなにしてんだ。」

第三倉庫の前にいた男がさげんだ。
すると奥から銃を持った男が3人ほど出てきた。

「かわいそうに、知らなかったら死ぬこともなかったのにな！」

いかにも楽しそうに言った。

そして少年に銃口を向け、引き金を引いた。

~~~~~

すべてが終わった倉庫の中は静寂が包んでいた。  
なにもなかったように。

「榊さんですか？俺です。」

ポケットから取り出した端末で、先ほどのスーツの男に連絡を入れた。

「はい。すべて終わりました。あとはお任せします。」

伝え終わると端末をしまい、帰路についた。

すこしして、榊と呼ばれるスーツの男と何人もの警官がやってきた。  
現場を見た榊はため息をつかずにはいられなかった。

「わかっていたことだが…ホント何も残らないんだよな。」

すべて消えていた。そこにいたはずの男も仲間も何もかも。

（悪魔のような奴だよ。）

男は、心の中だけで悪態をつき仕事を始めた。

そう、悪魔にしているのは俺たち大人なのだから…と

朝

今日から、入学式やら授業やらでしばらく休んでいた空との魔法の修行を再開することにした。主に空に教えてもらう側であるが、理論などは琥珀が教えることの方が多い。

空は魔力が多い故に、多少のロスがあっても力を発揮できるため制御の方は苦手なようだった。

空に言わせてみれば、細々としたことは苦手だそうだ。

「さてさて、今日は何しますか琥珀さんや。」

おどけたような空に琥珀もすっかり慣れてしまった。

ちょうど昨日行った図書館で、便利な魔法を見つけ出し今日からそれを練習しようと思っていた。

「昨日図書館で見つけたんだが、面白い魔法があるぞ?」

そう言うなり空の目の色が輝いた。

たしかに最近新しい魔法に挑戦するということはなくなっていた。

それは、空がすぐに出来てしまうということがあるのだが…

「何何?すごい魔法だったりする??」

「すごいかどうかは分からないが、便利であるな。マスターしたら、朝もつ30分寝れるぞ。」



それを聞いた空は俄然やる気になっていた。

「ゲートっていう魔法だ。聞いたことぐらいはあるだろ？」

「おお、知ってるよ。やるやる じゃあ呪文とコツ教えてよ。」

ホントに空はやる気満々みたいだ。

琥珀は、さっそく空にポイントと呪文を教えることにした。

「呪文は《わが道を創れ、ゲート》だ。」

魔法にとって呪文とは始動キーになるもので、必要といわれている。だが、呪文さえ唱えたら魔法が発動するとは限らない。

魔法にも練習が必要なのである。

それが足りないものが”異能”と呼ばれる魔法である。

逆に言えば、”異能”とは生まれつきの才能がないと使うことができないわけだ。

「よっし、どっちが初めにできるか勝負だね琥珀。」

そう言い切って空は集中し始めた。

辺りの空気がピリピリしだした。

空の中に魔力が高まるのが感じられる。

「わが道を創れ、ゲート」

さあどうなるか、今まで空はほとんどの魔法をすぐにマスターした。昨日の”フレイム”などは上級魔法なだけあって練習を必要としたが、空には他の魔法遣いがうらやむほどの才能があった。

「…」

が、しかしどうやら失敗みたいだった。  
収束された魔力は行き場を失い、急速に霧散して消え去った。

「あれれ、失敗失敗。琥珀もやってみなよ。先に出来たら1週間お  
弁当作ってあげようか？」

空は悪戯な笑顔を向けた。

（お弁当というのは魅力的な提案だけど…）

目を閉じて集中しだした。

魔力の高まりを感じつつ、魔法のイメージを作り始めた。

（この魔法は、ゲート。

つまり扉で、空間と空間をつなげる。

だったら…）

琥珀は、昨日図書館で読んだ内容を反芻した。

そして意を決して、叫んだ。

「わが道を創れ、ゲート」

すると、目の前の空間が裂けその中に道のようなものが出来た。

そばで見えていた空は悔しそうな顔をしていた。

「ぶー、琥珀に負けたー。まさか一発で成功するとは思ってなかったよお。ねえねえ、これってどこに繋がってるの？」

（そういえばどこだろう。）

本当に自分でも成功するとは思ってなかったから、出口のことは考えてなかったな。

まさか入り口だけじゃないよな？）  
琥珀の頭に少し疑問が浮かび上がり、そしてそのことが頭から離れなかった。

「入ってみるよ。気になるしね。空は少し待ってて。」

（多少不安ではあるが、成功かどうかはまだわからない。）  
琥珀は恐る恐る裂けて出来た空間に足を進めていく。  
空間のなかは真っ暗というわけでなく、薄暗い月明かりのある夜のようにであった。

「出口が見えてきたな。」

誰もいない空間で、見えた出口に向かってひとりでに口が動いていた。

一際明るい空間が目の前に現れた。  
琥珀には最も見慣れた風景だった。

「琥珀、なんで家から出てきたの？」

不思議そうに空が聞いてきた。

「ああ、出た先が俺の部屋だったんだ。自分でも驚いたよ。」  
そう言うと空は笑っていた。

「琥珀らしいね、なんだか気が抜けちゃった。そろそろ朝ごはんにしよっか。」

練習が少ししかできなかったが、仕方がないとあきらめ家に身体を

向けた。

( また明日からやればいいことだしな。 )  
自身に言い聞かせるように心の中でつぶやいた。

「 そうするか、今日は俺も作るの手伝うよ。 」

~~~~~

「 おつす、早いな琥珀。 」

教室に着くともう明が来ていた。
相変わらず朝は得意なようだった。

「 明には勝てないけどな。 」

そう言つて琥珀はかばんを机に置いた。

(今日は午前が教室での授業か。)

移動は： 6 限の魔法基礎理論か。)

「 今日も相変わらず仲良く登校してんのな。 」

明が近くの机に座った。

「 今日は朝から魔法の練習してたからな。 明は ” ゲート ” 使えるか ? 」

1 限の授業の用意をしながらふと明に聞いてみた。

「 ” ゲート ” ? 俺は使えないが、親父とか兄貴は使ってた気がするな。それがどうかしたのか? 」

「今日の朝空と練習してたんだ。それで気になっただけ。」

「もしかして出来たのか？」

「空は無理だったけど、俺はなんとか形にはなったよ。繋がった先が自分の部屋っていう情けない結果だったかな。」

琥珀は苦笑しながら明に言った。

(そもそも繋ぐ先の指定を忘れてたんだよな。)

「お前それって…すごいんじゃないのか？」

「うむ。これをマスターすると、朝30分寝ることが可能になる。」

笑いながら明に言うと、

「それはすごいな。俺にも教えてくれよ。」

(この明の食いつき様はなんだろうか…)

まあ明のことだ、山にでも行くんだろうと琥珀は、勝手に納得することにした。

「明は早く起きてるしいらんじゃないのか？まあ、今度時間があればな。」

「頼んだぜ！」

そんな会話をしているうちに朝の短い時間は終わりを告げた。

~~~~~

「おーい琥珀。次移動だぞ。行こうぜ。」

(次は魔法基礎理論だったっけ。)

「そうだな。ちょっと早めに行つて聞きたいことがあるんだけど、いいか?」

昨日図書館で見たあの記事のことを聞いてみようと思っていた。資料自体古いものだったので、それが事実かどうか確認したかっただけなのだが。

「おーけー。ならさっさと行こうぜ。」

そう言つて明が振り返つてドアから出ようとした時

「あいたつ…」

明のデカイ体に隠れて見えなかったが、向こう側に小柄な女子が立っていた。

その女子に明がぶつかつてしまったのだ。

「おつと…大丈夫?」

琥珀はとつさに体を動かして、なんとかその生徒が転ぶのを防いだ。えつと確かこの人は同じクラスの

「東条さん?」

「えっ？ああ、うんそうだよ！」

「あ、悪い大丈夫か？」

少し申し訳なさそうに明が東条さんに謝った。

「ううん、大丈夫だから。冴原くんだよ？ありがと。」

「いえ、大丈夫それで何より。明も気を付けなよ？デカイんだからさ。」

少しおどけたように言ってみると、明はさらに申し訳なさそうに謝った。

「んじゃ、気を取り直して行くか。東条も一緒に行こうぜ。」

ホントにフレンドリーな奴だな。

さて、東条さんはどうするのかな？

チラッと彼女のほうを見ると、明るくうなずいていた。

「いいよ。行こう行こう。」

なんだか東条さんも親しみやすい人のようだ。

（明とは馬が合うかもしれないな。）

そんなことを思いながら3人で授業の教室まで行った。

残念ながら、ゴタゴタのせいで時間がなくなり聞くことはできなかつた。

（担当の名前は何だったっけな。）

そんなことを考えているうちに授業が始まった。

「えー、魔法基礎の担当の杉下です。」

なんか見た目も中身も普通。

この人大丈夫なのか？

つい疑ってしまいそうなほどおっとりした人であった。

「そうですね、説明するより見てもらった方が早いので……」

そう言つて、手の中に炎をともした。

そして次の瞬間、赤いはずの炎は青になった。

教室の誰もが驚いた様子だった。

「まあ、見てもらった通りに、魔法を知り、魔法を理解し、制御するところのようになるわけです。」

生徒の目は先ほどの疑惑を浮かべざるを得ない時とは表情が一変した。

「魔法制御は、魔法遣いに取ってはもっとも重要な技術です。この制御が上手くいかなければ、暴走し最悪の場合は自分に被害がおよびますからね。」

そう言うなり、手元の端末を操作した。

出席はIDカードで確認できるので何をやっているのかと思ってい  
たら、おもむろに顔をあげた。

「このクラスでは、そうですね…冴原くんが一番この制御ができて  
いますね。」



そしてこつちらに視線を向けた。  
何を思っているのか分かりかねる表情だった。  
個人的にはあまり好きになれない男のようだった。

「この授業は主にこの制御が中心となります。まず、3人ペアになつて今見せたことが出来るようになってもらいます。」

俺は明とペアになった。

やはりこつというグループ的なものは気心が知れたもの同士が一番やりやすい。

「あと1人どうすつか。あつ、東条一緒にどうだ？」

明は近くにいた東条さんに声をかけた。

「うん。一緒にやるー。」

東条さんも、もう明に慣れた様子だった。

(なんとなく空に似ているのか、どことなく親しみやすいな。  
琥珀は、そんなことを暢気に思っていた。)

「じゃあ、始めてください。できたら言うってくださいよー。」

この先生も暢気だ。  
平和な光景だった。

「一番にできたらジュースな。」

明が勝手に勝負を始めてしまった。

なんとなく聞いたことがあるセリフだった。

「ええ！？ちよつと待つてよ。」

東条さんも負けじとやり始めた。

どうやらのんびりしているとジューズをおごらされてしまいそうだ。

一呼吸置いて、集中力を高めた。

この程度なら呪文は必要ない。

まず右手に炎をともした。

ここまででは簡単だ。

次に、この赤い炎を青に変える作業だ。

「できねえ。」

明が近くで唸っていた。

その声をかすかに聴覚で捕らえながらも集中力は切らさなかった。

青い炎…青…

そう強くイメージした。

魔法はそうしたイメージが結構重要になってくる。

そして、目を開けた。

「ん、出来た。」

小さくつぶやくと明が振り向いた。

「ちつ、あとは俺と東条の一騎打ちだな。負けたらジューズだからな。」

明は東条さんに言うなりまた集中した。

東条さんはコツをつかめばすぐにできそうだ。

「あれ、冴原くんできたのですか？」

見回りをしていた杉下先生に声をかけられた。

「あ、はい。」

「そうですか、さすがですね。君がFにいるのが不思議なぐらいですよ。」

笑いながらそんなことを言った。

馬鹿にしているのか、褒めているのか、どちらに取るべきか。

琥珀はそんなことを考えていた。

ふと、さっき聞きそびれたことが頭によぎった。

「あの、少し聞きたいことがあるんですが……」

不思議そうな顔をしてこちらを見てきた。

「何ですか？質問ですか？」

そして昨日からの疑問を口に出して聞いてみた。

果たしてそんなことが可能なのか。

「…理論上は可能と言われているし、実際に使える人もいる。だがそれはかなりの難易度であることは間違いないよ。」

可能なのか。

その言葉を聞いた瞬間今までもやもやしていたものがすっきりと晴

れた気がした。

結局その人授業では俺以外に課題をこなせたものはいなかった。  
ジューズは二人のうちどちらかができるまで待つこととなった。

EPISODE 1 - 5

その日の放課後

東条さんと明はやはりと言ってよいのか、馬が合つよつで仲よさ気  
にしゃべっていた。

「ねえ、3人でお茶でも飲みに行こうよ。」

言いだしたのは東条さんだった。

特に予定もなかったので、琥珀は行こうかと考えていた。  
そのときふつと1人の顔が思い浮かんだ。

「いいけど、もう1人誘ってもいいか？」

空を誘ってやろうと思った。

多い方が盛り上がるだろうと思つてのことだった。

「もちろん。それで誰を誘うの？私の知ってる人？」

東条さんは嫌な顔せず、承諾してくれた。

明はすぐに誰を誘うか気が付いたみたいだった。

「知ってるかはわからないけど、有名ではあるかな？」

「空ちゃんか？」

「えー、誰誰？」

「ほら、新入生代表で前で話してた奴いただろ？そいつだよ。」

明が先に言ってしまった。

「明バラすの早過ぎ。」

「えっ、有名ってすごい人じゃん。なんで2人は知り合いなの!？」

そんなに空は有名人なのか。

改めて空のカリスマ性を知った。

「琥珀の幼なじみらしいぜ。」

「まあ、そういうこと。良いかな？」

「もちろん。」

というわけで、早速3人で空を呼びに行くことにした。

(図書館は明日にしよう。)

ぼんやりと考えているとすぐに空のクラスの前に着いた。

「空、いるか？」

扉を開けて空を呼んだ。

教室の中には人が半分弱残っていた。

あとは部活だろう。

「あ、琥珀と明君。どうしたの？帰るの？」

同じだけ授業を受けたのにこの元気有り余る空は、やはりすごいと思っただ。

「みんなでお茶するんだと。それで空を誘いに来たって訳。どうする？」

空は少し考えて、決まったのか返事をしようとした時、教室の中から空を止める声が聞こえた。

「そんな”F”の奴らと行くぐらいなら、俺らと行くつよ。」

男3人組みのグループの1人が言ったみたいだ。

やはり、目に見えて嫌な笑みを浮かべていた。

相当俺たち”F”が嫌いのようだ。

冷静に相手のことを見ている自分がいた。

「てめえ、ふざけてんじゃねえよ!!!!」

若干1名、冷静じゃない奴がいた。

「ああ、なんだよ”F”のクセしてよ!?!いつちよまえに調子になよ!?!」

(おお、なんか理不尽な喧嘩が勃発したな。  
むしろお約束なのかもしれないな)

「そつだよ、明の言う通りだよ!!!!」

あれー、東条さん。

なぜあなたは明の援護射撃されておるんですか。

こんな状況でものんびりと考えている俺の方が変なのか。

「こ、琥珀どうしよ。」

うむ。

空のリアクションが正しいと思うぞ？

「そうだな。困ったな。」

一触即発な雰囲気だった。

「”F”がいきがつてんじゃねえ。」

急速に魔力が高まった。

(ちよつとやばいかも。)

少しもやばそうな感じがしない琥珀は、どうしよつかと考えていた。その間にも騒ぎが大きくなっていく。

「ああ、どうしよどうしよ。」

琥珀の隣で魔力を感じた空は誰よりも焦っていた。

「なんだやんのか？」

明と東条さんも魔力を高めはじめた。

勝ち負けの問題じゃなく、学園内の魔法の使用は厳しく管理されている。

それを破ることは、下手をすると退学ということになるかもしれない。



「落ち着け、明。東条さんも。」

(言って止まるとは思わなかったが、何もしいよりはいいか。)  
空も空でなんとか止めようとしていた。

「その1年。なにしてるんだ。」

突然人垣の向こうから人が現れた。

2年の女子だろうか。

「魔法の使用は禁止なはずだが？どういうことだ、説明してもらおうか？」

何者だろう。

普通先輩でもここまで言う人はいないだろう。

「おい、あの人…」

周りが騒ぎ出した。

何か知っているのか？

とりあえず誰でも、魔法使用を見せるのはまずい。

「うっ…」

相手はこの上級生を知っているのか、完全に冷静さを失っていた。

「なんでもありませんよ？そうだよな明、東条さん」

「お、おう、何でもない。」

「う、うん。なんでもないよね。」

「というわけですよ、先輩。お騒がせしてすみません。」

上手く誤魔化されてくれるように、琥珀は笑顔で対応した。大丈夫だと思うのだが。

「そう、なら何も言わないわ。」

特に注意する様子もなくそう言った。

「ところで、一条さんはいるかしら？」

突然名前を呼ばれた空は、びっくりしていた。

「は、はい！一条は私ですけど…えっと、どんな御用ですか？」

おどおどしながら、その上級生に尋ねていた。

「少し時間あるかしら？」

一度こちらを見ていたが、俺がうなずくとすぐに先輩に返事をした。

「あ、はい。大丈夫です。」

そう言ったきり二人はどこかへ行ってしまった。

このメンバーで残されて、いったいどうしたらいいのやら。

「琥珀、東条、行こうぜ。」

最初に切り出したのは明だった。

それに東条さんもうなずいた。

空のクラスメイトは何も言わなかったが、悔しげな目を俺に向けていた。

「なんかお茶っつていう雰囲気でもなくなっちゃね。また明日にでもしようか。空ちゃんもどっかいつちゃったし。」

「そうだな、東条の言う通りだな。また明日にしようぜ。それにしてもさっきの女はだれだったんだ？」

明も東条さんも不思議に思っていたが、誰も知らない以上何も分かんなかった。

そのあと、明は部活に顔を出すと言って行ってしまい、東条さんも先に帰ってしまった。

空を置いて帰るのも悪い気がしたので、端末でメールをしておき待つことにした。

~~~~~

行くところもなく、結局昨日と同じ図書館に来ていた。

目当ての本は見つけることが出来なかった。

誰かが読んでいるのか？

ないものを探し続けている時間ももったいないので、違う本を讀んで過ごす事にした。

空から連絡があったのは、それから3、40分たったころだった。

校門で待っていると伝えたので、図書室を出てすぐに校門のところに行った。

「まだ来てないな。」

ぼんやりと校舎の方を見ていた。

春の風が頬をかすめて、そのまま学園の中に入っていった。すこし緑の葉が付いているものの、まだ桜は咲いていた。

「ごめん、琥珀。待たせちゃったかな？」

校舎の入り口から走ってきた空がいきなり謝ってきた。

「大丈夫だ、それでいい。何だったんだ？」

気になっていたことを聞いてみた。

「ああ、うん。執行部に入ってくれないかなって言われたんだ。」

執行部：

主に生徒の取り締まり、いわば警察のような学園内の組織。

ただ、強制的に生徒を止めることもあり、それなりに強くなくてはいけない。

そこで空というわけか。

「そうだったのか。それで空は、入るんだろ？執行部に。」

執行部と生徒会は学園内での魔法の使用が許可されていた。

その抑止力のおかげで学園は平和を保っているようなものだ。

「どうしようかなって思って……」

すこし困った笑みを浮かべていた。

「せっかく誘ってもらったんだ、無下に断ることもないだろう？」

執行部といえは生徒会と同じぐらいの権力だとか誰かが言っていたな。

その執行部に誘われることは、認められたということなのだ。

「そうなんだけどね…、ねえ琥珀。」

元気のない顔のまま空はこちらを見た。

「どうかしたか？」

「えっと…、琥珀も手伝ってくれないかなって。」

こちらを伺うような上目使いで見てきた。

(たいていの男子なら、落ちそうだな。)

冷静に分析してる自分がいた。

「何をだ？」

話が見えない。

空は何をたのんでいるんだ？

「だから…執行部の仕事。さすがに一人だと…」

そういうことか。

「俺はいいんだが、執行部的にはよくないんじゃないのか？空みた

いに勧誘されたわけでもないし。」

すると空は急に元気になった。

「それはね、さっき先輩にお願いしてきたの。そうしたら生徒会長に聞いてくれるって。」

うれしそうに空は言った。

「空、最初からその気だったな？」

空は笑って何も答えずに歩き出してしまった。

また乗せられたのか。

ため息を吐きたくなかったが、こうして空に頼まれたら断る理由はないわけだが。

帰りはどうも騒がしくなりそうだと思いつつ空を追いかけ歩き出した。

~~~~~

「ああ、俺だ。今日のターゲットは？」

普段からは想像できないような落ち着きはなった声で、電話の向こう側の人物に話しかけた。

「…わかった。」

少年は電話を終えると、上着を手にとって外に向かった。

ドラゴンブレイク…

最近この辺りでいろいろとしているチンピラだと噂は聞いていた。

しばらく外を歩いて、目的の廃ビルに着いた。

そとの見張りは2人：意外に少ないな。

そして、廃ビルに向かって悠々と歩いて行った。

「おい待て、てめえこんなとこで何してんだ。」

（チンピラとはなぜこんな挑発的なのだろうか。）

そんなどうでもいいことを考えながら男の方に目をやった。

「何って、バイトだけど？生活がかかってんだよ。」

その言葉には何の感情も込められていなかった。

だがそんなことが分かるはずもなく、言葉をそのままの意味として捕らえた男はいきなり殴りかかってきた。

「調子乗ってんじゃねえ！！」

軽く身体を捻ってそれを避けた。

さあ始めよう。

右耳のピアスをはずした。

とたんに、辺りに魔力が漂い始めた。

純粋な魔力とそれに絡みつくようにして漂う殺気。

「なんだ…この変な感じ…」

二人の男は戸惑っていた。

そして、その魔力にさらに殺気がこもっていった。

魔法が使えない奴でもそのぐらいはわかるようだ。

さっきから二人の男が落ち着きなく辺りを見ていた。

次の瞬間、片方の男の顔に苦痛の色が浮かび上がった。身体は、燃やされたわけでも、凍らされたわけでも、切り裂かれたわけでも、打撃を与えられたわけでもなかった。ただ少しずつ、でも確実に苦痛の色は濃くなっていった。

おとこの身体は、消えていた。言葉の通り、消失していた。

残りの男は恐怖で動くことが出来ないようだ。正確には動けないのかもしれないが。

「な、なんだよ！こ、こんな魔法聞いたことないぞ！？」

「もういい。うるさいから消える。」

次の瞬間、目の前にいた二人の姿は消えていた。

「お前で最後か？」

廃ビルの中も静かになっていた。

誰の声も聞こえなかった。

「ひ、ひいつ、た、頼むから、いくらだ、いくら欲しい？いくらでも出す、だから命は、命だけは……」

そのセリフも聞き飽きた。

もう何度も聞いてきた。

金で自分の命を買えると本気で思っているのだろうか。見下ろした少年の目に映った男の姿は哀れだった。



男はそれでも何かを言っていたが、もう少年の耳には届いていなかった。

そして、男は消えた。

少年の目は、ただ冷たかった。

今朝も空との練習で始まった。

昨日”ゲート”が使えなかったのがよっぽど悔しかったのか、やる気満々な様子である。

そのおかげで朝から空に引っ張られて来たわけだが…

「空、いつたい何時になつたら終われるんだ？」

もうそろそろ終わらないと、朝食を食べる時間が無くなりそうだ。

(せっかく起きたからには、食べたいよなあ。)

「うるさいっ。集中できないでしょ!？」

さっきからずっとこんな調子だ。

さすがにこのままでは、朝ごはんを食い損ねるかもしれない。

「なら先に朝食、食べてるからな。」

そう言つて琥珀は、空に背を向けて家に戻ろうとした。

それを知つた空は、慌てて琥珀を呼び止めた。

「ちょっと待ってよ。せめてヒントぐらい…」

言うなり空がしがみついて懇願してきた。

背を向けていたせいで、思いつきりぶつかられてしまった。

「…」。」「

思わず声を出してしまった琥珀はすぐになんでもなかったように振舞おうとした。

「え…？琥珀、どうしたの？そんなに強くしたつもりないんだけど…怪我してるんじゃないの？」

すぐに空の表情は不安へと変わった。

空を誤魔化すために琥珀は、話題を変えることにした。

「大丈夫だ、かすり傷だから。それよりも朝食にしよう。」

空はまだ納得していない様子だったが、あえて気付かないフリをして家に戻り朝食を摂った。

~~~~~

学校に行くまでの道の途中も、空は時折こちらに視線を向け心配そうな表情をしていた。

「空、心配しすぎ。夜に寝ぼけて階段踏み外しただけだから。」

そう言って空に笑顔を向けた。

（これで納得してくれるといいんだけど…）

「ホントに？ホントに階段踏み外しただけ？」

「ああ、ホントだ。だから心配しなくていいぞ。」

「そっか。なーんだ。よかったよかった。」

空の表情はすぐにもいつもの通りの明るい表情に戻った。

（空に暗い表情は似合わないな。

にいしても、この嘘に簡単に引っかかるのは大丈夫なのか？）

琥珀は空に少し不安を覚えた。

「そういえば、昨日お茶行くって話してたよね？」

大丈夫だと分かったとたんに、空は話を変えた。
琥珀としても空の話題に素直に乗ることにした。

「ん、ああ。そういえば有耶無耶なままになってたな。」

「今日みんなで行かない？」

これまた突然の空からの誘いだった。
少しばかり考えて、琥珀は賛成することにした。

「そうだな。みんなに伝えておくよ。」

こうして放課後、4人でお茶に行くことに決まった。

~~~~~

（4人だったはずなんだが…）  
なぜかこの場には5人いた。

「私も友達連れてきちゃった。」

そう言って笑っている空。

（まあ4人だろうが5人だろうがいいけど。）

「泉あきらです。えっと…やっぱりおじやまでしたか？」

泉さんは申し訳なさそうに聞いてきた。

（泉さんって下の名前が明と同じなのか…）

みんなの返事が聞けるまでの間に、琥珀はふと考えていた。

「いいんじゃないのか？多い方が楽しいからな。」

明は何も気にしていないようで、また東条さんも同じ意見だった。誰も泉の名前にツツこむ人はいなかった。

「もちろん俺も依存はないよ。」

こうして5人でお茶をすることになった。

みんなで簡単に自己紹介を済ませて、時間はゆっくりと過ぎていった。

「そういえば空、昨日の話はどうなったんだ？」

昨日空に執行部の手伝いを頼まれたんだっけ。

まだ決まったわけじゃないが、確か生徒会長の許可があるとかどうとか。

「そのことなんだけどね、明日生徒会室に来るようになって。それ以上は私も聞いてないの。」

「そうなのか。なら放課後に行くか。」

「おいおい、何の話なんだ？」

明が不思議そうに尋ねてきた。

「空が執行部に入ったんだ。それで俺に手伝ってほしいって頼まれたんだ。」

「えっ、それってすごいことじゃない!!」

東条さんのもちろんそのセリフは俺に向けられたのではなく空にある。

空は照れたような表情を浮かべて困っていた。

「ん?」

なんとなく視線を感じてそっちを向いてみたら、泉さんと目が合った。

「どづかした?」

極力やさしく見えるように心がけて尋ねてみた。

「い、いえ…なんでも…ないです。」

すこし焦った表情を見せながら答えた。

どうしたんだろう、すこし考えても思い浮かぶことは特になかった。

「そっか。ここのケーキおいしいね。」

とりあえず無難に答えておくことにした。

この店は泉さんがオススメだと言うのでみんなで来ることになった。

それからしばらく話をして、その日はお開きとなった。

その日の帰り道で琥珀は、空にある疑問をぶつけることにした。

「なあ、空。泉さんは俺たちが”F”ってこと知ってるよな？」

「うん。ちゃんと知ってるよ？どうしたの？」

「どうしたってわけじゃないが、その…いいの？」

昨日の出来事の後ではそのことを言わざるを得ない。

俺たちのせいで、空や泉さんに対する風当たりがきつくするのは申し訳がない。

「…昨日のこと？泉ちゃんは”F”だからとそんなこと気にする子じゃないよ。」

そう言った空の顔はうれしそうだった。

(よっぽど仲がいいのだろう。)

少しだけ安心した琥珀がいた。

「そうか、ならいいんだ。」

それきり家まで会話はなかった。

けど、それは琥珀にとって気まずいものではなかった。

「じゃあ、着替えたら晩御飯つくりに行くね。」

家まで言葉を交わし、空は着替えるために家に戻っていった。

怪我の具合も気になり、早く部屋に戻って着替えるために琥珀も家に早々に入っていった。

部屋に入ると、服を脱ぎ傷のあるところに目を移した。

「ん、傷はもうほとんど塞がってるな。」

左わき腹にある傷跡を見ながら独り言をつぶやいた。

朝もしたように、傷の手当てをすることにした。

「傷よ癒えよ、アクティベーション」

傷に当てた右手から、白く優しい光が放たれた。

治癒系の魔法はコントロールが難しく、使えるものは少ない。

加えて、治癒魔法は失敗すると傷が治らず最悪術者にも傷が移る可能性がある。

今使っているこの魔法は、正確には治癒ではなく細胞活性化である。

治癒とは傷自体を回復することであり、細胞活性化とは治癒力を高めて傷の治りを早くするのである。

つまりは、すぐに治ると言うわけではなく、完治には少なくとも2、3日かかると言うことだ。

「明日には傷は塞がるだろ。」

そうつぶやき、制服から部屋着に着替えた。

(ん、空が来たみたいだ。)

玄関から音が聞こえたのでリビングに行くことにした。

「空はやい…誰だ!？」

玄関からした音は空ではなかった。

空は入ってくると、もっと大きな音を出して台所に向かっていくの



が普段の行動だった。

(こんな時間に誰だ。)

「やあ、コードゼロ。」

警戒したまま玄関に近づくと、そこには見知った顔があった。

表の世界では会うことのない顔にすこし驚いた。

「榊さん？なにしてるんですか、不法侵入は立派な犯罪ですよ？」

「いや、そんなつもりはなかったんだけどね。」

榊と呼ばれた男は苦い顔をして答えた。

「それで、用はなんですか？まさか何も無いわけないですよね？」

幾分言い方を強めて聞いた。

(時間以外は極力接触は避けたかったのに)

「そんなに怖い顔しないでくれないかい？君だと洒落にならないんだから。」

困った顔で説明を始めようとしたところ、琥珀にリビングに来るよ  
うに言われたのでそれから話すことにした。

「用件というのは、昨日の件だが、やっと裏が取れてね。君にはも  
うひと働きしてもらおうことになりそうなんだ。」

少し申し訳なさそうな表情で話し出した。

「どうも警察内部に手引きしたものがいた様で、それでいままで警察が何もできなかったようなんだ。」

つまり、警察には裏切り者がいた。  
ということになるのか。

「わかりました。それで、決行は何時ごろになりそうですか？」

（そんな話はどうでもいい。

命令ならば、それに従うまでだ。）

「話が早いね。明日ということだ。すまないがよろしく頼むよ。」

「はい。じゃあもういいですよね。」

「つれないなあ。そっか、確かご飯は…わ、わかったよすぐ帰るか  
ら怒らないでよ。」

そう言うなり榊はすぐに帰った。

琥珀は少しでも榊に早く帰ってもらったために、身体の周りに静電気を発生させていた。

そして、榊が帰ってすぐに空がやってきた。

「どうしたの、琥珀？」

空が不思議そうに顔を覗いてきた。

「何でもないよ。」

そう言って、琥珀は空にだけ向ける優しい表情を作った。

~~~~~

「今日は新しいメニューに挑戦してみたんだ。どうかな？」

「うん、おいしいよ。」

そんなやり取り取りひとつに、平和な時を感じつつ空との食事を楽しんだ。

空はそれを聞くとうれしそうに自分も食事を始めた。

食事も終わり、のんびりとテレビを見ながら空と話をした。学校のクラスでのこと、執行部のこと、今日のお茶のこと、泉さんのこと

空は楽しそうに話していた。

この時間が何よりも大事だと思った。

あのときからすべてを犠牲に得た幸福だった。

「うおっ。」

いきなり空にほっぺたを引っ張られた。

「琥珀が話聞かないから悪いんだ。ほれほれ。」

空が笑いながら、何度も引っ張ったり戻したりを繰り返した。その空の笑顔がまぶしすぎた。

「どうしたの、琥珀？なにか考え事？」

今日何度目かの空の心配そうな顔を見た。

「いや、少し世界情勢について考えていたんだ。」

適当に言っておくことにした。

「何バカなこと言ってるのよ。そんなこと琥珀が気にするわけないじゃない。」

「確かにそうだが、いくらなんでもはつきりいいすぎだよ。」

琥珀は苦笑いしながら空に言い返した。

こうして何でもない一日が終わった。

「琥珀、今日の放課後だからね、忘れないでよ?」

朝の空の教室の前

(今日は生徒会に呼ばれていたんだっけ?)

「ああ、大丈夫。終わったら迎えに来るから待っていてくれ。」

そう約束をして一日が始まった。

ちなみに、空は今日の朝の練習でも”ゲート”は使えなかった。ここまで空ができないというのは珍しい。

「おっす、おはよ。」

これも見慣れた光景で、教室に着くと明がもう来ていた。

「おはよ。」

その言葉を交わして琥珀は自分の席に荷物を置いた。

(今日の時間割は…)

「琥珀、1限が魔法基礎だぞ。さっさと教室移動しちまおうぜ。」

明に言われて、席を立って行くこととした時に東条さんが来たことに気が付いた。

「おはよ、東条さん。」

「おう東条、おはよ。」

明とほとんど同時に挨拶をした。
少しハモったな、琥珀は頭の片隅で思った。

「おはよう、2人とも早いね。」

せつかくなので、ということでも東条も含めた3人で移動することになった。

なんとなくこと2人といえることが、日常となりつつあった。

~~~~~

杉下先生は1回目の授業と変わらず、のんびりしていた。

これで国でトップレベルの魔法遣いなのだと言われてもピンと来ないのが本音である。

この学園に通うものの将来は大きく分けて3つに分けることができる。

魔法研究をし、その傍らで教職に就く。

警察などの国家機関に属して、戦闘などの前線で魔法を遣う。

そして最後は、魔法に関する技術開発。

今はまだどれを目指すかはわからない。

空は人助けがしたいらしく、そっち方面をめざすらしい。

だが、あまり俺に関しては選択肢はあるのだろうか。

「じゃあ今日も前回とやることは同様です。ペアになって開始してください。」

前回と同じことか。

(できた俺はぼーっとしていいってことか?)

琥珀は特にすることも無く、がんばる明の隣でのんびり外の景色を眺めていた。

今日も清々しい陽気で、気を抜くと、すぐに夢の世界へと行けそうだった。

「暇そうですね、琥珀くん。」

突然名前を呼ばれたが、その声が杉下であることはすぐにわかった。ふわふわとしていた意識を呼び戻し、声の主のほうへ顔を向けた。

「前回できましたからね。」

「君が優秀なのか、そうでないのか分かりかねますねー。」

相変わらずのんびりとしたしゃべり方をする人だ。

ホントにらしくない人だった。

人は見かけによらないという言葉は、この人のためにあるのだろう。眠気でぼんやりした頭で、杉下の様子を見ながら考えていた。

「少なくとも優秀ではないと思いますよ。実際”F”にいますからね。」

そう言ってまた目を外にやった。

少しずつ桜が散り始めていた。

春風に乗って桜の花びらが飛んでいく光景は見ていて、落ち着くものがあつた。

「そうですか？テストはあくまでテストですからね。」

この人は何が言いたいのだろうか。  
疑われている？

それとも、俺のことに気付いている？

急速に思考が加速していく。

さっきまでの眠気は吹き飛んでしまった。

「何が言いたいんですか？」

思わず聞き返してしまった。

(もし万が一何か知っている場合は…)

ある種決断を迫られた琥珀は、鋭い目つきで杉下を見た。

「特に含むものはありませんよ。機嫌を損なわしてしまったのなら  
すみません。」

そう言つて頭を下げた。

なんとなく油断できない相手だということだけは理解できた。

この教師は何かがおかしい。

だがそれが何かは分からなかった。

らしくないと言えればそれだけなのかもしれないが、どうにも琥珀に  
は些細なことが気になった。

「おい琥珀。少しぐらいアドバイスしてくれよ。」

明の声でここが教室であることを思い出した。

考えは急速に萎んでいき、やがて保留という決断に至った。

「それ以前に俺は明が火を出すことができたことに驚いたよ。」



明を見た琥珀の第一声がそれだった。

（以前に明は”土”系統以外は使えないって言ってなかったか？）  
でも今、琥珀の目の前の明は火を出している。

「馬鹿にするなよ？俺にだってこのくらいは出来るんだよ。」

少し不機嫌そうに明が答えた。

教室の中には火すら出せない者もいるようだ。

（これで魔法学園なのか…）

がっかりした琥珀を裏腹に、明は未だ必死に続けていた。

「なら簡単だ。魔法で一番大事なものはなんだ？」

「…なんだそれは？気合か？」

どうやら明の頭の中は気合と根性で構築されているらしい。  
何世紀経っても、この類の人間が減らないものである。

「…明、もう少し実技以外にも目を向けたほうがいいぞ。」

あまり効果は期待できそうにないが、一応忠告しておくことにした。  
明は琥珀の忠告を予想通りスルーして、続きを促した。

「魔法を遣うときに、どんなことを意識する？」

明にも分かるようにヒントを出した。

これでわからないようなら、無理だろうと思っていた。

「うーん、確か脳内のイメージだったか？」

「そうだ、一番大事なのはイメージだ。ヒントは以上だ、がんばれ。」

「おい、それじゃあわかんねえだろ。」

明が反抗してきたが、流すことにした。

魔法はそれこそ人に教えてもらえることは少ない。それこそ理論のみだ。

実際に使えるようになるためには、日々の努力が重要になる。

俺も空もほぼ毎日朝、練習を続けてきた。

俺たちに魔法を教えてくれる人はいなかった。

空は小さなときから少しずつ両親に教えてもらっていた。そのおかげで、俺に魔法を教えることもできたわけだが。

外の景色を見ながらぼんやりしているうちに授業は終わった。

この学園に入ったらいろいろとわかることが増えると思っていたが、どうやら買いかぶりすぎたようだ。

授業のレベルも決して低くはない。

だが、人より使える魔力が少なかった俺は、魔法の効率化と発動までのタイムラグをなくすことに尽くしてきた。

人より劣っていたからこそ、努力した。

誰よりも基礎理論と、構築を学んだ。

そのため授業の内容は必然的に知っていることばかりになった。

「琥珀、教室戻るぞ。外ばかりみ黄昏やがって。」

（さっきのことをまだすねているのだろうか。）

そう思って明を見たが、どうやらそうではないらしい。

そしていすから立ち上がつて明と教室に戻つた。  
東条はひたすら自分なりに努力していたことを、琥珀はしっかりと見ていた。

~~~~~

(もう放課後か)

ほとんど上の空で授業を聞いていた。
知りたいことは授業で教えてもらえることはなかった。

「明、悪いが今日は先に行くぞ。」

「ああ、空ちゃんと行くんだつたな。」

うなずいて、東条さんにも挨拶をして、教室をあとにした。

「空、行こうか。」

相変わらず教室から向けられる視線は痛かった。
そんなことにも少しづつ慣れつつあった。

「そうだね。行こう行こう。」

空はうれしそうに少し前を歩いていた。

「失礼します。」

空に続き、生徒会室に入った。

そこには先日 of 2年生の女子と、数名の生徒がいた。
生徒会長と思われる人は、2年生の女子だった。

それから話し合いが始まった。

「それで、要するに一条さんは執行部に入る条件として冴原くんも入れてほしいと。そういうことですよね？」

「はい。」

空は生徒会長の確認に大きくうなずいた。

「結果だけいえば、それは不可能です。」

生徒会長は何のためらいもなく言い切った。
最初から分かっていたのであまり驚きはしなかった。

「え、どうしてですか？何でだめなんですか？」

空も食い下がるつもりはないらしい。

すると隣に座っていた男子生徒が口を開いた。

「”F”が執行部に入ることは不可能だ。何かあったときに”F”では対応することは難しいからな。」

予想通りの答えだった。

それでも空はなにか言い返そうとしていたので、止めておく事にした。

「空、もういい。先輩方もすみませんでした。」

そういつてから、生徒会室を後にした。

空は隣ですっと悔しそうな顔をしていた。

「空、帰りにアイスでも食べるか。」

元気付けようと、空に提案してみた。

いつもならこれで元気になってくれるのだが、どうやら今日は違っていたらしい。

「琥珀は、悔しくないの？あんなこと言われて。私は悔しいよ？だれも本当の琥珀のこと分かってない。」

それだけ言っただけで空は黙ってしまった。

参ったな。

これは思ったより重症だ。

「空、ありがとう。俺は一人でも俺のことを知ってる人がいればいいと思ってる。」

そう言っただけで空に笑顔を向けた。

空は悲しそうな顔をしていたが、やがていつもの笑顔を見せてくれた。

「…うん。私はちゃんとわかってるからね。」

それからはいつものように話したりしながら家まで帰った。

琥珀の内心は空と違って、ほっとしていた。

それからしばらくしてから、空は執行部に入ったようだった。

~~~~~

夕食も終わり、空は帰った。

時間もそろそろ12時を指そうかという時間だった。  
琥珀は上着を掴んで外へ向かった。  
陽のあるときとは違い、外は肌寒かった。

「ゼロ、怪我はもういいのか？」

少し歩いたところに榊が待っていた。

「問題ありません。早く終わらせましょう。」

そして二人は車に乗り込み夜の街に消えていった。  
いつも通りの日常を得るために、いつも通りの非日常を過ごさし  
まった。

なんでもない日常は突然奪い取られた。

「空…どうなってんだ…」

俺の問いに答えるものもおらず、答えられるものもいなかった。

~~~~~

その日もごく普通のいつも通りの一日になるはずだった。

朝起きていつものように空と練習をして、ご飯を食べて学園に行っ
た。

明や東条さんと他愛も無い話をして、授業を受けていた。
相変わらず退屈な内容でぼんやり外を眺めたりしていた。

今日の放課後は図書館に行こうかとか、空に買い物に付き合わされ
るのだろうかとかそんなことを考えていた。

今まで続いてきた日常は、これからも続くとか心のどこかで安心しき
っていた。

それは突然起きた。

授業中、しずかな教室の中に突然何かが爆発する音と、数人の男が
入ってきた。

顔は隠されていてよく分からなかった。

ただ、その手には自動小銃が握られていた。

生徒は騒然とならずに、何が起きたか分からないという様子だった。

ただ頭だけは冷静で、落ち着いているのは自分だけだと理解できた。

何があつたか分からなかつた。

この状況で理解できるのは、自分たちが危機的状態にあるということだけだつた。

リーダーらしき人間が突如話し出した。

「悪いが君たちには人質になつてもらふ。拒否はすなわち死を意味する。わかつてもらえたかね？」

その瞬間教室の生徒に恐怖の色が表れた。

銃に魔法で対抗することは不可能ではない。

けれど、銃のトリガーを引く速さ以上の速度で魔法を発現させる必要がある。

それができなければ、魔法の発現前に弾にあたることになる。

おそらく”F”クラスにはそれだけ早く魔法展開できるものはいないだろう。

「君たち程度では銃に対抗できまい。おとなしく人質になつていてもらふよ。」

男はなんの戸惑いも無く言い切つた。

間違ひなく相手はプロだつた。

突入から制圧まで無駄が無かつた。

なおかつ、あまりにもあつさりと進入されすぎている。

もしかしたら内通者がいるのか？

3階にある”F”教室だけを制圧するとは考えにくい。

とすれば…もしかして空のクラスにも！？

辺りを見渡した。

動ける人間はいるか？

この状況をどうする？

応援は？
頭の中で思考が加速する。

「明、明。」

男たちに分からないように明に話しかけた。

「…お、おう。」

返事をした明の表情は硬く、余裕は感じられなかった。
ダメだ。

明は雰囲気にも飲まれている。

東条さんも同じだろう。

こうなったら自分でなんとかするしか…

「おい！！何話してるんだ。」

突然おとこがこちらを向いて怒鳴った。
まずいな、ばれたか？

「黙ってる。」

それだけだった。

男はまた視線をあたりにやって警戒し始めた。

どうする…

ピアスをはずせば何とかなるだろうが、周りに被害がでるかもしれない。

一人状況を分析して打開策を練っていた。

しかし空のことも気になり、内心では焦っていた。

「そろそろ、始まるな…」

そう言つて男は不敵に笑つた。

なんだ？何が始まる？

男達の表情からは、喜びとも取れる表情が浮かんだ。

「学園のみなさん」

？

なんだ、どこから声がした？

顔を上げると机にある端末に映像が映し出されていた。

男は顔を隠していた。

「君たちには今、人質になつてもらつている。」

教室中の生徒が緊張した面持ちでその映像を見つめていた。

誰一人声を発する者はいなかった。

「我々の目的は消えた同胞の解放だ。そのために政府との交渉材料になつてもらおう。」

消えた同胞の解放？

何のことだ？

「我々の要求が飲まれない場合は…」

そう言つてカメラは首謀者と思われる男から、横にいた2人の生徒に切り替わつた。

…そ、空…？

それと、泉さん…

二人は目隠しをされ、椅子に座らされていた。よく表情はわからなかったが、明らかに恐怖を感じていた。

「この二人に順番に犠牲になってもらうしかない。政府には早急に解放することをおすすめするよ。では30分後に1人目犠牲になつてもらおう。では。」

そうやって端末の映像は消えた。

今の映像はなんだ？

空だった…

その瞬間すべてのことが頭から消えた。

無意識に右耳のピアスに手が伸びていた。

「…すべての者に等しき眠りを、スリプル」

”風”属性下位魔法

琥珀の周囲から突如霧が発生した。

琥珀以外の人間が気付かず吸い込み、教室中の人間が強制的に眠りについた。

そして、少年はピアスはずし、立ち上がった。

その顔は氷のように冷え切っていた。

~~~~~

（映像に映っていた場所は間違えなく体育館だった。）

そのことを確認し、空のいる場所に向かって走り出した。

そのとき、ポケットにある携帯端末が震えた。

「…はい。」

名前など確認しなかった。

こんなときにかけてくる人は一人しかいない。

「ゼロ、君の学校が占拠されたそうだ。」

やはり榊だった。

「分かっています。相手は誰ですか？」

本当はそんなことすらどうでも良かった。ただ頭には空を助けることしかなかった。

「先日君が消した、ドラゴンブレイクの連中だ。奴らは消された連中が政府に捕まっていると思っっているんだ。」

なるほど。

今まで疑問だったところが繋がった。

「分かりました。」

それだけ伝えて端末を切った。

~~~~~

階段にも見張りの男がいた。

だがそんなものは相手ではなかった。

男が琥珀を見つけた瞬間に、男の存在はこの世から消えていた。また別のものは気付く前に消されていた。

1階まで降りてきた時、3年生の生徒が廊下にいる事に気が付いた。向こうもこちらに気が付いたのか、こちらに顔を向けたがすぐに上の階に走り去った。

たぶん”S”クラスのものだろう。

自力でなんとかしたのか、3年ともなると実力が違うのだろうか。

そんなことを思いながら、体育館に向かった。

まだ10分も足っていないはず。

空は無事だろうか、そればかりが頭を支配していた。

視界に入った男たちを、何のためらいも無く消していった。

琥珀が駆け抜けた後には、男達の銃だけが落ちていた。

体育館の入り口に見張りはいなかった。

舐められているのか、それとも罠があるのか。

どちらにしても、空を助けるためにはどうでもよかった。

たとえ罠だとしても、行くという選択肢以外は考えられなかった。

体育館特有の重い扉を押してあけた。

中には空と泉さんがいた。

目隠しをされ、いすに縛られていた。

それを見た瞬間に、琥珀の何かが音を立てて切れた。

「!？」

中にいた全員が驚いた目を向けてきた。

だがそんなことはたいした問題ではなかった。

「おい！お前何者だ!？」

手下の男たちが銃口を向けてきた。

それを横目で見ながら、リーダーに向かって言った。

「てめえらには、消えてもらう。」

「ふざけるな、このガキがあああああ！……！！……！！……！！」

その声が合図となって男たちが銃のトリガーを引いた。
体育館に銃声が響いた。

その音を聞いた空たちの身体は震えていた。

「……ばけものだ……」

男たちの一人がそうもらした。

「た、確かに、弾は当たっていたはずだ……それなのに、どうして……」

男たちの顔に先ほどまでの表情は消えていた。

変わりに恐怖が浮かんでいた。

確かに放たれた銃弾は、ひとつ残らず消え去っていた。

その先に少年は悠然と立っていた。

その目は男達を見ていなかった。視線の先には2人の少女の姿があった。

そして、少年の目が男を射抜いたとき、運命は決まっていた。

「……消える。」

冷たく言い放った声を最後まで聞いたものはいなかった。
断末魔の叫びを上げるものもいなかった。

「さて、後はお前だけだな。」

そう言つて主犯格の男を見た。

「まさか君が来るとは思わなかつたよ。」

先ほどまでの男達と違って、恐怖の表情も表れてはいなかつた。

「俺もあなただと思いませんでしたよ、杉下先生。」

目の前にいる男は、この学園の教師だつた。

「通りであつさり侵入されたわけですね。」

「君は本当に優秀かそうでないか分かりかねるよ。」

そう言つて笑つた杉下の顔は普段からは想像できないほどの威圧感を放つていた。

「…無駄話はもう良いでしょう。捕まるか、ここで俺に消されるかどちらを選びますか？」

尚も相手を見続けて、言葉を続けた。

選択肢を与えたのは初めてだつた。

「君は何者だ。」

「あなたに教える義理はありません。ただの生徒です。」

「そうか…悪いが今日は撤収させてもらうよ。」

その言葉を言い切ると同時にあたりに白煙が立ち込めた。

(逃げる気か!?)

だが、今はそれより空と泉さんの安全だ。
ピアスを右耳に付け、詠唱を始めた。

「風よ、すべてを吹き飛ばせ、ウィンディー」

言い終わると、強い風が吹き、立ち込めていた白煙を吹き飛ばした。
その向こうに空と泉さんの姿を見つけ、安堵のため息をついた。

~~~~~

すべてが終わった後、榊に連絡を入れ事後処理を頼んだ。

その後に駆けつけた教師たちに空と泉さんが保護されるのを確認して教室に戻った。

教室ではまだクラスメイトが眠っていた。

少し強くかけすぎたかもしれないと思ってみんなを起こすことにした。

明も東条さんはすぐには何があったのか理解できなかったようだが、次第に理解していった。

「なあ琥珀、結局どうなったんだ？」

しばらくたって明が尋ねてきた。

どう答えると納得してもらえるのか考えた末に

「さあ、俺も起きたらすべて終わっていたよ。」

そう答えることにしておいた。



~~~~~

後日聞いたことだが、杉下という教師は自宅で殺害されていた。その死体は死後1週間とのことで、初めから杉下は偽者だった。教師も誰もそのことに気が付かなかったそうだ。

魔法か特殊な魔具を用いたのかはわからない、それに加え目的も未だに疑問が残る。

榊さんによれば確かに交渉はあったが、その内容があまりにも疑問を持たざるを得ないものだったらしい。

詳しくは聞けなかったが、他の目的ではないか、と言っていた。

そんなことより大変だったことが空だった。

助けに行ったとき、空は声を聞いて誰かわかってしまったらしくしつこく問い詰められた。

そのときは教室で眠らされていたと言うと、不満そうな顔をしながらししぶしぶ納得した。

ちなみに納得するまでに1週間ほど毎日ケーキをおごらされる羽目になったのは余談である。

EPISODE 1 - 8 (後書き)

こんにちは。

これでEPISODE1は終わりになります。

この作品は僕？俺？私？の初の作品です。

まだぜんぜん文章をうまく書けず、稚拙な文ですがここまで読んでくれたことに感謝です。

まだ書こうと思っているので、続きを読もうと思ってもらっていたら幸いです。

EPISODE 空

街に吹く風も少しばかり熱を持ちはじめた4月の初旬、その日はちょうど中学の入学式を1週間後とした、日曜日だった。

昔から家族ぐるみの付き合いだった冴原家と外食に行くことになっていた。

名目は私と、琥珀の入学祝いということであつたが、本当のところはパパ達が美味しいお酒が飲みたかつたからだろう。

正直なところ、理由なんてどうでもよかつた。

ただみんなで食べるご飯はいつも美味しかった。

パパもママも魔法遣いだったから、家族揃つたご飯というものは余り多くなかつた。

それでも教えてもらつて、魔法を使うことは楽しかつたし、両親のように魔法遣いになることに憧れを抱いていた。

「空、用意できた？」

ママの声を聞いて、自分がまだ着替えすら終わってないことに気が付いた。

「ごめん、ちよつと待って〜」

昨日の夜から準備していたお気に入りの服に着替えはじめた。

もうアイツは待ってるかな？

物心付く前からずっと一緒にいた奴。

私の初恋の人で今も好きな人・・・

「よしっ、完璧。」

鏡の前で最後の確認を済ませて、部屋を後にした。

~~~~~

予定では冴原のおじさんの車に乗って、少し遠いホテルでの夕食になっていた。

車に乗って、隣にいる琥珀を見ると、ぼんやり外を見ていた。

少しは楽しそうな顔をしたらしいのに。

顔を見ていると自然に言葉にして言いたくなかった。

昔からいつもこうだ。

どこか少し離れた所にいるような感覚になる。

「ねえ、琥珀。」

何となく話し掛けてみた。

特に話題もなかったが、そんな些細なことは私達の間には問題にはならない。

「なんだ？お腹すいたのか？」

どうしてこんなにデリカシーがないのだろうか。

それも今日始まったことではないが、失礼なことには変わりない。

「なんでそんなにデリカシーないのよ。」

琥珀の後頭部に軽く一発お見舞いしてやった。

だが奴は涼しい顔してまた目を外にやった。

そんな何でもないやり取りに、笑みが零れてしまった。

そんな私を見ると、琥珀は不思議そうな顔をして、

「何か悪いもんでも食ったのか？」

と聞いてきた。

そんなやり取りを見て、パパやママ達は笑っていた。

そんなことでも楽しいと感じていた。

その間にも車は目的地に向け走り続けていた。

どれぐらい走っただろうか。

郊外にあるあまり来る機会が無いだろう高級なホテルのようだった。入り口にはドアボーイらしき人が立っていた。

中は外以上に気品にあふれていた。

調度品も私から見てもどれも高級品に見えた。

次第に緊張感が増えていくのが否が応でもわかった。

服は大丈夫かな、変なところないかな…

「空、大丈夫か？」

「へっ!？」

琥珀に呼ばれたことに驚いて変な声が出てしまった。

琥珀が隣で笑いを堪えていた。

「…ふんっ。」

笑われたことと、緊張していたことがバレたことに恥ずかしさを覚えて、無視して先に行くことにした。

「待てつて、怒るなよ。」

尚も笑いそうな顔を隠そうともせず追いかけてきた。  
無性に悔しかった。

なんでこいつはこんなにもいつも通りなんだ。

「知らないっ。」

それだけ言うと琥珀は申し訳なさそうな顔をして謝ってきた。  
いつものパターンだった。

「…アイス一回分。」

「わかったよ。」

そう言つて二人で笑い合つてパパたちを追いかけた。

~~~~~

食事は、緊張しながらも楽しく進んでいった。

パパ達はお酒が入つていつものように騒がしくなっていた。

そんな二人を見ると、少し恥ずかしかった。

琥珀は何事も無いように平然としていたけど。

そして、食事も終わり、帰ろうといすから立ち上がったとき事件は
起きた。

いきなりの爆発とホテルにいた人の悲鳴。

普段ならとつさに張れたであろう防御壁もその日は発動される前に
爆風に巻き込まれた。

そこで私の意識が途切れた。

そして次に目が覚めたとき、私は目を疑った。
琥珀が、魔法を使っていた。

どうして？なんで？

そんな考えしか頭には浮かばなかった。
自分の身体のこと、パパやママ達のこと、何が起きたのかもそんなことすべて忘れていた。

次に分かったことは、私が琥珀の腕の中にいた事だった。

私たち二人の周りに真っ白な空間が広がっていた。

それはとても綺麗で、輝いていた。

そこでまた私の意識は闇へと溶け込んだ。

~~~~~

翌日、私は病院のベッドに横になっていた。  
昨日の出来事は夢でも何でも無かったのだ。

「…パパ…ママ…どー…？」

身体中が軋んだ。

全身が痛かった。

それでも立ち上がることもがいた。

「目覚めたのか？」

ベッドの近くには琥珀がいた。

いつものように顔には明確な表情が作られていなかった。

「じ、はく…?」

部屋の中は静かで、何の音もしなかった。すべてが止まっているようだった。

「まだ無理をするな。少し休んでいる。」

そう言っただけで微笑む琥珀に安堵し、また意識は闇へと向かって行った。

事故の日から1週間

ようやく起き上がれるほどまで回復した。

今日も起きたら琥珀がそばにいた。

いつたい何時からそこにいたのだろうか。

琥珀の顔には疲労の色が見て取れた。

「…ねえ琥珀。」

今日は答えてくれるだろうか。

毎日琥珀に問い続けた答えを、私は知りたかった。

「パパとママは?」

部屋に静寂が包み込んだ。

琥珀の表情は変わらなかった。

「おじさんたちはー」

続きを聞いて私は泣き崩れた。

それでも琥珀は私を見つめ続けていた。

その目には何が映されていたのだろうか。



未だに私にはわからない。

いったいどれくらい泣いただろうか。  
部屋の中には琥珀はいなかった。  
その日から琥珀は病室に来なくなった。

次に琥珀に会えたのは、退院して学校に通い始めてからだだった。  
琥珀とはそれまで感じたことの無いような距離を感じた。  
違う、距離じゃない。

まるで…そう、まるで別人のようなそんな感じがした。

でも私は気にしないことにした。

聞いてしまうと琥珀とのすべてをなくしてしまうような気がしたから…

学校で琥珀と再開した日から、私はあの事件のことも、それまでのこともすべてに蓋をした。

もう一度失くしてしまわないように

だから私は琥珀のすべてを受け止めようと思った。

琥珀が私のすべてであるように  
そして

あの日、琥珀が私にしてくれたように

~~~~~

「空、今日も練習やろうか。」

そして今日も琥珀との朝の練習が始まった。

私だけはちゃんと覚えている。

たしかに琥珀は魔法が使えなかった。

「わかった。先に行つてて。」

ある日琥珀が魔法を教えてほしいと言い出したときは何の冗談かと思つた。

だつて琥珀は…

でも琥珀には確かに魔力が存在した。

今まで一度も感じたことが無かつたのに。

その理由は私にはわからない。

私にできることは、琥珀にしてあげられることは教えることだけだつた。

だから今も私は教え続けている。

琥珀がそう望むから。

そして今日も一日が始まる。

EPISODE 2 - 1

事件から1週間後

「なあ琥珀、結局あの事件解決したの誰だったんだろなー。」

「明、いつまでそのネタ引っ張るつもりなんだ？」

1週間たつても明はこの調子だった。

あの事件は表向きには政府の圧力で相手が逃亡して解決したということになっている。

しかし、生徒たちの間では、政府の秘密機関が解決したとか、はたまた執行部が解決したとか数々の噂が広がっていた。

「琥珀は気にならないのか？だってどう考えてもおかしいじゃないか。」

そう言われてもな、

(まさか俺がやったと言った所で果たして信じてもらえるか…)

そんなやり取りを朝の教室の中で繰り返していた。

周りの生徒もどうせ同じようなものだろう。

辺りを見渡して今日何度目かのため息をついた。

「そういえば、今日魔法基礎の教師が来るんだっけ？」

適当な話題を見つけて、話題をそらした。

主犯だった杉下は、一身上の都合で退職となっていた。

まあ、身内から犯罪者がでたことを学園側は隠したのだ。

それも生徒たちの間ではもっぱらの噂なわけだ。

「ああ、なんでもすげえ美人とか聞いたけど。」

それを聞いたクラスの男子たちが飛びついてきた。

そんな明の姿を横目で見ながら机の中へ授業の用意を詰め込んだ。学校というものは、どれだけ時間が経っても大して変わらない。

授業は退屈だし、ノートは手書きだし。

科学は中々発展しないものだ。

のんびりと考えながら、トイレにでも行こうかと思ったとき、突然校内放送がかかった。

特に思い当たることもなく、席を立ったとき自分の名前がスピーカーから聞こえてきた。

「繰り返します、1-Fの冴原くんは、昼休みに生徒会室にきてください。」

さて、自分がなぜ呼ばれたのか理解できなかった。何か重大なことをしたのだろうか。

「おい琥珀、お前何したんだ？」

「さあ、俺にも思い当たること無いんだがな…」

そういえば、前に一度空の付き添いで行ったっけ？

そのときの会長さんの声のように聞こえたような気がした。とりあえず、昼休みに行ってみることにした。

~~~~~

ドアをノックして名前を言って、生徒会室に入った。中には、男の生徒が1人いるだけだった。

「あの、昼休みに来るように言われたんですが、会長はいますか？」

たぶん先輩であろう人物になるべく丁寧に言った。

部屋はがらんとしていて、床も綺麗に掃除されていて、棚も整理されていた。

以前来たときは、そんなところまで目はいかなかったが今日は自然と目に入ってきた。

「ん？お前が冴原か？」

部屋を見渡していた目を男に戻した。

長机の上にあぐらをかいて座っていて、制服も着崩されていて、お世辞にもこの部屋に似つかわしくなかった。

「そうですけど…会長がいないようなら帰ります。」

そう言って背を向けたときに、男がまた話しかけてきた。

「まあ、待ちーな。呼んだんは俺や。今帰られると、呼んだ意味ないやんか。」

男の話した内容に疑問を持ちながらもう一度振り向いて男に向き合った。

それにしてもひどい関西弁だな、聞き取れるからいいもの。

「おお、そや自己紹介がまだやったな。俺は西野哲平や。」

西野は言ったきり、人懐こそうな笑顔を浮かべた。

ここで俺の自己紹介は改めて必要ないと、思い直して気になる本題に入ろうとした。

昼休みに入って、ご飯を食べずに来ておなかが空いていた。

「それで、そろそろ本題に入ってもらえますか？」

「ホンマせっかちなあ、自分事件の日なんで廊下なんかにおったんや？」

聞いてきた西野の目の色が変わった。

鋭い輝きを放ち、見極めるような表情になった。

どう答えようかと悩んだが、とりあえず誤魔化すことにした。

「事件の時ですか？教室で気絶してましたよ。あの時クラス全員が魔法で眠らされていましたから。」

とりあえず用意しておいた答えをそのまま答えることにした。

これをどう受け取るかその様子を見ることにした。

西野は大きいため息をついた。

「やっぱり茶番なんかやるもんちゃうな。」

そう言って、表情を崩した。

「もうわかってるんやで、死神ゼロ、いやコードゼロだったかな。」

お前のこと調べるん時間かかったんやで？」

なんでもないことのように言い切った相手の顔を驚きを隠せない表情で見つめた。

なぜこの男だ知っているんだ？  
まさか、どこからか情報が漏れたのか？いや、まさかあの機関に限  
ってそんなことはないはずだ。

「なぜそのことを知ってるんだ？」

出来得る限り冷静な声でたずねた。

生徒会室の中は異様な静けさと、二人の放つ殺気で満ちていた。

すると西野は机から下りると、隅においてあったコップにお茶を入  
れ始めた。

疑問は解決されることは無かったが、先ほどまでの殺気はなくなり  
とりあえず警戒を解くことにした。

「ほれ、とりあえずお茶でも飲めや。」

コップを渡し、飲み始めた。

こいつは俺に何の用があつて呼び出したのか。

「先輩に対してそんな警戒するもんぢやうで。」

「先輩である前に、俺の情報を知ってることに警戒してるんですよ。  
いい加減教えてもらえませんか？」

静かに、だがはっきりと言いつつた。

「自分で考えてみればすぐ分かることやろ？」

西野は笑っていた。

バイトのことを知っているのは、榊さんと…

「もしかして、同業者ですか？」

考えたら簡単なことだ。

知らないはずのことを知っている人物、そらは同業者しかありえない。

「ごめーとー。改めて始めまして、俺はコードファイターや。お前同業者に会ったことないんか？」

「必要がないから会う理由が無い。」

相手の正体が分かった以上、警戒することもあるまい。それ以上に、同業者ならなおさらか。

しかし、依然として疑問は残る。

「それで、その同業者が何の用ですか？」

「そんな冷たくすんなや。何ちよっとお前のことが気になったんやどや、俺といっちょ勝負してみーひんか？」

呆れてしばらく何を言うべきなのか思い付かなかった。ようやく思い浮かんだ言葉を言うことにした。

「俺には興味ありません。話はそれだけですか？」

これ以上話すことはないので、教室を後にしようとドアに手をかけたところでまた引き止められた。

「3年前の事件について、知りたいことがあるんだろう？」



そんなことまで知られているのか。  
こいつはいつたいどれほどの情報を持っているんだ？  
もしかしたら、本当にすべて知っているのか？

「…何すればいい？」

今までどこで調べても分からなかった。  
事故ではなく、故意であった。  
それ以上のことは誰も知らなかった。

「よっしゃ、そうこな。」

うれしそうに笑っている目の前の男に軽く嫌気が差した。

「ちょうど来週に全校生徒の交流戦があるやる？それに出てもらうわ。」

交流戦か、明がこの間話していた気がするな。  
毎年4月に全校生徒で魔法を使った勝負をするって言ってたな。  
いくつも競技があつてそれに各個人がエントリーして勝負して、優勝を決める大会。

「出るつて、確かいくつも競技ありましたよね？」

「そやな、なら闘技に出てもらうわ。そこで俺に勝てたら俺の知ってる情報教えたるわ。」

そう言つてまたお茶を飲んでいた。  
どうにも緊張感が足りてない奴だな。

「それでお前はどっしたいんや？」

「えっ？」

突然の会話に一瞬何を聞かれたか理解できなかった。

それは今まで一度も考えたことの無い疑問だった。

「お前は俺の情報を聞いて、それでどっしたいんや？」

「俺は……」

人知れず山奥の、さらに幻術に守られた森の中に、巨大な西洋作りの城が建っていた。

大きさからも、その見た目からも城といっても申し分ない建物である。

その中は、巨大な入り口を抜けると、広いじゅうたんの敷かれた広場のようなところがまず現れる。

それはさながら映画に出てくるような作りになっていた。

二又に分かれた階段を部屋の両側に備えている。

その階段を上りさらに奥へと続く廊下を2人の壇上は歩いている。

廊下は幅5メートルほどの広さで、その両側には壁に不気味な灯火が灯されていた。

迷路のように複雑に入り組んだ廊下を2人はなんの迷いも無く進んでいった。

女の容姿は美しく、ブロンドの長い髪を揺らし、細い右手にはシルバーの腕輪がはめられていた。

彼女の放つ独特の冷たいオーラを横に携え歩く男は、中年の男で死んだはずの男の顔をしていた。

「それで、今回主様のシユバリエであるお前が出向いた用事はなんだったんだい？杉下せんせ。」

わざとらしく男に言った女は、男のその姿に不快感を覚えた。

それを気にするでもなく、杉下と呼ばれた男は隣を歩く女の問いにどこから答えるべきか悩んでいた。

「刻印を刻む土地を調べていたんだ。」

「そんなことは分かっているよ。今さらあんたが出向く必要はないだろう？」

男の答えに不満げに女は続けた。

「3年前の生き残りがいたんだ。それを見に行っていた。と言う方が正しいのかもしれない。」

男の口からでた”3年前の”という単語に、女は大げさすぎるほどの同様をあらわした。

2人にとつても、3年前の事件は苦い思い出でしかなかった。

すべてのプロセスは完璧であった。

にも関わらず、計画は失敗に終わった。

「それで？その2人をどうしたんだい？」

思わぬことに不満をあらわにした口調で、男に詰め寄った。

「殺してはいないさ。それは俺の信条に反する。やるなら来るべき時にやるさ。」

2人は見た以上にながし廊下を歩きながら、話し続けた。

廊下には2人の歩く音だけが響き渡り、それ以外は静寂に包まれていた。

「今度の計画に失敗は許されない。それだけは覚えておきなさい。」

「ああ、分かっているよ。それで、実行は何時ごろになりそうなん

だ？」

「主様の体調しただが、冬までには行われるさ。」

女の言葉を最後に、2人の間に言葉は交わされることは無かった。

~~~~~

「ま、ええわ。俺はお前とやりあうことだけに興味があるんや。」

西野は不意に厳しい表情を崩した。

椅子に座りなおして、琥珀に背を向け外の景色を眺めながらお茶を飲んでいた。

琥珀のほうからは彼の表情は見えなかった。

「俺にはあなたに勝つ以外の選択肢は無いわけですか。」

その言葉を聞いて、西野は満足そうな顔を琥珀に見せた。

「そうや。本戦でまってるから、くれぐれも予選なんかで負けるんやないで。」

その言葉を合図に、2人は会話をすることを辞めた。

昼食がまだであることを琥珀が思い出し、早々にこの部屋から辞めることにした。

ドアを開けて、再び西野に身体を向けて一礼した後教室に戻っていた。

部屋に1人取り残された西野は、次なる客人の到着を待ちわびていた。

外の桜を見つめつつ、お茶を飲んで。
待ち人は思いのほか早く到着した。

「よお、さっちゃん。わざわざ呼んでもろて悪かったなー。」

へらへらと笑う男に、さっちゃんと呼ばれた少女は怒ることを通り越して呆れてしまった。

手近な席に腰を下ろして、男に向けていつものセリフを言うことにした。

「私のことをさっちゃんと呼ぶのは会長だけですよ?」

聞きなれたセリフをBGMに西野はまたお茶を飲んだ。

「それに、さっきの冨原くんは私のことを会長だと勘違いしてますよ?」

「いいやんか。それだけさっちゃんに会長があってるってことやで。」

またへらへらと笑って、少女の方を向いて答えた。

少女は再び呆れて、それ以上男に何かを言うことは辞めた。

そして、昼休みの終わりを告げる鐘が鳴るまで、2人は何も話さず外の景色を眺め続けた。

~~~~~

琥珀が教室に着いた時には、時計の針はすでに昼休みが終わる10分前を指していた。

自分の席に座ると、かばんの中から朝のうちに買っておいたパンを

取り出した。

袋をあげ、ぱんを口に運び始めた。

教室に居た、明と東条は琥珀の帰ってきたのを見ると近くに行った。そして明がすぐに疑問を口にした。

「何の用事だったんだ？何かしたのか？」

「いや、何もした記憶が無いのに疑わなくてくれ。ただ西野という先輩に闘技大会に出るように言われたんだ。本戦で戦うためにな。」

そう言つて、手にあるパンを再び口に運んで租借し始めた。

琥珀の発言に、2人は動揺を隠せないようだった。

今度は東条が問いかける番だった。

「西野つて、3年のあの西野先輩だよね!？」

東条の言葉には、憧れと不安がミックスされていた。

その様子を見た琥珀はどういうことかわからなかった。

「東条さんのいう”あの”西野つて人かはわからないが、たぶんその西野だろう。」

同業者ならば、学園内でも多少有名であってもなんら疑問ではない。と琥珀は考えて、結論を下した。

その言葉を聞いて、2人はさらに驚いた様子になっていた。

「どつという繋がりがあつてそついうことになるんだ？」

明の問いかけにどう答えるか迷つたものの、昔のこともあり2人に

は申し訳ないと思いつつ誤魔化すことにした。

そして、生徒会室から教室までの歩いて戻ってくるまでの間に考えておいた理由を話すことにした。

「俺にはわからない。もしかしたら何か気に障ることもあったのかもかもしれないな。」

そう言つて、食べ終わったパンの袋を丸めてゴミ箱に向かって投げた。

ゴミは一直線にゴミ箱に向かって飛んでいった。

二人はそれで納得したのか判断がつかなかったが、とりあえず気になることを聞いておくことにした。

「そんなことより、交流戦ってどんなものなんだ？」

明が初めに説明し始めたが、どうにも要領の得ない話し方で理解しずらかった。

そこで明に代わつて、東条に説明してもらつことになり、要約するところだった。

交流戦は毎年4月の入学式の2、3週間後に開催される。

全校生徒は1人1競技以上の参加が義務付けられている。

その競技は、闘技大会を除いては

4大属性の特徴を生かした競技が行われることになっているそうだが、毎年当日まで内容が発表されない。

そしてもうひとつ。

闘技大会では毎年けが人が続出で、ひどい年には死人まででるそう  
だ。

「それで、明と東条さんはどの競技にでるんだ？」



「俺はもちろん”土”属性が存分に生かせるところだ。」

先に答えたのは明だった。

東条は明の横で少し悩んだ様子を見せて

「私はまだ決めてないんだ。」

「そっか、じゃあとつと決めて、放課後にもエントリーしに行こうぜ。」

明のそのことばで、その日の放課後にエントリーに行くことになった。

~~~~~

午後の授業もすぐに終わった。

相変わらず琥珀にとっては退屈な授業でしかなく、終始外の景色を眺めていた。

授業が終わるや否や、明と東条が琥珀の席までやってきた。

「東条さんはもう競技決めた？」

そう話しかけた琥珀の言葉に、少し不安げに

「うん。私”水”の競技に出ようかなって思ってる。」

「そっか、東条も決めたのか。ならさっさとエントリーしに行こうぜ。」

そう言つて3人でエントリーするために、受付がある実行委員の教室まで行つた。

そこには空と泉も来ており、一緒にエントリーすることになった。

空はもちろん”火”の競技で、泉は登場と同じ”水”の競技に出ることになった。

競技日まであと1週間

EPISODE 2 - 2 (後書き)

お久しぶりになってしまいました。

ここ最近は過去に投稿したものの修正してました。

あらためて見るとすごい誤字脱字でした。

読んでくれた人、すみませんでした。

以後気をつけます。

それでは

エントリーを済ませた次の日、早朝から琥珀と空は魔法の練習をしていた。

場所は琥珀の家の庭だった。

学園のように特に大きいというわけではないが、魔法を使う上では問題はない広さだ。

「どうするの？もう大会までぜんぜん時間もないし、予選も明日からどんどん始まっちゃうよ？」

練習を始める前に空が琥珀に聞いてきた。

時間のことも、予選のこともすでに琥珀も知っていた。

「だからと言って、いきなり魔法がうまくなるわけじゃないんだから。」

もつともらしく答える琥珀に、空は大きな不安を覚えた。

空にはどこか琥珀に対して過大評価しすぎとも、身内贔屓ともとれる思考があった。

そのことを琥珀はちゃんと知っており、またそれを正すつもりも無かった。

「でも、じゃあどうするの？みんな言ってたけど、歴代の大会で”

F”クラスの人が本戦に出たってきいたことないよ？」

「そう言われてもな、練習するしかないな。」

そう言い切った琥珀は、練習を始めることにした。

切り札がないわけではないが、まだそのことは空に打ち明けずにした。

それは学園に始めて登校した日
空を待つ図書館で見つけた。

「ホントに琥珀は…」

まだ空が小声でぼやいていた。

それを耳にしながらも、無視を決め込むことにした。

図書館で見つけた日から毎日のように練習し、また必ず理論を考え続けた。

「詠唱…破棄か」

理論上は可能であることだけはわかった。

しかしそれ以上のことはわからなかった。

身近に聞ける人もいなかったし、また聞くこともしようとは思わなかった。

琥珀はまた思考の沼にはまりそうになった頭を無理やり起こして、練習を始めた。

まずは簡単な下位魔法から練習することにした。

魔法の発動にはいくつものプロセスがある。

ただし、下位魔法よりもさらに下位の4大元素を発生させる

つまり、火・水・風・土をそのまま発生させるだけならばたいいの魔法遣いは詠唱を必要としない。

それ以上になると詠唱というプロセスを経ることで発動、制御を可能としているのである。

ついでに言うと、さらにその先

より大きな魔法を使うまたは広範囲に影響を及ぼす魔法を使うため

には、詠唱のほかに魔方陣と呼ばれるものを使うことがある。ただ魔方陣は手間がかかるため使うことはめったにないのだが。

琥珀は、まず”水”属性の下位魔法から始めることにした。

(手ごろな水壁からでいいか。)

水の防御壁は、基本的な魔法の1つで難易度は低い。

続いて練習法だが、これが一番琥珀の頭を悩ませた。

ただ黙っていても何時までも発動されることはないだろうと言つのが目に見えていた。

そこで、少しずつ詠唱を短くすることにした。

水壁の呪文は

《水よ、我を守る壁となれ、ウォール》

そこでこの呪文を少しずつ短くすることにした。

大きく息を吸って自分の体内にある魔力を収束させていく。

そしてそれを感じながら、脳下垂体の中での水壁のイメージを固めていった。

琥珀はリラックスして呪文を詠唱した。

「水よ、壁となれ、ウォール」

収束した魔力は行き場をなくして霧散した。

(最初からうまくいく訳ないよな。)

ふうと息を吐いて、琥珀は再び集中し始めた。

~~~~~

「ねえ琥珀、今日なんですつと呪文間違ってたの？」

練習の後の朝食中に空が口にごはんを入れながら聞いてきた。と言っても中にあるときにはしゃべっていない。

「ん、ああ分かってるよ。」

「じゃあ、わざと？なんで？」

空の疑問に、特に隠す理由も思い当たらなかったので、素直に今練習していることを言うことにした。それを聞いて空はまた驚いていた。

「それってこの間言ってたことだよな？」

「そうだな、ただみんなには内緒な？本番で驚かせたいからな。」

そう言った琥珀の顔をニコニコとうれしそうな顔で見つめた後、空は大きくうなずいた。

「うん。やっぱり琥珀はすごいね。」

そんな言葉と共に、空は元気に朝ごはんを食べ終わった。

まだ少し残っていた琥珀は、少し急いで残りのご飯を食べきった。

~~~~~

空が教室に着くと、当たりを見渡した。

まだ泉は着ていなかったことに気が付き、その日の授業の用意を始めた。

かばんの中の教科書類を机の中に入れ始めた。

泉とは入学式が終わって初めて教室に行ったときにできた初めての友達だった。

たまたま席が隣と言うこともあったのだが、泉だけが空に変な色眼鏡で見えることをしなかった。

空は周りから優秀と言われることに抵抗があった。

時には妬まれることもありホントはみんなの前で魔法を使うことがすきではなかった。

でも、あの日琥珀に助けられたときから魔法が好きになった。

それ以来はあまり気にすることもなくなったが、それでも特別扱いされることが好きではなかった。

「私、泉あきらって言うの。よろしくね。」

少し引つ込み思案そうな女の子が話しかけてきたときには正直驚いた。

それでも純粹に話しかけてくれたことはうれしかったし、周りの男子達は遠巻きにこちらを見てくるだけで、気詰まりだったことなどすぐに忘れてしまった。

泉と空が仲良くなるのに時間はかからなかった。

空は泉と友達になった日のことを思い出していた。

そのせいで泉に声をかけられていることに気が付くまでしばらく時間がかった。

「空、何ぼーっとしてるの？おはよ。」

泉の声でやっと長い思考の旅から引き戻された空は慌てて挨拶を返した。

「え、あつ、あきらちゃんおはよう。」

そう言った空の顔は少しばかり焦りを含んでいたが、いつも通りに明るく元気なものだった。
その様子を見た泉は少し空に意地悪をした。

「朝から琥珀くんのことでも考えていたの？」

泉の意地悪な顔に気が付いた空は、すねたように顔を背けた。

「嘘だよ。いくら呼んでも返事してくれない空が悪いんだよ。」

泉は笑顔になりまたいつものように空と話して朝のHRまでのひと時をすごした。

~~~~~

琥珀は教室に着くと、いつものように明が話しかけてきた。  
話題はもちろん闘技大会のことだった。

「おつす。明日から予選だけど、大丈夫なのか？」

挨拶もそこそこに明はいきなり本題に入った。

琥珀としても明のような率直な人間は嫌いではなかった。  
だからだと回りくどい話をされるより、よっぽどよかった。

「おはよう、まあとりあえず予選は負けるわけにはいかないよな。」

そう言って、自信があるとはいえない顔を明に向けた。

実際のところ琥珀には少しの自信と大きな不安があった。

不安の要素は、もちろん魔力の面である。

並みの人よりかなり少ない魔力しか使えないことは大きな弱点だっ

た。

いくらすべての元素が使えても、使用回数が少ないのでは不利なのは目に見えている。

少しばかり救いなのは、他の選手よりは実戦経験があることだ。

「そつだよな。まともによつて勝てるとは思えないよな。」

暗い表情をする明に、少しばかりの励ましをすることにした。

「まともにはできないなら戦術を組むだけだ。」

琥珀の顔は明から見て輝いて見えた。

まだ希望を捨てていない表情だった。

「そつだよな。俺も負けてらんねえな。」

やる気に満ちた明を目にして、琥珀は思わず苦笑いをこぼした。

そこへ登校してきた東条を加えて、いつもの3人で話が始まった。

~~~~~

「みんなで大会の練習しないか？」

昼休みの食堂で初めに言い出したのは、いつものように明だった。

みんな集まって何かすることが好きな明らしい発言だった。

今日は3人+空と泉でご飯を食べていた。

明の意見に一番に飛びついたので意外なことに泉だった。

「それなら、放課後の練習場使いませんか？大会の1週間前から部活がお休みで申請すれば使えるんですよ。」

わくわくした子供のような表情の泉を見て、琥珀は一瞬戸惑ってしまっただがすぐにいつも通りになり賛成した。

泉曰く、毎年開放しているのだが以外にそのこと知っている生徒は少ないらしい。

なんでそんなことを知っているのか気にはなっただが、特に理由も無いので黙っていることにした。

「そうしょー！！みんなもいいよね！？ね！？」

空は泉の意見におおはしゃぎして、みんなを誘い出した。

(そんなことしなくても大丈夫なのに)

空のはしゃぎっぷりを見て、琥珀は少し笑ってしまった。

「じゃあ放課後に迎えに行くから待っててくれよな。」

明の言葉を合図に、5人での食事の終了となった。

教室にもどると、授業まで3分を切っており3人は大慌てで次の授業の準備に追われた。

午後からの授業は得てして眠気との戦いである。さらに加えてこの季節、つまり春の陽気とは学生にとって宿敵である。

ちなみに最前列であるにもかかわらず、明はあっけなく倒れていた。その眠気の中でも、琥珀は外を眺めて思案にふけていた。考えることはもちろん来週にせまった闘技大会である。

今の琥珀には、ピアスをはずして本戦までいけるだけの自信はなかった。

もちろんはずしてしまえば楽々本戦どころか優勝も夢ではないだろうが、ひとつ大きな問題がある。

それは、自分の無意識で発動することがあるのだ。

やっと最近ある程度は制御することができるようになってきたが、まだ自由自在というわけにはいかない。

それに、一番の問題はその力である。

ただの大きすぎる魔力なら問題はないのだが、それが”異能”でも殺傷能力が高すぎる。

そのために、琥珀は予選を何とか勝ち抜く秘策を考える必要があった。

(詠唱破棄が使えるたらもう少しまともに戦えるかもしれないが、できるかどうかわからない力に頼るのもな)

先ほどから堂々巡りの考えに、いい加減飽き飽きして桜の木を見ることにした。

教室の窓からは校庭が見え、どこかのクラスが体育をしていた。といっても、普通の学校のような普通の体育ではなく魔法を使っているの体育だ。

どうやら今日はサッカーの授業のようだ。

走っている生徒は、風の魔法を使っているのだろうか、常人では考えられない速さで走っている。

サッカーボールも魔法をかけて強度を高めている。キックの威力もプロ以上の破壊力だ。

その光景を見つめつつ、琥珀はまだ考えることを辞めない。

（ピアスが外せないならどう戦えば勝てるのか…

遠距離攻撃は魔力を大量に消費するから俺向きではないな。ならばっぱり近接攻撃か。）

特に格闘技をやっていたわけではないので、なるべくならその選択肢は選びたくはなかったが贅沢は言ってられなかった。

近接格闘は主に、肉体強化系の魔法を使いながら戦うものであまり魔力は消費しない。

（肉体強化系の魔法はいくつか使えるが、問題は格闘だな。あとでみんなに相談してみるか。）

ひとまず答えを見つけた琥珀は、外に向けていた視線を教室に戻し授業を聞き始めた。

~~~~~

「おわった〜。」

明の気楽な声が教室に響き渡った。

明と東条が教室の入り口で待っていることに気が付いた琥珀は、急いで支度をして2人のところへ行った。

3人で空と泉を迎えに行った後、事務室に寄って練習場の使用許可書をもたらっていくことになった。

練習場は、特別棟の一角にあり、大きな体育館のような作りになっている。

中には数人の人が練習していた。

「ひろーい。」

空が入った直後にはしゃぎだした。

普通の体育館との違いは、壁や床にマジックコーティングがしてあることである。

ただの体育館ではすぐに魔法でボロボロになってしまうからだ。

「ここなら思う存分れんしゅうできそうだな。」

明も空の後に続き入り口をくぐって行った。

その後に残りの3人が入っていった。

「よしやるー、やるー。」

そう言って、空は少し身体を動かしてほぐしていた。

琥珀は、午後の授業で考えていたことをどうするか悩んでいたが、やがて口を開いた。

「ちょっと聞きたんだけど、誰か格闘技とかしてた人いない？」

「どうしたの琥珀。いきなりそんなこと言い出したりして。」

突然の琥珀の発言に一番驚いていたのは空だった。

いつも朝の練習をしていた琥珀が、格闘技に興味を持ったことに疑問を抱いた。

「いや、考えたんだけどさ、闘技大会の予選を勝ち抜くためにはどうしたらいいのかって考えてたんだ。

俺は魔力が少ないから遠距離魔法では戦えない。そうになると、必然的に近接格闘技になるだろ？」

けど残念ながら俺は格闘技の経験がないんだ。それで誰かに教えもらおうかと思つて。」

「なんだそういうことか。残念ながら俺はしたことないな。」

琥珀の説明に一同は納得した様子だったが、明がやってないとすると誰もいなさそうだった。

あきらめて、自分でどうにかしようかと考え始めた琥珀が視線をさまよわせると、申し訳なさそうに1人の少女が手を上げた。

「あ、あのお」

「えつと、泉さん？」

突然で何のことかよく分からなかったが、すぐに先ほどの話のことだとわかった。

「わ、私少し武道やってて…」

その泉の発言に、琥珀以外の人間も思わず声を出して驚いてしまった。

それはあまりにも意外すぎたよで、空でさえも驚いていた。

「そ、そうなんだ。よかったら、少し教えてもらえないかな？」

泉が武道を嗜んでいた事は驚いたが、それよりも琥珀には闘技大会という差し迫った問題があった。

「えっと…ど、どうしよう。」

泉は困った顔を空に向けて、どうしたらいいのかと聞いていた。

「なんで？教えてあげればいいじゃん。」

空は明るく泉に言って、空たちはさっさと魔法の練習のために離れていった。

あとにのこされた琥珀と泉はどうしたらよいか分からずに、互いの顔を見ていた。

「あー、えっと、お願いできるかな？」

もう一度泉に琥珀が尋ねた。

その意味を再び考えた泉は少し戸惑いながら、答えた。

「あの…私でよろしければ。」

そう言って恥ずかしそうにうつむいてしまった。

「とりあえず、奥に行こうか。入り口の前だと邪魔になるし。」

その言葉に泉は、自分達が入り口の前に立っていることに気が付き、慌てて奥に走っていった。

その様子に苦笑しながら琥珀も泉の後を追いかけた。

「えっと…じゃあ始めますね？」



相変わらず引つ込み思案なのか、声が小さかった。

こうして、闘技大会までの間、琥珀と泉の武道の特訓が始まった。

~~~~~

「おい、もう時間だぞ琥珀。」

明の声が聞こえて、時計を見るとすでに下校時刻の5分前になっていた。

空や東条たちもすでに練習を終えて帰る準備をしていた。なんとか下校時刻ぎりぎりに学園を出ることができた。

「なんか琥珀ボロボロだね？」

「そう言われればそうだよー。」

空と東条の声でみんなの視線が琥珀に向いた。それは琥珀にも思い当たることがあった。

「泉さんは、思いのほかスパルタだったんだ。」

琥珀の発言に、泉は恥ずかしそうに下を向いてしまった。

その様子を見てみんなはまた驚いていたが、すぐに明が笑い出した。

「あははは、何か意外だなー。で、琥珀に武道の才能はあったのか？」

明がまだ笑いながら泉に話しかけていた。

「あの、えつと…はい。なんていうか、場慣れしてる感じがしました。」

泉の一言に、一瞬ドキッとした琥珀だがすぐにいつも通りの様子に戻った。

場慣れしていると言われたことは、少しあたっていた。空にも秘密にしているバイトのことだろう。

「そうかな？まだよくわからないけど。」

そう言っただけで誤魔化して琥珀はすぐに違う話題に変えてしまった。

その後は、またいつものように学園での出来事や、交流戦についての話をしながら家に帰っていった。

~~~~~

空と夕食を済ませたあと、リビングでテレビを見ていた空に庭で練習することを告げて今日泉に教えてもらったことを練習しに行った。泉には格闘戦の基本的なことを教えてもらった。

間合いの取り方や、防御、攻撃とさまざまなことを教えてもらった。

「…はっ、…はっ」

とりあえず今日教えてもらった、型の練習をすることにした。

(明日の予選が一番きついかもしれないな)

その日の夜は、夜遅くまで泉に教えてもらったことを繰り返し練習した。

闘技大会本戦まであと6日

闘技大会の予選は放課後開催となっていた。

予選は全部で3回戦で、今日と明日と明後日というなかなかしんどい日程となっていた。

交流戦と言う名目なので、1年生の予選の相手は1年生であった。

「なあ、ホントに大丈夫なのか？」

昼休みに琥珀がパンを頬張っていると、明が心配そうに声をかけてきた。

その隣には東条もいて、2人して同じような表情をしていた。

「ああ、相手も同じ1年なら何とかなる…と思う。」

琥珀の自信のあまりなさそうな発言を聞いて、2人の表情はさらに険しくなった。

琥珀はあまり気にもせず、続きのパンを食べにかかっていた。

泉に頼んで、昼休みも練習の相手をしてもらうために多少急いで食べ終わった。

「じゃあ俺泉さんと練習してくるから。」

そう言って席を立った琥珀に、明と東条は追いかけるようにして着いていった。

昨日のように練習場所がちゃんと取れていないので、人気の少ない校舎から少し離れた芝生の上で練習することになっていた。

約束の場所に着くと、泉と空がすでに待っていた。

「ごめん、遅れた。」

「いえ、大丈夫です。」

短いやり取りを交わして、昨日のような練習が始まった。

昨日と違うのは、練習をしているのが、琥珀と泉だけであるというところである。

2人の練習風景をみた3人は、しばらくの間驚きで声が出なかった。その沈黙を初めに破ったのが、明であった。

「な、なあ、琥珀って確か初めてだって言ってなかったっけ？」

2人の壮絶な練習を見つめつつ、残りの2人に話しかけた。話しかけられた2人も、琥珀と泉から目を離さずに答えた。

「うん。私、琥珀のこと昔から知ってるけど、武道なんてやってなかったと思う…」

その間にも、二人の組み手は激しさを増していった。

琥珀の放った右の正拳に対して、泉は少し身体を動かしただけで避け、すかさず琥珀の懐にもぐりこんで空いた右わき腹に左足で蹴りを入れようとした。

その蹴りを瞬時に見極めた琥珀は、身体を捻って左手で払いのけて、一歩下がりが間合いを取った。

これだけの動きを2人は一瞬のうちにやってのけた。

「すごいですよね、冴原さん。」

東条の驚きを隠しきれない声を聞きつつ、残りの明と空もうなずいた。

「こりゃ、ホントに本戦まで行くかもな。」

「でも、闘技大会は魔法も使いながらだから、まだわからないよー。」

空の言うことももつともだが、それを差し引いても明には琥珀なら本戦出場も夢ではないと思っていた。

その後も、2人の練習と言う名の特訓は昼休みの終了5分前を告げるチャイムが鳴るまで続いた。

~~~~~

午後の退屈な授業もあつという間に終わり、放課後がやってきた。

予選のことを終始考えていた琥珀にとって、授業の内容など微塵も覚えていなかった。

ただ、琥珀にとって学園の授業はもはや聞かなくても何ら困ることはなかったのだが。

「琥珀、体育館行くか。」

明と東条の声を聞いて、机の横にかけてあつたかばんをひっ掴まえ、立ち上がった。

3人で並んで体育館に着くと、入り口のところに今日の予選の対戦カードが掲示されていた。

(∴ 最後の方か)

体育館は2階建てになっていて、1階は剣道部や柔道部などの武道系の道場になっていて、2階が体育館になっていた。

入り口の正面には大きな舞台があつて、入学式などに主に使われる。また両側には階段が付いていて、そこから上の見学席に行くことが

できるようになっている。
実質は3階建てなのかもしれない。

琥珀の試合は最後から3番目で、今日だけで試合は10試合あった。
予選は今日から3日間の計30試合となる。

初日ということもあって、体育館の中に見に来ている人はまだ少なかった。

本戦になると、人でいっぱいになって見えない人のために中継までされるらしい。

「琥珀の試合はまだ大分先みたいだな。空ちゃん達も来てるのか？」

「いや、泉さんはわからないけど、空は執行部だから取締りで来るって行ってたぞ？」

みんなで周りを見渡してみると、制服の右腕に執行部と書かれた腕章をつけた空が、舞台の上に立っていた。

空意外にも何人かの執行部が、同じように腕章をつけた生徒が舞台に立っていた。

舞台の近くにつけられた時計は、4時を指していた。

第一試合がそろそろ始まる時間になった。

「それでは、闘技大会予選第一回戦を始めます。

2年の芳野君と同じく2年の三明さんは体育館中央に出てきてください。」

放送と共に、男女1ずつが出てきた。

「これって、女子も出てるんだな。」

琥珀はてつきり男子ばかり出場すると思っていたので、少しあつげに取られた。

「そりゃ魔法に男女差はあんまりないからだろ。でも珍しいみたいだぞ。」

話しながらも3人で見学席に行き、空いているところを探した。少し歩いて探していたら、泉が一人でぽつんと座っているのを見つけたので、一緒に座ることになった。

舞台側に近い奥の方になったが、ここからでも十分観ることはできた。

「ルールは大丈夫ですね？それでは、はじめ！」

放送での合図と共に二人の選手は一気に魔力を高め始めた。

二人とも遠距離タイプなのか一向に接近する気配はなかった。

それからの内容もほぼ両者が魔法を打ち合うだけの消耗戦に終わった。

琥珀とはタイプが違うので、あまり参考にはならなかったものしつかりと見ていた。

「そろそろアップしてくるよ。」

5回戦が終盤に近づいたときに、3人にそう告げて琥珀は立ち上がりて体育館の外に出て行った。

外には同じように身体を温めるために何人かの生徒が身体を動かしていた。

(この中对戦相手いるのか?)

辺りを見回してみたが、よく考えると相手の名前も覚えていなかったのでもちろん相手が分かるわけが無かった。

簡単に準備運動を済ませて、精神集中して、それから遅くならないうちに体育館の中に戻った。

「おっ、帰ってきた。もうすぐ出番だぜ。」

さつきと同じ席について、今行われている試合を見た。

どうやら琥珀の前の試合らしかった。

内容は一方的な展開で、すぐに決着がついた。

「闘技大会予選7回戦を始めます。

1年の立花君、同じく1年の冴原君は体育館中央に出てきてください。」

初めに聞いた時と同じアナウンスが告げられ、琥珀は階段を下りて中央に向かって歩いていった。

見学席のいる明たちが、なにやら声をかけてくれているようだったが、周りの見物人の声などでよく聞き取れなかった。

時々周囲からは

「おい、アイツ”F”らしいぞ。」

とか

「うわ、調子乗ってんじゃあねえの？」

と揶揄する声もちらほらと聞こえてきた。

琥珀はもちろんそんな声を気にするでもなく堂々と指定された場所まで歩いていった。

そこには対戦相手が着ておらず、辺りを見渡してみると見学席から1人の男が飛び降りてきた。

(派手好きなやつ)

内心で思ったものの、顔には出さずにじっと相手の顔を見ていた。

「おい、俺が勝つたらもう一条さんに付きまとうなよ!」

突然の相手からの宣言に、琥珀は一瞬きよとんとしてしまった。

「えっと、どういう意味?空のクラスメイト?」

「…忘れたのならそれでいい。ただ、負けたら従ってもらうからな
!」

琥珀には身に覚えの無い喧嘩を売られたが、どうも承諾しない限りこの話は終わりそうに無いのでとりあえずうなずいておくことにしておいた。

そこでようやく納得したのか、中央に書かれた線のところまで下がった。

「それでは、はじめ。」

審判兼アナウンスの声を合図に相手の男子生徒は集中し魔力を収束し始めた。

相手の魔法が発動する前に、琥珀は相手のところめがけて猛然と走り出した。

それを見て、一瞬ひるんだ相手は、それまで収束させた魔力を霧散させてしまっていた。

「くそっ…」

立花はもう一度魔力を高めることをあきらめて、琥珀との距離をと

るため右横に走り始めた。

それを確認した琥珀は、走りながら一瞬にして魔力を収束させた。

「風よ、わが身を疾風のごとく動かせ、ムーブ」

呪文の一瞬後、魔法でゆがめられた自然の風が琥珀を取り巻いた。

その後の一瞬で、琥珀は先ほど空けられた立花との距離を詰めた。

立花が魔法が発動したと理解したときにはすでに眼前にまで琥珀が迫っていた。

慌てて防御壁を張ろうと魔力を高めるものの、やはり詠唱する前にその魔力は霧散させられた。

琥珀は風の魔法で加速された体のエネルギーをそのまま利用して、利き手である右の拳にすべての力を込めた。

拳が立花の左頬に食い込んだ。

パンチ自体に魔法が込められていた訳ではないので、威力は普通のパンチに毛が生えた程度だった。

それでも1メートルほど飛ばした。

「っっっ」

立花はうめき声を上げて、ひざを手で支えて立ち上がった。

琥珀としては、確実に決めにいったはずなのに立ち上がったことに対して、少し落胆してしまった。

そしてもう一度ファイティングポーズをとった。

「おお、琥珀の奴考えたな。」

明は一連の琥珀の動きを見て、感嘆のため息をついた。

それは東条も同じだったようだが、1人の少女だけが冷静なまなざしでその戦いを見つめていた。

それは、厳しくも見守るような視線だった。

「ちっ、今のはちょっと油断しただけだ。」

強気に言って、まだ戦う姿勢を崩さなかった。

（どうする、もう同じ手は通用しないか？）

そう考えていたが、立花は先ほどより多めに距離を空けて魔力を収束させ始めた。

それは先ほどより大きく、また密度も高かった。

（遠距離攻撃魔法か！？）

瞬時に判断して、琥珀も魔力を収束させ、先ほどと同じ魔法を使い立花との距離を詰めた。

「甘い！！」

土よ、すべてを飲み込む流れとなれ、マッドフラッド！！」

詠唱の刹那、魔法で作り出された泥が濁流となって襲い掛かってきた。

幸いなことに、体育館の中には土自体が存在しなかったので、それを作り出す分に多くの魔力を必要としたようで、威力はあまりなかった。

それでも流れに飲み込まれてしまったらひとたまりも無い。

琥珀は、立花に向かっていた加速を、体育館の見学席に加速しなおして濁流を避けることに成功した。

そして間髪いれずに立花に向かって飛び出した。

魔法の使用で、一瞬隙ができた立花には琥珀の攻撃を避けるだけの余裕がなかった。

そして、今度は琥珀の振り出した渾身の右ストレートは相手のみぞおちを捕らえた。

ウッ

と低い声がもれ聞こえて、次の瞬間には相手の作り出した濁流が跡形も無く消え去っていた。

そして、一瞬の静寂のあとに、割れんばかりの声援が聞こえた。

琥珀は、腕の中で意識の失った相手をそっと地面に置いて、何事も無かったかのように見学席に戻っていった。

席に戻るなり明や東条に賛辞を浴びせられ、琥珀もうれしそうに表情を崩した。

舞台にいる空に目を向けると、空も周りを気にしながらも手を振ってくれた。

こうして琥珀の闘技大会第一次予選はあっけなく幕を閉じた。

そして次の日には、”F”クラスの奴が、”S”クラスの奴を倒したと言う衝撃的なニュースは瞬く間に広がるのだった。

「今日で予選は最後だったけ？」

明の声で、やっと放課後になったことに気が付いた。相変わらず授業は上の空で、考えていたことは西野の言っていたことだった。

『お前は俺の情報聞いて、それでどうしたいんや？』

(どうしたい…か。)

分かっていることは、あの事件は人為的に引き起こされたと言っていること。

つまりは犯人がいて、そのせいで空が家族を失った。それが現実で、琥珀にとってはすべてのように思えた。

「ああ、今日の1試合目だったかな。」

「ならさっさと行こうぜ。」

明の言葉を発端に、東条も加えた3人で体育館に向かった。昨日の予選のことを話しながら歩く。

「それにしても、昨日の予選はすごかったね。」

東条の発言に明が大いに同意した。

「まさかあんなすぐに決着が付くとはなー。だって開始5秒で終わ

りだぜ？」

「まあ、まだ1年だし経験不足だったんだよ。」

昨日の対戦相手は1年の”A”クラスの生徒だった。

相手の魔法が発動する前に、肉体強化の風系魔法で接近して手刀を食らわせて気絶させて試合終了。

それは琥珀が強いのではなく、単に相手の経験不足だと考えていた。

「それにしたって、”F”クラスの生徒が本戦出るかもしれないんだぜ？」

「明は琥珀君にプレッシャーかけすぎだよ。」

そうは言っているものの、東条の表情にも期待の色は明らかに見て取れた。

そのことに気が付きながらも、琥珀は淡々と体育館までの道を歩き続けた。

階段を降り終えて、右に曲がった。

「まだわからないよ。もしかしたら今日の相手がすごい強いかもしれないからな。」

しかし、本音を言ってしまうと今日も負けるつもりはなかった。

自分が何をしたいかはともかく、あの事件のことを知りたかった。

「んなこと言っつと、勝てる試合も負けちまうぞ。」

ニシシと明は笑いながら茶化してきた。

3人が体育館の入り口の前に着いた。

琥珀は2人に先に入るように言っつて、外で少し身体を動かしていくことにした。

「よお、今日で予選最後らしいなあ。」

前屈しているときに、前から声をかけられ一瞬誰か判断がつかなかったが、この関西弁をしゃべる知り合いは一人しかいないことを思い出した。

顔を上げて、その顔を見た。

体育館の壁に背をもたれてこちらを見ていた。

「ああ、何です?」

そっけない琥珀の返事にも特に気にしたわけでもなく、西野はいつもの調子でしゃべりかけてきた。

「今回の相手はちょっと手ごわいで。」

なんてことの無い会話だった。

琥珀は身体をほぐしながら、西野の対応をする。

「そうですね。それはどうも。」

興味のカケラも示さない琥珀の態度に、西野は面白くなさそうに顔をしかめてそれでも話し続けた。

「なんや、つまらんのお。まあがんばってくれや。」

それだけ言っつと、西野はいつものように着崩した制服を払っつて体育館の中に消えていっつた。


~~~~~

「今から最終日、闘技大会予選を始めます。  
1回戦の選手は中央に集まってください。」

琥珀はいつものように堂々と歩いていった。

変わったところと言えば、初日より見学席にいる人数が増えたことと、応援されることである。

もっとも後者は、単に長く”F”の生徒が闘技大会に参加しなかったと言うことから面白半分だろう。

相手の選手は琥珀にすこし遅れてやってきた。

「遅れました、すみません。」

それだけ告げると、すぐに待機線まで下がっていった。

同じ”S”クラスでも、1回戦の時の奴とはずいぶん雰囲気が変わった。

それは冷静だからなのか、それとも緊張からなのかはその時にはわからなかった。

「それではこれより最終日予選1回戦を始めます。」

…はじめッ!!

審判の声を合図に二人の顔が引き締まった。

見学席の人間も期待と、明と東条と泉は不安も含めた表情で2人の試合を見守っていた。

相手は琥珀とは桁違いの魔力を収束させた。

その大きさを認識しつつ、琥珀は攻撃に転じるために行動を始めた。

「風よ、わが身を疾風のごとく動かせ、ムーブ」

これまで通りに肉体強化の魔法を使い、瞬殺すべく動いた。西野の忠告は頭の中にあっただが、相手の攻撃の前に動くことに戸惑いはなかった。

人であり人であらざる速さで相手選手に詰め寄る。

右手に力を込め、みぞおちに振りかぶった拳をたたきつける。

「風よ、我を守る壁となれ、ウォール」

微塵も焦りを見せずに、ただ琥珀を見つめたまま魔法を顕現させた。ガンツ！！

甲高い音と共に琥珀の右拳は阻まれ、届くことはなかった。

そして、相手は新たに魔力を収束させることなく次の詠唱を行った。

「風よ、すべてを切り刻め、ソニックムーブ！！」

その言葉と共に不可視の風の刃が琥珀を襲う。

いったん距離をとるために、琥珀は大きく後ろに飛びのく。

それでも相手の刃は琥珀の身体を切り刻んだ。

顔、首、腕、腰、足すべてに傷を付けた。

「つつ…」

（まだ致命傷じゃない。まだいける）

そう自分に言い聞かせて、崩れた体制を立て直した。

額を切った傷のせいで、頬を血が滴った。

それでも尚、相手の表情は変わらず一心に琥珀に射抜いていた。

~~~~~

「なあ、おい。今あいつどこから魔力ひねり出したんだ？」

見学席にいる明が近くにいる東条と、泉に話しかけた。

顔は2人の試合に釘付けになっていて、言葉だけを向けた。

「んー、わかんない。」

東条はきっぱりと明に言い切った。

「あ、あれは、多分最初に収束させた魔力を使った…んだと…思います。」

最後に行くほど泉の声は小さく聞き取りにくいものになっていった。それでも今の問いに答えてくれる人がいるだけで明にとってはありがたかった。

空は今日も執行部の仕事で舞台の上にいた。

その眼は真剣で、周りの仲間も声をかけられずにいた。

「でも最初の風壁に使ったんじゃないのかよ？」

「そのときに使った魔力は全体の一部の力で、その残りを攻撃に使ったんだと…思う。」

またも自信のなさそうな泉の答えに明は首を傾げていた。

魔法の基本は収束させた分の魔力をすべて単体の魔法に使うのが常識である。

半端に収束した魔力が残れば制御を失い暴走の危険がある。

そう教わるのである。

「それじゃあ、暴走したりするんじゃないの？」

東条も同じ考えに行き着いたようで、明の意見にうなずいていた。

「それは…そうなんですけど、でも実際にされているわけですし…」

泉の発言に明も東条も首をかしげる。

魔法で自然には有り得ない不思議を作り出す。

だが今3人の前で行われたものはその魔法の理論を打ち崩すものだった。

わずかな議論の間にも試合は依然として進んでいた。

~~~~~

「…くつ。」

近づけば風壁に阻まれ、距離をとっても風刃で消耗させられる。

魔力の量が同じであれば根比べといきたい所だが、あいにく琥珀には人並の魔力は無い。

（早く勝負をつけないと魔力に余裕がなくなってきたな。

かと言つて策もなく突っ込むとまた切り刻まれるか。）

一旦距離を取つて、呼吸を落ち着けた。

相手はまだ余力もありそうで、最初と変わらず涼しい顔をしていた。まだ1撃たりとも与えていないどころか、触れてすらいない。

（ピアス外せば簡単に倒せるのにな。）

心の中の案に苦笑を浮かべ、そして魔力を収束させた。

「風よ、雷となりてすべてを貫け、ライティング!!」

琥珀の詠唱に相手は警戒を一層高めて、構えなおした。しかし、予想とは裏腹に何も起きなかった。少なくとも見学席の人にはそう見えた。それは相手にも意外なようで、不発に終わったと思っただろう。

「使えない魔法を使うとはね。今度はこちらから行かせてもらいますよ…ッ!」

その言葉を皮切りに、今までとは比べ物にならない魔力が相手を心に収束していく。間違いない、これだけの魔力を込めた魔法を食らえば跡形も無く消し飛ぶだろう。

頭で考えるより早く琥珀は理解した。

先に行動したのは相手だった。

「風よ、すべてをなぎ倒せ、ストーム!」

言葉と共に、体育館を壊すほどの巨大な突風が発生した。見学席からも悲鳴が聞こえた。

さまざまなのが吹き飛ばされて、辺りに舞っていた。

## EPISODE 2 - 7

琥珀の手から紫電が弾け、体育館を覆っていた暴風は一瞬で姿を消した。

吹き上げられていたものは支えをなくし、そして八方に落ちていった。

会場の誰もが状況を把握するには時間が足りなかった。

そして、その視線の先には1人の生徒が立っていた。

身体のうちこちらから血を流し、その端正とも言えるほどの顔にも鮮血が滴っていた。

「・・・」

琥珀の視線の先には相手の生徒が床に倒れ伏していた。血は出ておらず、寝ているようであった。

「あの、コールしてもらえますか？」

琥珀はしばらく待っても行われないことに痺れを切らして審判に言った。

「しよ、勝者冴原琥珀！！」

本戦出場です！！」

その宣言とほぼ同時に、体育館の中を歓声が包み込んだ。

その中には負けた相手に対する罵声のような声も含まれていた。

それを背に、琥珀は何事も無かったかのように見学席にいる明たちのところに向かった。

周りからは好奇と嫌悪の混ぜられた視線をぶつけられた。

「おつ、話題の人物がやってきたな！！とりあえず、おめでとう。」

明の声を発端に東条と泉にも賞賛の言葉をかけられた。

むずがゆさを感じながらも、琥珀の気持ちはすでに本戦の西野との試合に向いていた。

あくまで琥珀にとっては、本戦進出や優勝が目標ではなく西野に勝つことだった。

「ねえねえ、最後のアレ何やったの??」

ひとしきり話し終わったところで、気になっていたのか東条が聞いてきた。

話そうかと一瞬迷ったが、

「秘密だな。」

そう言って誤魔化しておくことにした。

(ただでさえ使える魔法が少ないから、早いうちに手の内をばらすのはよくないな。)

「おいおい、いいじゃねえかよ。」

明はそれでも引き下がる様子がなかったが、素直に理由を言つとすぐにあきらめたようだった。

その日の試合でも西野は予選に姿を現すことはなかった。

~~~~~

空の執行部が終わるまでの少しの間に、保健室に向かい今日の怪我

の治療をしてもらった。

さすが保健医というだけあって、回復魔法はさすがのものだった。それに加えて病気と違い、傷などの怪我の回復は簡単らしいということもあって傷のほとんどは塞がってしまった。

琥珀が校門に着くころには、明達に加えて空もすでに待っていた。それと、先ほどの対戦相手の選手が立っていた。

「あっ、どうも始めまして。」

そう言ってニツコリと笑った顔は先ほどとはまったくの別物であった。

試合中は鉄面皮のような表情からいっぺんしたのを見て、琥珀は対応に困った。

周りを見てもそれまでに話していたのだろう、すっかり打ち解けていた。

もともと泉と空は同じクラスで知り合いであったということだろう。

「えーと、どうも冴原琥珀です。」

戸惑いながらも当たり障りのない自己紹介をしておくことにした。それに気が付いた相手は少し慌てながら自己紹介を始めた。

「すみません、桜井かなめ要です。」

一通りの紹介を済ませたところで、これだけの大人数で校門にいるのも邪魔になると思い場所を変えることにした。

いつものように女子のアイデアで学園から少しはなれたところにあるカフェに行くことになった。

道中で少し桜井要と言葉を交わしたが、先ほどとはやはり別人のよ
うな印象はぬぐいきれなかった。

カフェに着くとそれぞれコーヒーやケーキなどを頼んでいたが、琥珀は夕食のことを考えてコーヒーだけにすることにした。

「それにしても、さっきは驚きましたよ。」

そう言って、注文を終えて話し出したのは桜井要だった。

「まさかあの状況でとっさに”ゲート”を使うとは予想外でした。」

せっかく秘密にしておいたのにと内心思った琥珀だが、そこまで隠す必要も無く何も言わないことにした。

その代わりに、頼んだコーヒーを一口飲んだ。

「そうなのか？　そういえばこの間できるようになったって言ったな。」

口にケーキを入れたまま話す明に、正面に座っていた東条が怒った顔で見ていた。

それに気が付いた明はすぐに開けかけた口を閉じた。

次に言葉を発したのは泉だった。

「でも、その前の雷の魔法はどうして失敗したの？」

泉はゲートよりもその前の雷の魔法に興味をもっていた。

確かに見学席から見えていたら失敗に見えたのかもしれない。

「あれは失敗ではないですよ。」

琥珀の返事よりも先に桜井要が話し始めた。

「冴原さんはあの時雷を外に向けて放つのではなく、自らの身体に流したのですよ。」

正確には身に纏ったと言うべきでしょうか。

そして僕のソニックムーブが当たる直前にゲートで僕の死角に回り込んだってところですか？」

相変わらずさわやかさ100%のスマイルを浮かべて琥珀を見た。

「まあそんなところだ。それと琥珀でいいよ。」

「では僕は要って呼んでください。」

そこでまた琥珀は手元のホットコーヒーを口まで持っていった。

隣の明はケーキを食べ終わったようで、もうひとつ食べるか迷っていた。

「でも雷の魔法使ってるのにどうやって”ゲート”使ったの？」

琥珀の前の空がやっと口を開いた。

明とは違い、少しずつ味わって食べていたケーキはまだ半分ほど皿の上に乗っていた。

「まあ、なんだ…」

琥珀がどう説明しようかと逡巡していると、その先を要が説明した。

「簡単に言つと、琥珀さんは雷とゲートの同時展開をしたんですよ。」

その言葉に琥珀以外のメンバーが一瞬固まった。

一方の琥珀、要の”さん”付けに対して少し不満を抱いていた。

「でも、そんなことって…」

要の発言に泉がさかさず疑問を投げかけた。

泉は理論関係が得意らしく、例外などはあまり納得いかないようだ。

「不可能だと思われがちですが、決して不可能ではありませんよ。理論的には可能なはずですよ？ですが、単発に比べて制御は格段に難しいですが。」

ここにきて、桜井要は笑みを絶やさなかった。

桜井の説明に納得はしたものの、まだ驚いているようだった。

「そういう事だ。思いついたのは、要がタメなしで魔法を使った時だよ。」

あの状況では他に手は無かったから、一か八かでやってみたんだ。

まあ、言ってた通り制御が難しくして少し離れたところに出て大変だったけどな。」

こともなげに言う琥珀に、もはや誰もが感嘆の声を上げた。

その様子を見て、空はまた満足そうにケーキを食べ始めた。

そのまま交流戦の話をした。

気が付けば辺りの町並みは、闇に包まれていた。

今日のところはとりあえずそのくらいでお開きとなった。

「それじゃあねー。」

「うん。バイバイ。」

短い言葉を交わして、空と琥珀以外が自宅に帰っていった。

「んじゃ、帰ってご飯にするか。」

「そうだね。」

空と琥珀は、隣り合って自宅までの道のりを歩き出した。

空は執行部で忙しそうだったが、試合を思いの外しっかり見ている。琥珀は呆れてしまった。

「仕事をちゃんとしろよな。」

苦笑を顔に浮かべながら言葉を吐いた琥珀に、少しムツとした顔で空は言い返した。

「だって気になったんだもん。

いいでしょ？少しぐらい！」

そう言って、すねていた空を見て琥珀は笑っていた。

二人の頭上の漆黒の空に半分の月が慎ましく輝いていた。

星はあまり見えない。

該当の明かりや、空気の汚染で何時のころかあまり見えなくなってしまったらしい。

琥珀たちが物心付くころにはもう今のようになっていた。

家まで空と他愛も無い話を続けながら歩き続けた。

本当の家族のように。

~~~~~

「ゼロ、久しぶりの仕事だ。」

食事の後、空が食器を洗っているリビングで突如として鳴った端末に耳をやると、聞きなれた声がそこから流れた。今の時代に、音声だけの連絡をとるのは組織ぐらいなものだった。その言葉に緩んでいた琥珀の緊張感は少し張り詰めた。

「わかった。時間はいつもの時間でいいのか？」

「ああ、いつも通りの場所で。詳しいことは合流してからだ。それじゃあな。」

一方的に用件だけを告げて、その電話は切れた。

特にそのことが深いというわけでもないのに、何事も無かったようにまたテレビを眺め始めた。

画面という概念はなくなり、今では立体ホログラムが一般的となっていた。

映し出されているのは、どうやら新人の芸人達のようなのだ。

興味も無かったので消そうかと迷ったが、そのまま眺め続けることにした。

空が洗い物を済ませ、リビングのソファの上に腰をおろして、2人そろってテレビを見て、いつも通りに過ごして空は帰って行った。

一度風呂に入ろうかと考えたが、どうせまた汗をかくので、時間まで本を読むことにした。

「そろそろ時間だな。」

時計の針は12時の少し前を指していた。

待ち合わせの場所はここからそれほど遠くはない。

琥珀は上着をひっ掴まえると、それを羽織って玄関の鍵を閉めて歩

き出した。  
その顔に表情は表れていなかった。

「あれ、琥珀くん。昼休みはあきらちゃんと特訓じゃなかったっけ??」

東条の一言で、教室でパンを食べていた琥珀の手は止まった。どうやらまたやってしまったらしい。

「…あ、すっかり忘れてた。」

残りのパンを口の中に放り込んで、すぐに泉が待つ場所に向かって行き、約束の場所に着くとすでに泉と空が待っていた。

「遅れてごめん。」

「いえ、大丈夫です。」

泉は特に怒る様子も無く、その後の特訓も滞りなく行われた。

最初に比べるとずいぶん泉についていける様にはなったが、泉はまだまだ本気には程遠い様子で、昼休みが終わるころには、琥珀の服はドロドロに汚れていた。

近くで見ていた空は、最近少しずつ暖かくなり始めた春の陽気に負けてウトウトして、起こすのがもったいないほど気持ちよさそうだったが、放っておくわけにはいかずぐるぐる空を泉が連行していた。

その様子を見届けてから琥珀も自分の教室に向けて歩き出した。

(度忘れじゃなかった。

アレは完全に忘れてた…)

教室までの間に、琥珀は泉との約束を忘れていたことについて考えていた。

しかし、教室に着くとすぐに明が話しかけてきてすぐに考えていたことを忘れることにした。

（まあ、少し疲れてるんだろう。）

そう自分を誤魔化して。

席から見える景色は、春らしさをどんどん増しており、冬の凍てつく様な風も、風景も消えていた。

桜の樹には新緑の葉が増えてきていた。

~~~~~

本戦までの数日間、特に変わったこともせずいつものように放課後にみんなで集まって練習をしていた。

唯一変わったといえば、その中に桜井要が加わったことだろうか。要は闘技大会のみの参加だったので、特にすることもなく全員の練習風景をみていた。

そして、時々何かを話しかけていた。

その様子からはすっかり馴染んでいる様に見て取れた。

気になることは、西野のことだった。

少し聞いた話だと、西野は前年度、前々年度の闘技大会の優勝者だったらしくワイルドカードとしての参加だった。

そのため予選も免除されており、まったく相手のことが分からなかった。

分かることはファイターという事から、近接戦闘という可能性が高いことだった。

「…っおっ!!」

「考え事してちゃ、危ないですよ??」

その間にも泉の小さい手のひらを握って作られた拳が琥珀の顔のすぐ横を通過した。

一瞬でも気を抜くと吹っ飛ばされて意識を刈り取られてしまうような早さだった。

それでもまだ余力は十分ありそうで、琥珀の息だけがあがっていた。

琥珀は身体を捻り、右手を繰り出した。

それを意とも簡単にかわして、お返しとも言わんばかりのカウンターが琥珀の右わき腹をめがけて飛んできた。

「やばー」

「ーい、と言う前に泉の左フックは琥珀に直撃していた。

「ぐっ…」

女の子のパンチとは思えないほどの重さと威力だった。

琥珀は意識を保つことに必死になっていたので、泉からのトドメの一撃にまったく反応することができなかった。

そのままみぞおちに決まったのを見届けることなく、琥珀の意識は混濁していった。

「あつ、えつと…ごめんなさい。」

泉の謝罪の言葉が琥珀に届くことは無く、そのことに周囲も驚くことも無かった。

またか、と言わんばかりの視線を投げかけるだけでまた練習に戻っていった。

ただ、相変わらず空だけはすぐに琥珀に駆け寄っていた。泉はどうしたらよいのかわからず、オタオタしていた。こんな光景が日常となりつつあった。

~~~~~

次に琥珀が眼を覚ますと、近くの壁にそつと背をもたれるような形になっていた。

となりには心配そうに空が琥珀をみていた。

「あつ、起きた！もう大丈夫??」

心配しすぎる空の顔を見ながら起きることもいつものことであったが、毎回この表情をされることには未だに慣れることは無かった。

「ああ、大丈夫だよ。」

そう言うてから、近くの時計を見てまだ少し時間が残っていることに気が付いた。

さすがに今からもう一度泉に練習に付き合ってもらうのも申し訳なかつたので、魔法の練習をすることにした。

偶然とは言え、この間の魔法同時展開の練習を少しでもしておきたかった。

立ち上がるうとした琥珀に空が心配そうな顔を向けた。

「大丈夫。魔法の練習だから。」

そう言うてから、空に笑いかけて立ち上がった。

眠っていた場所から少しはなれたところに移動した。  
周りの生徒達の中には帰りだす者もいたが、興味深そうに琥珀を  
見ている者もいた。

本戦出場を決めてからさらに注目を浴びることが増えた。

顕著なことを言えば、朝の靴箱にラブレターが入っていたりとか  
古典的なやり方で、これだけ発展した世の中なのに未だに風習と  
して根付いていた。

始まりは桜井要との試合の次の日だった。

朝いつものように空と登校して、靴箱を空けた瞬間にいくつか入  
っていた。

なだれを起こすとか、そんなレベルではなかったが琥珀にとって  
は初めての経験だった。

その光景にしばらく我を忘れていて、空に声をかけるまでどうし  
たら良いのか呆然としていた。

「どうしたの…」

琥珀の眼の先、靴箱の中にラブレターが入っていることを見つけ  
た空は、大騒ぎだった。

何を言っていたのかまではわからなかったが、その声で琥珀はや  
っと目が覚めた。

とりあえず、入っていたものをかばんに詰めてその場を去った。  
それ以上にその日の昼休みは大変であった。

「おいおい、まだ中見てねえのかよ。」

「あ、ああ。」

「なら今から開けてみようぜ。」

明の意地悪そうな意見に、誰も反対するものはいなかった。いつものメンバーに、詰め寄られていた。

みんな興味津々といった様子で、事の成り行きを見ていた。

その中には桜井要もあり、助けてくれるかと琥珀は視線を向けた。が、彼は笑うばかりで助けようとしなないどころか

「早くしないと昼休みが終わってしまいますね。」

と、こともあろうにそんなことを言いやがった。

その先のことは、琥珀はもう封印したいほどのことだったのは言うまでもあるまい。

それに比べると、好奇心の視線になど耐えることは難しくなかった。

ただ、あまりおおっぴらに魔法の練習をすることは相手に情報を与えることに繋がるので、その日は基本的な魔法の練習だけにとどめておいた。

~~~~~

「おはよ。今日は交流戦だな。」

教室に入って、明に会うと開口一番に言い放った。

言われなくとも学園の中はまるで祭りのような浮かれぶりだ。

交流戦は朝から行われ、今日一日の授業はなくなる。

名目としては、各個人で自分の一番興味のある会場の戦いを見て学ぶ。

と言う事にはなっているが、実際は賭けをしているなど日常茶飯事なようだ。

実際に今朝の校門の近くで、闘技大会の賭けの倍率が張り出されて

いた。

ちなみに琥珀は一番倍率が高かったのは言うまでもない。

「そうだな。明は何時からなんだ？」

系統別に大会は分かれていて、時間帯がバラバラになっていた。

「んと、9時からの一番初めみたいだな。まあ闘技大会と違って観客が少ないのが救いだな。」

「空と時間がかぶってるな。どうするかな。」

空の大会も9時スタートとなっていた。

闘技大会のように前の段階から予選を行わないため、大体の競技が朝のうちに予選を済ますみたいだった。

「あと東条は10時って言ってたかな。」

「見えるかギリギリだな。まあ気が向いたほうに行くことにするぞ。」

そう言っつて、琥珀はいつものように自分の席に座った。

今日は授業がなく、かばんには昼食のパンと筆記用具ぐらいしか入っっていないかった。

そのかばんを机にかけると、外を見てのんびりとすることにした。1時間目の開始の時間に、全体での開会式のようなものが開かれるので、それまでのんびりできる。

緊張して落ち着かない生徒も多い中、琥珀だけはいつものようにぼんやり景色を眺めていた。

3階ということもあり、街の遠くまで見ることができる。

電車と呼ばれていたものは、その姿を消し、リニアに成り代わった。車もガソリンでなく、すべて動力は電気になり運転もオートが主流になった。

そのおかげで事故も激減した。

石油などのエネルギーは使われることがなくなり、代わりに太陽光や、風力、原子力が主流になった。

昔、二酸化炭素の増加を騒いでいたことが琥珀には信じられないほどだった。

それでも依然として、人と人の争いはなくならない。

それに比べて、この街は平和であった。

「そろそろ、グラウンド行こうぜ。」

ぼんやり物思いにふけていた琥珀の頭上から声がかけられた。顔を上げると、明と東条が待っていた。

2人はすでに準備が終わっていて、琥珀も慌てて用意をした。

「それで、琥珀君は明と空ちゃんのどっちを見るの??」

意地悪そうな笑みを浮かべた東条に苦笑しながらも、まだどちらに行くかを決めかねていた。

「空ちゃんの方に行ってやれよ。俺は応援は恥ずかしい。」

明は少しうんざりとした顔で琥珀に言った。

「俺が行くのがそんなに嫌なのか??」

東条にされた仕返しと言わんばかりに、明を弄った。

「男に言われてもうれしくない台詞だな。」

3人で笑いながらグラウンドまでの少しの距離を並んで歩いた。

2人ともあまり緊張の色は見えなかったが、それでも少しは緊張しているようだった。

外はもうだいぶ暖かく、動けば汗をかくぐらいにはもう夏に近づいていた。

そんな陽気の中で交流戦は始まった。

「さて、どうしようかな。」

開会式終了後、明と東条は交流戦の準備や何やらで会場に行ってしまった。

その場に残された琥珀は、これからの予定を考えていた。不意に声をかけられ顔をあげると、

「一緒に見に行きませんか？」

いつものように爽やかスマイルを惜しげもなく振りまく桜井要の姿がそこにあった。

外見も悪くないその顔に、さらにその笑顔、周りにはいくらでも行きたがる女子はいるだろうに。

「わざわざ俺に声をかけるとは変わり者だな。」

そう言いつつも、どうするか決めかねていた琥珀にはちょうどよかった。

「要はどれ見に行くんだ？」

そう聞きながら、空の競技の始まる時間を聞くことを忘れていたことにいまさらながら気がついた。

（まあ、空のことだどうせ優勝とかするだろ。）

「そうですね、今年の競技は”火”と”水”、”風”と”土”の合同実施のようですね。どっちに行きましょうか。」

「へえ、そうなのか。そういえば競技内容とか聞いてなかったな。」

「僕も詳しいことは聞いていませんが、とりあえず会場に行きましようか。」

桜井要曰く、第一グラウンドで空、泉、東条の出る火と水の競技第二グラウンドで、明の出る風と水の競技が行われるらしい。

「明は9時からか。明には悪いが空たちを見に行くか。」

ということ、明には申し訳ないが空たちがいる第一グラウンドの方に桜井要と琥珀は歩き出した。

第一グラウンドの近くの掲示板に競技内容が詳しく書かれていた。

「えっと、

あらかじめ決められたペアと2人1組で行う。

ペアは火にエントリーした者と、水にエントリーした者がペアとなる。

競技内容は、全20組のサバイバル形式でまず水属性にエントリーした者が規定の大きさの氷球を作る。

それを相手の火属性の選手に壊されなければ勝利で、逆にペアの火属性にエントリーした者は相手に壊される前に壊せばいいわけか。

なお、相手の選手への直接攻撃は禁止…。」

「これはまた変わった趣旨の競技ですね。」

楽しそうに聞いた感想を告げる要。

そしてグラウンドに目をやると、試合開始まであと5分と迫っていた。

ここに来る間に聞いたことだが、空と泉は9時からの部らしい。人数の関係で4組に分けて行われるようだ。空と泉は1部で、東条は最終の4部だった。

「それには同意するよ。ん、あれは空みたいだな。」

グラウンドに空と泉が立っていた。2人は少し話して、離れていった。どうやらペアではないらしい。

「そうですね。お二人はペアではないようですね。」

桜井要と第一グラウンドへと続く道の途中にある階段に腰を下ろした。

あたりには木々が生い茂り、ちょっとした影を作り出していた。まだ春とはいえ最近の太陽はぎらついている。

「そりゃSクラス同士でペアになったら不公平だろ。」

「確かに。お、始まるようですよ。」

要の声でグラウンドに目を向ける。スピーカーで流される審判の声を聞きながら要と話を続ける。

「みたいだな。交流戦って毎年こんなもんなのかな。」

目の前では水魔法を使って空気中の水分を集めて氷球を作っていた。呪文を唱えること一つとっても人それぞれだ。

使えるものは上位魔法で作出すもの、下位魔法だが工夫を凝らすもの。

もう一度スピーカーから合図が流れて、それに続いてペアが思い思いの場所に散っていった。

どうやらこれが本格的な開始になるようだ。

その中の一人の空の姿を見つけた。

「どうでしょう。僕も今年が始めてですからね。」

木陰で桜井要と談笑している間にも空の足は止まらない。5分もしない間に空は10個以上の氷球を破壊していた。特に呪文を唱えることなく破壊していく。

「なんか空が浮いているように見えるな。」

「そうですね。空さんはSの中でも特別ですからね。」

空のペアの氷球も魔法を受けていたが、なんとか守っていた。だがそれもそろそろ危ないかも知れない。ペアが集中力を切れかけている。

「そろそろ終わりですかね。」

試合開始からもうすぐ30分だ。

もう残りも5ペアもない。

空と泉は残っていたが、どうやら泉は限界らしく年上と思える人の全力の魔法を受けてなんとか耐えていた氷球が溶けてしまった。

空のペアの氷球はもう半分以上溶けていた。

空がそれに気がつき急いで戻ってきたが、少しの差で氷球は溶けきってしまった。

「ん、2人とも負けたな。」

「そうですね、残念です。まあ1年にしては健闘した方だと思いますよ?」

「まあ、そうだな。」

要と話しているうちに、試合の終わった空と泉が歩いてきた。特に悔しそうな表情はないものの、それでも残念な気持ちは拭えない様だ。

「お疲れ。」

「お疲れ様です、二人とも。」

座ったままの体勢から二人に声をかけた。

「んー負けちゃった。」

こちらに来た空はあっけらかんと言った。
泉はさっきの試合のせいで少し疲れて見えた。

「二人はこれからどうするんだ?」

「うーん。一緒に見て回ろうよ。」

「そうですね。そうしましょう。」

午前は東条の試合を見てから、みんなで昼食をとって終わった。ちなみに東条も明も1回戦で敗退だった。
(そういえば明の競技内容聞き忘れてた。)

ま、いいか。」

昼ごはんの後に、交流戦のメインとなる闘技大会が行われることになった。

「そういえばまだ対戦相手見てないや。」

何気ない琥珀の言葉を聞いて、全員が驚いた。特に空は驚いていた。

「えっ！？まだって何してるの??早く見に行こうよ!！」

とのことで、全員で対戦カードを見に行くことになった。

場所は第一闘技場

対戦相手は――

「立花：なんか聞いたことがある気がするけど…」

「あれ、立花くんって予選のとき琥珀と試合した子だよ?」

琥珀の疑問に空が答えた。

立花というやつと空は同じクラスだった。

「ああ。そんなことより…西野とは2回戦か。」

西野は第一シードということで、一回戦は免除
試合開始は13時からだった。

「ねえ、何で琥珀はそんなに西野先輩を気にしてるの?」

空に西野との話のことは言っていない。

「まあ、ちょっとした賭けをしてるんだ。」

「賭け？」

「それは秘密だ。」

そう言っつて琥珀は空に話さなかった。

試合まで少し時間が残っていたが、琥珀は準備のために空たちとは分かれて控え室に向かった。

試合開始の時間になった。

琥珀は試合会場である第一闘技場のステージ入り口にいた。

予選とは違って、入場からはじめるらしい。

向かい合った反対側には対戦相手がいる。

円形の会場　　コロッセオの様な造りになっている。

観戦している人数は予選とは比べ物にならないくらい多い。

慣れないものならばこの雰囲気にも飲まれてしまうだろう。

「それでは、これから第92回国立魔法学園交流戦闘技大会をはじめます。

まずは1回戦、7年ぶりの”F”クラスからの出場です。冴原琥

珀！！

対するは、敗者復活戦から這い上がってきた”S”クラス、立花

亮！！

両者ステージへ！！」

その声を合図に会場のボルテージはすでに最高潮

一回戦であるにもかかわらずこれだけの盛り上がりは珍しいのだから。

雰囲気にも飲まれることなく、いつものように周りに意識をめぐら

せ颯爽とステージまで歩く。

見渡す限りの人、人、人

この中に空達がいるのだろうか。

視線を前に戻す。

ステージに上がると、一度見たことがある顔がある。

予選1回戦で倒した奴

「ふっふっ」

気味悪く笑っている。

敗者復活であがってくるくらいだ、何かあるのだろう。そう考えて琥珀は気を引き締める。

「それではこれから闘技大会を開始します。

・・・始めっ!!」

「この間の俺と同じと思うなよッ!!」

瞬間、立花の首からぶら下がっていたネックレスが、正確にはその先のリングがまぶしく光る。

魔力の光だった。色はグリーンつまり土属性

「しまっ」

た、と言う暇もなく琥珀の体に鋭い物体が飛んでくる。

会場の声援がよりいっそう熱を増す。

解説の声がうるさく響く。

相手の勝ち誇る顔が目映る。

が、琥珀の焦りは瞬時に消える。

全身に力をこめる。

一撃目の物体が琥珀の顔の右側すぐを通過する。

続けざまに左わき腹に突進してきたものも避ける。

そのまま3、4、…と避け続ける。

「うっ、っくしょ!!」

その声が続いてまた物体が生成される。
それを避けることを考えずに琥珀は攻撃に移る。

「風よ、わが身を疾風のごとく動かせ、ムーブ」

琥珀の体に不可視の風が纏わりつく。

そして琥珀が一步踏み出す。

そのたった一步で立花と15メートルほどあった差が半分にまで縮まる。

そして、もう一步踏み出す。

「はっ、甘いんだよおおお!!」

「なっ!？」

右拳を振りかぶって、ひねった腰を戻そうとした瞬間
目の前に土壁が現れた。

なんのモーションもなくただそこに現れる。

「まだまだあー!!」

避ける間もなく先ほどの鋭利な物体が琥珀を襲う。

どうにか肉体強化に使っていた風魔法で軌道を逸らす。

それでも逸らしきれなかったものが容赦なく琥珀の体を貫いた。

「っっ」

かすり傷程度ではあったが、運悪く1つだけ琥珀の左腕の二の腕
辺りを貫く。

そこから大量の血が滴り、動かすことも苦痛に感じられる。

なんとか立花から距離を取ろうと辛うじて後ろに跳んだ。

「どうや、ボロボロにされる気分はよお」

ニヤニヤと表情を作りながら立花は琥珀に詰め寄る。

その顔にはもはや憎しみと狂喜が占めている。

琥珀は知っている。

力に溺れた者の表情を。

「ずいぶん変わったな。」

止血するだけの魔力すら使うことが惜しい。

右手で傷口を押さえ、止血しようとする。

「お前は”F”の癖に生意気なんだよ。てめえらなんかに負けるわけにはいかないんだよ。」

再びの立花からの攻撃

「馬鹿の一つ覚えみたい……」

琥珀に鋭利な、鋼の切っ先が襲い掛かる。

(さっきの正体はこれか。)

とにかく避ける事に専念する。

右に左に、前に後ろに

続けざまに、途切れることなく

「しつこい、しつこいんだよっ……」

土よ、敵を残らず殲滅せよ

出でよ土の化身ゴーレム……」

~~~~~

「おおー、やる気満々やなあー。ちなみにこのときのやる気って字は”殺”やねんで、さっちゃん。」

第一闘技場にある生徒会専用の見学席でのん気に傍らの少女に話しかける。

話しかけられた少女は呼び名に不満があることを隠しもせず、生徒会長である西野哲平に返事をする。

「このままだとあの”F”の生徒が死ぬかもしれません。止めるべきなのではないですか？」

「そやけどー、まあもうちょっと様子見てみよーや。」

立花亮に呼び出された石の魔人ゴーレムが次第に姿を現す。

全長が5メートルをゆうに超える。

(この程度で負けるようならその程度の男…か)

「会長は楽しそうですね。」

「おっ、わかるか?？」

そう言ったきり二人の意識は目の前で繰り広げられる試合に向けられた。

~~~~~

「おいおい…あんなの出されたら琥珀に勝ち目なんか…」

不安を口にしたのは明だった。

同じように東条も不安を浮かべた表情をしていた。

「ゴーレムですか。確かに少し厄介ではありますが、大丈夫でしょう。」

あまりに楽観的な意見を述べるのは桜井要。

泉は特に何も言わずに淡々と目の前の試合に見入る。

その場にはいつもは執行部で居れなかった空が今日はいた。

「そうだね、琥珀なら大丈夫だと思うな。」

ニコニコといつもの調子を崩すことはなかった。

明と東条は少しだけ不安が取り除かれはしたが、それでも依然として落ち着かなかった。

~~~~~

「…」

琥珀は立花の召喚魔法に何も反応を示さなかった。

内心では少しばかり驚かされたりはしたものの、それを表に出すことはしなかった。

立花の表情はすでに目の前のことよりも先を見ていた。

「なんだ、ビビッて声もだせねえのか!？」

品のない罵声と嘲笑をあげる立花をただ琥珀は見ていた。

「こねえなら行くまでだッ！！叩き潰せ、ゴーレム！！」

立花の命令を皮切りに直立して動かなかったゴーレムが動きだす。  
見上げるほどの石の巨人

その手には体の半分ほどもある石のこん棒が握られている。  
振り下ろせば人間などは跡形もなく潰されるかもしれない。

「…哀れだな。」

琥珀がポツリとつぶやく。

「ああ??負け惜しみなら聞かねえぞ!!」

胸元のリングが輝きだす。

そして鋼の弾丸が次々に形成され、それを放つ。

正確に琥珀の、人体の急所を狙ってくる。

一つ一つの威力でも当たり所が悪ければ即死するかもしれない。

その鋼の弾丸を間一髪でよけ続ける琥珀

攻撃する暇もなくゴーレムの攻撃が続く

それを避けてもその先には再び放たれた鋼の弾丸が待ち受ける

「ひゃっはははー！ー！ー、さっさと殺られて楽になれよおおおお  
お。」

胸元のリングはさつきから輝きをやめることはない

絶えず輝いて、絶えず鋼の弾丸を放つ

「くっ…キリがないな。」

顔面に飛んでくる弾丸を重心をずらして左にかわす。

そこにくるゴーレムのこん棒をバックステップで辛うじて避ける。  
ゴーレムを盾に一瞬弾丸をかわす。

「しっこい、しっこい、しっこいんだよおおお……!!!!!!」

一段と輝きを増したリング

生成される弾丸の数が爆発的に増える

「あれは避けきれない……」

瞬時に危機的状況にあることを琥珀は悟る。

どう足掻いてもゴーレムを倒すことは不可能に近い

仮に倒せたとしても魔力を使い切って立花亮本人と戦うだけの力は残らない

琥珀は追い込まれていた

「そろそろ仕上げだなあ、いけッ、ゴーレム!!!!!!」

振りかぶられるこん棒

量を増す弾丸

避けることも倒すことも不可能……

(どつする、どつする……)

「いつけえええええええ!!!!!!!!!!」

立花の絶叫とともに襲い掛かる数百の鋼の弾丸と石の巨人が放つ  
攻撃が琥珀を捕らえる

頭、足、腕、心臓、内臓、すべてを捕らえる

頭上からの攻撃も迫る中、琥珀はいつものように冷静だった。

「わが道を創れ、ゲート」

琥珀の詠唱の一瞬の後、琥珀の前の空間が裂ける。

刀で切られたかの様に突然その場に現れた。

弾丸は異空間に繋がるゲートに吸い込まれ、ゴーレムでさえも飲み込まれる。

魔法の効果が切れ、元の空間が現れる。

その場所にはもう鋼の弾丸も、ゴーレムも存在しなかった。

ただ一人、冴原琥珀が立っているだけだった。

「風よ、すべてを切り刻め、ソニックムーブ！」

一瞬の油断

一瞬の判断ミスが勝敗を決める

光景を見ていた立花は一瞬だけ判断が遅れた。

それでもすかさず土壁を自らの体の前方に展開させ、琥珀の風刃を防いだ。

「風よ、雷となりてすべてを貫け、ライティング」

琥珀の抑揚のない声が闘技場に響く。

それは集音マイクがなければ拾えないほどに小さく、そして感情がこもっていないかった。

琥珀の手から紫電の雷が舞い、立花は気を失った。

立花は気を失うまで琥珀のいるところを認識することはできなかった。

立花のからだだが前に倒れる一瞬前に琥珀がその服のすそを引っ張りあげた。

「勝者、1 F、冴原琥珀ッッッ！」

審判の声とともに、闘技場は歓声に包まれる。

かつてないほどの盛り上がり、実況の生徒でさえも驚きを隠せなかった。

それでもやはり琥珀は少しの感情も見せずに、倒れた立花亮を近くの実行委員に託してさっさと控え室に戻っていった。

すでに琥珀の意識は次の相手 西野哲平に向けられていた。





子供も大人もみんな戦場に出る  
そして親も友達も、みんなみんな帰ってこなくなった。  
それでも僕は死ぬことがなかった  
死ねなかった。

「おい、またあいつ生き残ってるぞ…」

「悪魔だよ、悪魔。」

「しっ、聞こえたらどうするんだよ。」

「…」

体に傷などつかなかった。

心だけは日に日に削り取られ、そして磨り減る。

それでも僕は戦い続けた。

人を殺し続けた。

そうでないと、みんな死んでしまうから。

戦う理由なんか知らなかった。

ただ殺さなければ殺される、そう教えられた。

人の殺し方は教えてもらえても、人の愛し方は教えてもらえな  
かった。

人を殺す武器は与えられても、僕の名前は与えられなかった。

そうして僕は、何年も、何十年も戦い続けた。

この手を血に染め、守るものも大切なものも何一つない世界で僕  
は生き続けた。

~~~~~

「はあ、はあ、はあ。」

体中が汗で気持ちが悪い。

着ていた服が汗で体にまとわりつく感覚は久しぶりだった。

「マスター、大丈夫ですか??」

部屋のドアのノックとともに、一人の女性が部屋に入ってきた。

その顔は心配の色を深く刻んでいた。

それは主を思う所から来るものなのか、それとも愛なのかは男にはわからない。

「ああ、大丈夫だ。昔の夢を見たんだ。」

そう言って、ベッドの近くのタンスからタオルを取り出して体を拭く。

体のどこにも傷跡などなく、鍛え上げられた肉体が男の強さを表している。

肌の色は東洋人ではなく、中東に近い黒さの色だった。

背もすらりと高く、180cmはあるだろう。

一方の女は、女にしては背が高い。

西洋系の色の白さと、その肌の色に合ったブロンドの髪の毛と碧眼街を歩けば大半の男がその姿に見とれるほどの容姿をしていた。

ただ不釣り合いなのが、そのか細い右腕にはめられた少しごつい腕輪である。

「それに最近はずいぶんよくなったよ。あと少ししたら計画を始められそうだ。」

「…はい。くれぐれもご無理をなさらぬよう。」

~~~~~

試合が終わった琥珀は待合室に戻らずに、傷の手当のために救護室に向かった。

たいした傷ではないと言え、それでも次の試合には万全の状態で見たい。望みはなかった。

「失礼します…」

救護室の中にはまだ人はおらず、手当のための生徒が待機していた。

おそらく2年か3年の生徒で、回復系魔法の得意な生徒だろうか、女の生徒だった。

もともと回復系魔法は繊細な魔法制御が必要で、その魔法を使いこなすには男よりも女のほうが向いている。

空などは例外なのかもしれないが。

「え、あつ、はい。こっちに座ってください。」

いすに座ってぼんやりと外を眺めていたその生徒はいきなり声をかけられて驚いていた。

琥珀は少し気の毒なことをしたと思いつつも、傷の手当をお願いした。

さっきの、立花とかいう生徒のほうは保健室にでも運ばれたのだろうか、救護室には姿をみせることはなかった。

治療の間も誰も訪れることもなく、救護室には琥珀と生徒の二人だけという空間が広がっていた。

「…」

「…」

お互い何もしゃべらない。  
気まずい空気だけが部屋をしていた。

「あ」

の、と女子生徒が声をかける前に豪快なドアを開ける音と、  
5人の生徒が乱入してきた。

もちろんいつものメンバーであった。

出かけた声をどうにかごまかした女生徒は入ってきた人間に目を  
向けて、再び声をだした。

「あれ、空ちゃんとあきらちゃんと桜井君？」

”あきら”と呼ばれたときに三島明がどきっとしていたのを琥  
珀は見逃さなかった。

「あいちゃん あいちゃんが救護担当だったんだ!!」

と言ったのは空

「そつだよー。空ちゃんこそどうしたの？」

「わたし？わたしは、琥珀の様子を見に来たの。」

「えつと…」

と言ってあいちゃんと呼ばれた女生徒は琥珀を見る。

「ああ、なるほど。」

と笑顔になるあいちゃん。

(何を納得したんだ?)

と疑問に思いつつも、気がつくとは怪我の治療は終わっていた。

「ん、ありがとう。」

お礼を言っただけで救護室から選手の待合室に行こうかと席を立った。

「どういたしまして。」

「じゃあ俺は控え室に戻るよ。」

「えっ? ちょっと待ってよ。」

と駄々をこねる空たちを連れて、仕方なく琥珀は闘技場の見学席に行った。

本当なら控え室で休みたかったが、空に言われては琥珀に拒否する選択肢はなかった。

~~~~~

「ま、とりあえず1回戦の勝利おめでと。」

見学席に着くとまず明からさっきのことを祝福された。

「でもまさか予選と同じ相手が本戦で当たるとはおもわなかったよな。」

「しかも魔具まで使っただけさあ。」

「ルール上は魔具の使用は許可されてますよ？」

しかし、琥珀さんはそれにも勝ってしまいましたね。」

とさわやかに言う桜井要

「でもさでもさ、最後のアレは何??それに立花君の持ってた魔具って何なんだったのかな??」

と立て続けに聞いてくる空

「そうそう、立花の魔具はともかく琥珀は最後に何やったんだ??何か突然ゴーレムとか消えたように見えただけだよ。」

明も空の言ったことに同意した。

東条も同じような顔をしていたが、泉と桜井は特に驚くこともなく2人のことを見ていた。

たぶん気がついてるんだろう。

「んー、要頼むわ。」

と責任放棄して琥珀は疲れた体を休めることにした。

「そうですね、なら代わりにご説明しますね。

では立花さんの持っていた魔具から説明しますよ。

あれは、「クイツクチャージ」と言う魔具です。

特徴はあらかじめその魔具に魔力を込めておくと、魔力収束と詠唱の手間を省くことができるんです。

ですが2種類の魔法に限定されてしまうんです。立花君の場合は、土壁と土矢でしたね。

次に、終了間際の魔法はゲートの魔法の応用ですね。

普通の使い方はある空間同士を繋げて道を作るものですが、今回の琥珀さんの使い方は少し違います。

端的に言えば、入り口のみ作って出口を作らなかったんです。

放たれた土の矢とゴレムはそのまま入り口に吸い込まれて、違う次元に閉じ込められた、と言うところでしょうか。」

長い長い桜井要の講座が終わる。

「その通り。」

「なるほどー。」

とちんぷんかんぷんだった3人も納得のようだ。

（つて、明と東条さんとはともかく空はわからないと不味いんじゃないのか？）

と思つた琥珀だが、空のために黙っておくことにした。

今闘技場のステージの上では3組目の試合が行われていたが、特に琥珀は見るつもりもなかった。

すべては次の西野哲平との試合のためだけのもので、それ以外に興味は微塵もない。

~~~~~

「ん、そろそろ戻るよ。」

「そうだな。次もがんばってこいよな。」

空たちに声援を受けつつ、琥珀は選手がいる控え室にもどることにした。



そこには西野はいなかった。

おそらくはもうひとつある控え室だろう。

控え室は大きな広間のような作りになっていた。

中には大きな長机とイスが置かれていて、その上にはさまざまな飲み物が置かれていた。

魔力を多少回復させる飲み物も置かれていたが、それほど魔力を使っていない琥珀は飲まなかった。

どれぐらい部屋の中で部屋の中で待っていたのだろうか。

ふと気がつくと、もうすぐに自分の出番になっていた。

前の試合もそろそろ終盤に入って、もうすぐ決着が付きそうだった。

琥珀は立ち上がって、試合会場に向かった。

たった一つの希望をつかみに行くために

「はあ、はあ、はあ。」

試合が始まって10分経過した。

状態は膠着状態

いや、学年差を考えると上々の出来といえるかもしれない。  
だがそれでは満足のいく結果とは到底言いがたい。

「やるなあ、さすがや。」

関西弁で話す西野哲平の声にはまだまだ余裕が見て取れる。

このままでは長く持ちそうにはない。

西野も琥珀も近接格闘タイプで、見学者から見れば地味な戦いかもしれないが、それでも要所要所に魔法が使われている。

その有用性を理解できるものは果たしてこの会場にどれほど存在しているのか。

琥珀は無駄なことを考えつつも、次の一手を考えつつあった。

風の肉体強化を使って格闘に持っていつても、西野は生身の体で対応してくる。

距離を取って遠距離攻撃をしてもすぐさま対抗魔法を放ってくる。  
つまりは手詰まりになっていた。

「さすがですね、まだ一発も当てられません。」

「いやいや、7年ぶりの”F”クラスからの出場はダテじゃないなあ。」

会話の最中でも琥珀は片時も西野哲平から目を離さない。

170弱の男の平均身長よりも低めな身長にもかかわらず、その体格を最大限に生かした近接格闘

色素が薄い髪の毛はパツと見ると茶色に見える。

その髪の毛は少し長めで、彼の鋭い目つきを幾分か和らげている。といつても普段の彼は試合中とは別人の表情を浮かべる。

構えは空手とも拳法とも見分けがつかない。

しかし、泉と同等以上のプレッシャーを受ける。

両者の間の距離は5メートルほど空いている。

「さあ、そろそろ本気出しーや。まさかその程度ってことはないよなあ??？」

西野の声に一瞬ドキツとする琥珀。

「なんのことですか??たかだか”F”クラスの一生徒にそれほど期待されても困りますよ。」

瞬間、西野の声のトーンは下がり周りに聞こえない程度の声で琥珀に話しかける。

「情報、欲しないんか??」

琥珀の表情が凍る。

今までの会話の流れからは不自然なほどに自分の顔の表情が制御できない。

「…」

それでも琥珀は 答えない。

否、答えることはできない。

目的のためとはいえ、万が一のことを考えると決断を下しきれない。

「…そうか、交渉決裂やな。しゃーないそれじゃさっさと終わらしてもらうぞ。」

~~~~~

「おい、西野が何か出してきたぞ??手袋か??」

見学席にいる明達からは西野がポケットから出したものがよく見えない。

ただかるうじて手袋とだけ認識できた。

「いえ、たぶん魔具でしょうけどここからではよく見えませんね。」

明と共に見学席にいる桜井にもそれは同じことだった。

「うーん、手の甲の部分に何か書いてあるみたいだけど…」

空のポツリと言った一言に明達が驚く。

「えっ!?!見えるのか??」

「そこまではつきり見えるわけじゃないんだけどね。」

「なるほど、そういうことですか。」

「何一人で納得してんだよ、俺達にも教えるよ桜井。」

「簡単に言うと、火の魔法で双眼鏡を作っているんですよ。」

「え？」

桜井の説明に明と東条はきょとんとする。

泉はすぐに桜井の言いたいことが理解できたようだが、2人には難しすぎたのだ。

「つまり、空気を熱で熱してレンズ代わりの役割を果たしているんです。」

よくそんなこと思いつきましたね。」

「昔琥珀と遊んでるときに思いついたんだよ。まあ思いついたのは琥珀なんだけどね。」

「へえ、でも結局どんな魔具かまではよくわからないなあ。」

「そうなりますね。もう少し見てたらわかるかもしれません。」

それを最後に5人の間に会話はなくなった。

その間も終始泉の意識はステージの上に向けられていた。片時も見逃すことがないように

~~~~~

西野哲平はポケットの中から1組の手袋を取り出した。

両手につけるとその手の甲には1つずつ魔方陣が描かれている。

二重円の中に正方形が描かれ、その正方形の図形の中には上下逆さまに2枚の三角形が描かれている。

その二重円の一帯そこには、細かい文字が多く描かれている。

琥珀はその魔方陣をじっくりと観察し、そして結論を下す。

「右は火を、左は雷を司る魔方陣。魔方陣の形態からおそらく補助魔法程度の威力しかないはず。展開形態は…常時展開か、少し厄介だな。」

「ほお、そこまでわかるんか。さすがやなあ。だがいくら魔法の中身がわかるうと俺の攻撃は避けられへんでー。」

西野がおもむろに両手を胸の高さの前まであげる。足を開いて戦闘体勢を整える。

「いくでツ!!」

「風よ、わが身を疾風のごとく動かせ、ムーブ!!」

二人同時に詠唱を終える。

先に動いたのは西野で、ほんの一瞬遅れて足を踏み出した琥珀の腹部に痛みが走る。

「ごふっ!!」

鈍く、そして重い一撃が琥珀を捉えた。

目の前にはさつきまで5メートル以上も離れていたはずの西野哲平の左の拳が琥珀の腹に吸い込まれるようにめり込む。

「まだまだア!!」

「バチツ!!」

はじける音と共に琥珀の体に電撃が走る。

二人の周りの空間に静電気が走り、淡く光る。

(やばっ…意識が…)

「ぐっ…」

電撃で体の筋肉が言うことを聞かない。

その場に張り付いたように動かない。

と、その瞬間

二人の間に突風が巻き起こった。

「がつ、はあ、はあ、はあ。」

意識が落ちるほんの一步前で西野の攻撃から逃れる。

さっきよりもさらに二人の距離は離れる。

10メートルほどの空間をあけて対峙する。

「おお、やるなあ。風で無理やり自分の体をふっ飛ばすとは思わなかったわ。」

いかにも楽しそうに西野はニヤニヤしながら琥珀に吐き捨てる。

琥珀は右ひざを地面につけて、呼吸を整える。

判断が一瞬でも遅れたら今この瞬間彼は地面に伏していた。

そこまで琥珀は追い詰められていた。

ゆっくりとした動きで、しかし確実に立ち上がる。

観客席の人間の声はもう聞こえていない。

彼の眼にはもう西野哲平しか映っていない。

「もうええか？続きやるで。」

声と共に今度は自己加速魔法なしで西野が向かってくる。  
それでもその速さは人ならざるほどのスピードで走り寄り、今度は左の拳を叩きつける。  
さっきとの違いは、インパクトの前からすでに魔法が発動している。つまり雷撃に包まれた拳が琥珀を襲う。

「　　ッ！！」

風よ、我を守る壁となれ、ウォール！！」

苦し紛れの風壁を展開する。

(これで少しでも時間を…)

「甘いッ！！」

強烈な左フックを叩きつけるその直前に動きが完全に止まる。  
次の瞬間、目の前にいたはずの西野が琥珀の左側に現れる。

「なッ！？」

魔法障壁を展開する時間が残されていない。  
琥珀は苦し紛れに拳を避ける為に前方に転がるように飛ぶ。  
ほんの一瞬前までいた空間に西野の炎に包まれた右ストレートが貫いていた。  
前に転がりながら次の攻撃に備えて距離を取る。

「まだまだいくでえええ！！」

そして再び西野が琥珀の懐に飛び込んでくる。

(次は避けられない！！)

繰り出された右の拳は炎をまとう。



とつさに両手でガードするが、西野はその間をかくぐり琥珀の左わき腹にヒットする。

ゴツッ！！

西野の拳が琥珀の内臓を揺らす。

「ぐっはぁ……」

声と共に口から唾が飛ぶ。

魔法の付加効果で皮膚の表面がやけどの様な状態になっていることに琥珀が気付いた。

身体に力が入らずふらつくが、何とか立ち上がるがとてもではないが戦える状態じゃない。

「なーんや。もう終わりかいな。

せっかくコレ出したのになぁ。」

西野は心底残念そうな顔をしてため息をついた。

その姿はすでに試合の勝負はついていると全身で表していた。

それでもまた琥珀は立ち続ける。

（どうする…近接格闘は通用しない。

肝心の魔法攻撃も有効打が見つからない…）

「次で終わりや。」

そう言つて西野は一度呼吸をして

そして琥珀に走り寄る。

（とにかく今は何とか攻撃を防いで時間を

）

「紫電よ舞え、ブリッツッ!!」

西野の攻撃よりも早く魔法が展開する。  
下位魔法の雷

バチッ!!

と言う音が響き渡り、西野が詰めた距離を再び離れる。

「ふん。小細工しやがって。この程度なら魔法を使うまでもないな。」

言い切るが早いか、動くのが早いか

西野が両手に魔力を送り、雷と炎を展開させ琥珀に襲い掛かった。

西野が琥珀に向かって走る。

ただ真っ直ぐに、最短距離で二人の距離は縮まっていく

それは自信からくるもの      たとえ攻撃されてもそれを避けるこ

とができるという絶対の自信

その眼は目の前の敵を打ち倒すためだけに、そしてその眼には鋭い光を放つ。

(回避も防御も間に合わない      ツ!!)

それでもとっさに防御の体制に入る。

きつと泉との練習がなかったら手も足も出せずに今この瞬間に西野の攻撃を受けてぶっ倒れていただろう。

その防御でさえもかいくぐって西野の右フックは容赦なく琥珀のわき腹に突き刺さる。

炎の影響で服が焼ける。

布の焼け落ちる臭いが鼻に届く。

うめき声を上げる暇もなく二撃目がくる。

ゴツッ!!

と言つ音と、

バチッ!!

と言つ音が響き渡る。

琥珀の身体の筋肉が一瞬だけ収集して、ビクッと震える。

ゆっくりと西野の拳が琥珀の身体から離れる。

スローモーションの様に崩れ落ちる、会場の中が一瞬にして静まり返る。

地面に倒れた琥珀は動かない。

それを見下ろすように西野はただ見つめるだけ。

「……」

一瞥してその場を去ろうとしたそのとき、一瞬だけ琥珀の指が動いた。

そしてそれは次第に大きくなり、立ち上がるうともがく。

確かに常人ならば気絶するほどの電撃を浴びせたはずなのに、目の前の人間は再び立ち上がるうとしていて、そのことに少しばかり驚く。

「やめとけ、これ以上は怪我じゃすまへんで。」

「ッ、ま…だおわっ、てな…い」

右ひざをつき、両手両足を使って立ち上がるうとする。

その様子を西野はただ見ているだけだった。

フラフラと立ち上がって、汗と血で汚れた腕で顔の汗をぬぐう。

一方の西野は多少の汗はかいているものの、一発も攻撃を受けてはいない。

「はア、はア、はア…」

「そうか、んならトコトンやったる。」

今までとは比べ物にならない魔力が収束していく。

そして西野は両手にはめていた魔方陣入りの手袋を脱いだ。

その行為に会場からは驚きの声が上がった。

はつきりしない意識を無理やり覚醒させよつとする琥珀には西野が何を考えているかまではわからない。それでも何かがかかることは本能的に感じた。

「灼熱の炎、天空の雷、疾風の風、」

西野が叫ぶ

「風よ、わが身を疾風のごとく動かせ」

琥珀も叫ぶ

「全てに等しく断罪を、トリニティ!!」

西野の詠唱が終わり

「紫電よ舞え、ムーブ、ブリッツ!!」

同時に琥珀の詠唱も終わる。

西野の両手には先ほどよりも高密度の炎と雷をまとった拳と、全身を包む風が吹いている。

琥珀も風が全身を包む。

そして一瞬の隙もなく両者が駆け寄る。

会場に大きな衝撃音が響き、そしてまばゆい光が会場を包み込んだ。それは、5秒にも満たない短い時間であった。

それでも試合を決定付けるには十分だった。

~~~~~

東条美代はまぶしさですぐに目を開けることができなかつた。
おそらく西野の放つ炎と雷のはじける光であるつと頭では理解でき
ていた。

恐ろしいまでの密度と威力だった。

しかし疑問がひとつ残る。

やっと目を開けた東条の目に結果が現れていた。

「
…」

一瞬の静寂に包まれる。

そしてそれは次第に歓声と賞賛に包まれる。

「琥珀、負けちまつたな。」

はじめに口を開いたのは明だった。

東条が見た光景は、ちょうど琥珀が倒れる瞬間だった。

それでも彼の拳は西野に届いていた。

それは触れただけかもしれないが、それでも一撃には違いなかつた。
琥珀の右拳は西野の胸部に触れていた。

「でもがんばつたと思います。」

ここにきてやっと泉が口を開いた。

「正直もつと早く負けると思っていましたし、それに最後の攻撃が
届くとも思っていないませんでした。」

西野先輩のような近接格闘の達人に一撃入ただけでもすばらしい
です。」

泉は琥珀のことを褒めていた。

短期間であれほどの体術を身に着けた琥珀を

「ですが、最後の魔法は……」

と泉は言葉を切る。

そしてその言葉を聞いて東条は疑問を口にした。

「あの　最後の雷は……」

とそこまで聞いて、泉の代わりに桜井が東条の疑問に答えた。
その間も空は琥珀のことを見つめていた。

「不発ではありませんよ。」

「えっ！？じゃあ、どうなったの??」

「東条さんは身体がどうやって動いているかご存知ですか？」

唐突に魔法と関係ない話題を話し出した桜井に戸惑う東条

「えっと、脳からの信号で筋肉を動かして……」

「その通りです。ではその信号の正体は何ですか？」

再び疑問に東条は少しずつ靄もやが晴れていく。

「それは生体電気じゃ……あっ!!」

「もうお分かりですよね??琥珀さんは自らの肉体に雷を放つこと
で通常ではありえない運動能力を手に入れたんです。」

「それってすごいじゃん!!」

興奮したように言う東条に対して、桜井の顔に喜びはなかった。

「確かに運動能力は上昇します。

しかし、普段よりも激しい運動をするということはその分自らの身体にダメージがリバウンドするんです。

そしてもっとも危険なのは、自ら流した電撃によって心臓がとまるかもしれない危険があったのです。」

その言葉に東条の喜びの表情が消える。

自らの感情を嫌うかのように苦々しい表情をする。

そしてその目はステージの琥珀に向けられた。

~~~~~

琥珀が目を覚ますと、そこはさっきの救護室だった。

そしてそのベットの近くには空が座っていた。

心配そうな瞳を向けて。

「あつ、起きた??」

目を覚ましてすぐに声をかけてきた。

まだぼんやりする頭を持ち上げようと身体を起こす。

「ああ、もうだいじょう、いっ…」

全身に痛みが走る。

筋肉痛のような感じではあるが、痛みは比ではない。



それを見た空は慌てて駆け寄り、そして再び琥珀をベッドに寝かせた。

「だめだよ。相当無理したんだからもうちよっと寝てなさい。」

母親のような口調で琥珀をなだめ、そして近くに置いてあった水を琥珀に飲ませた。

恥ずかしくはあったが、琥珀の身体はまったく言うことを聞かなかった。

「負けちゃったな。」

苦笑いを浮かべた琥珀を空は複雑な思いで見つめる。

聞きたいことは山のようにあったが、それでも琥珀に聞くことはなかった。

二人の間に自然に沈黙の空気が流れる。

それを二人とも気にすることもなくただ黙ってすごしていた。

沈黙を破ったのは、琥珀でも空でもなかった。

ガラガラ

と言う音と共に西野哲平が救護室に入ってきた。

そのふざけた表情と一緒に。

「よお、もう大丈夫なんか??」

その言葉には明らかに心配をする気持ちなど含まれていなかった。しかし空は西野の言ったことを額面どおりに受け取った。

「どうしたんですか??」

肉体的にも精神的にもこれ以上西野とダラダラするつもりはなかった。

「ん??せつかちなやつちやお。まあまあとりあえず座らせてもらうで。」

と言ってベットの近くにあったパイプ椅子を手にとって琥珀の近くに座った。

しかし、座ってから何かを言い出すことはなくただ沈黙が訪れる。

その様子を見かねた空はすこしの間外で時間を潰すと言って出て行ってしまった。

「それで??話があるんですよね??」

琥珀が西野の言わんとすることを聞く。

「ああ、俺がお前に言いたいのは...3年前の事件のことや。」

その単語を聞いただけで琥珀は飛び起きようとした。

が、彼の全身の筋肉に付いた傷はそれを許さなかった。

「それは確が勝ったときのじょうけんですよね??」

「いや、はじめからそれは建前や。それに組織のバンク覗いたらこの程度の情報は得られるさ。」

さて、それじゃあ本題といこうか。」

その言葉を聞いて琥珀は唾を飲み込んだ。

そして救護室の中で過去が語られ始めた。

それは始まりでもあり、そして同時に終わりを意味している。

一条空は西野哲平が救護室に来た事で時間を持って余していた。

「んー、何だったんだろ。何かすごい雰囲気だったなー。」

独り言をつぶやきながら学園の中庭にあるベンチを目指していた。泉たちは闘技大会の続きを見に行っている。ベンチの途中で自販機を見つけて紅茶を飲むことにした。

「ありゃ、100円足りないや。」

仕方なく500円玉を投入して買うことにした。

500円と引き換えに紅茶1缶とじゃらじゃらとおつりが出てくる。その缶を持って近くのベンチに座った。

まだ春の雰囲気が残る空を見ながら、物思いにふける。

さっきの琥珀の様子と、試合中の琥珀の様子が頭から離れなかった。

(あんなに必死な琥珀見たのいつぶりだろ。)

少しの間考えて、唐突に考えを止めた。

身体を吹き抜ける風に冷たさが宿っていた。

冷えた紅茶と詰めたい風は用意に体温を奪った。

そして時間を確認して琥珀のいる救護室に戻ることにした。飲み終えた缶をゴミ箱に入れ、立ち上がる。

救護室まではすぐだった。

扉に手をかけて開ける瞬間中から人の話す声が聞こえた。

『そっいえば、何でお前本気ださんかつたんや???』

顔を見なくても誰が話しているのかがすぐにわかった。

関西なまりの話し方と、そのお調子者の声

気づくと空はドアを開けるのも忘れて二人の話に聞き入っていた。  
頭ではそんなことはしてはいけないと思いつつも…

『…悪い、自分のチカラにはわかってないことが多くて無闇には使えない。』

この声も聞き間違えるはずがなかった。

ずっと、ずっと空の近くにいた人の声だった。

両親が死んでしまっても、琥珀だけはそばにいてくれた。

自分も両親をなくして寂しくてつらいはずなのにそんなこと微塵も見せなかった。

『そうか。ならしゃーないわ。んじゃ俺は帰るわ。』

そう言い残して西野はドアを開けた。

そこに空は居らず、西野は何事もなかったかのようにいつもの日常に戻っていった。

~~~~~

ドアの閉まる音が部屋に響く。

部屋の中には人間が2人だけになった。

一人はベットで寝たままである。

「話してもらえますか？」

冴原琥珀は極めて平静を装って尋ねる。

「ああ、お前は何が知りたいんや？」

「質問を質問で返さないでくださいよ。」

いきなり肩透かしを食らった琥珀の機嫌が少し悪くなる。

「まあそう怒るなや。」

俺の情報も少ないんや。」

ひとつため息をして西野は続ける。

「はつきり言ってるまうと、わかってない事の方が多いかもしれへん。やつらの組織は” ? ? ? ”って名のつとる。

まあ”再生の光”って意味のギリシア語や。その目的はその名前の通りやるうけどな。」

「それが3年前の事故とどんな関係が…」

「あれは事故やない。事件やったんや、それぐらいはわかつたやろ?。」

「…」

琥珀は答えない。

「未確認情報なんやけどな、事件当日にあのホテルの周囲に巨大な魔方阵が発生したっていう目撃情報があったんや。」

「!？」

「それともうひとつ、事件は全世界的に起こったかもしれない。表ざたにはされてへんけどな、日本以外にも米・仏・独・英・露・中とか世界で似たような事件が起きてたんや。」

「それはどういう」

琥珀が何かを聞く前に西野はさらに話を進める。

「それも事件にかかわった者は全員死んどるんや。」

そこまで聞いて琥珀は黙り込む。

想像以上の規模に

そしてその中で生き残った自分達に
すべてが琥珀を悩ませた。

「そんでコレは俺の考えでしかないんやけどな」

と西野はさらに続ける。

「もしかしたら世界各地で同時展開の魔法を使うつもりやったんか
もしれへん。」

「なッ!？そんなこと魔法には不可能だ。」

そう魔法ならば不可能だ。

自らの魔力を糧に使う魔法の規模などたかだか知れている。

「確かにな。まああくまでも俺の憶測の域を出てへん。」

それだけ言っただけで西野は厳しかった表情を崩して、いつものお気楽な顔に戻った。

「そういえば、何でお前本気だったんや??」

琥珀は急な質問の変化に一瞬答えに詰まる。

おそらくこの人は知っていたはずで、その上での質問だろうと考える。

ならば下手にうそをついてごまかすよりはと

「…悪い、自分のチカラにはわかってないことが多くて無闇には使えない。」

「そうか。ならしゃーないわ。んじゃ俺は帰るわ。」

本当はわかっていた。

この能力がどんなものか

そしてその能力を使うには代償が必要なことも

~~~~~

結局闘技大会は西野の優勝で幕を閉じた。

なんでも3連覇だったとか

閉会式でトロフィーなどが渡されていた。

終わるころまでには琥珀も歩けるだけの回復をして、参加することになったのだが…

「なんで俺が表彰されてるんだ??」



閉会式の祝賀会のステージ上に琥珀は立っていた。

そこには執行部として参加していた空が離れたところに見えている。まわりは闘技大会での優勝、準優勝、3位の人が立っていた。琥珀の隣にはこれまた西野が立っていた。

「なんや、自分そんなにいやがらんでもええやないか。せつかくしてくれるって言ってんねんで？」

能天気な返事に思わず琥珀は見えないようにため息をついた。

名目としては何年ぶりの”F”クラスからの本戦出場とのことと、本戦での勝利などだそうだ。

まあいわゆるがんばったで賞と言った所だと突然西野に言われてステージに連れて来られたというわけだ。

「…」

それ以上琥珀は何もしゃべらずになされるがまま

自分のクラスに目をやると明と東条が爆笑していた。

(…)

今日一日で一番疲れた瞬間でもあった。

「あははは！！」

帰り道、明と東条は未だに笑いこけている。

いい加減笑い飽きないのか、と内心想いながらいつものように歩いていた。

そして長い一日が幕を閉じる。

~~~~~

戦いを終わる条件はいつもひとつだった。
敵を全て殲滅すること

それを可能にしたのは魔術だった。

圧倒的な力で相手を蹂躪して、そして殺す

銃よりも早く、そしてナイフより確実に

残るのは焼け野原と

モノと化した屍だった

時に焼け爛れた皮膚が飛び散る土地に

時に切り裂かれた肉片が飛び散る土地に

時に潰された血しぶきが描く土地に

男は思う

この連鎖を止める方法を

二度と争いが起こることのない土地が広がることを

そして男達は動き出す

自らの目的を果たすために

EPISODE 2 - 14 (後書き)

どうもこんにちは
もしくは始めまして

先に謝ります

更新が遅くて申し訳ないです

とりあえずコレでEPISODE 2は終わりになりました。
呼んでくれた人ありがとうございます。

誤字脱字があれば教えてくれるとありがたいです。

あと感想とかも歓迎です。自分では中々わからないので…

続きものんびりと書いていくので続けて読んでくれるとうれしいです。

それではまた会いましょう。

闘技大会の日から数日がたった。

世間はすっかり春から抜け出したような陽気に包まれている。

桜は散って青葉が代わりに色づき、風には暖かさが宿る。

明日からは5月の大型連休つまりはゴールデンウィークなのだが、それは世間のお話

我が魔法学園は3泊4日の研修旅行と云うことになっている。

と云うことで今はその説明の真つ最中と云うわけであつたりなんかして…

「ぐあー、ぐあー、んむう…」

隣で大いびきをあげて寝ているのはクラスメイトの三島明だったりする。

東条は明の前で同じクラスの女子と話している。

先生も先生ですでに明を見捨てていた。

「…」

琥珀は何も言わない。

そして何もしない。

いや、したとしてもたぶん明は起きることはないだろう。

前での説明もそろそろ大詰めなのだろう、説明にも熱がこもってきている。

まあ要するに研修旅行の内容はこうだった。

明日の午後9時から研修旅行は始まる。

行き先は未だ未定

と言うかその場で決まるらしい
もちろん前時代的なバスなどは使わない。魔法学校らしくテレポ
トを使うそうだ。

学年全員が同じ所に行くのではなく、4人グループでの行動となる。
その間の生活は4人で協力して行うことになり、今年は都合よく男
女ともに2人ずつと決まった。

魔法の使用は最低限に留めること

以上が三島明の寝ている間に行われた説明であった。

そここうしているうちに説明が終了し、教室に戻ろうと立ち上がった生徒達を壇上の教師が呼び止めた。

さすがに明を起こさそうかと琥珀が横を振り向くと、

「あれ、いつの間に起きてたんだ？」

明がさっきまで閉じていた目をこすっていた。

「あ？ああ…そろそろ終わりかと思ってなあ」

「なるほど、まあいいか。そう言えば今から何かあるみたいだけど。」

とそこで二人の視線が壇上に向けられる。

そこでは今から校長が何やら話し出すようだ。

「あー、手間をかけさせてすまないね。なるべく早く終わらせるか
らもうちつと我慢してくれるかのお。」

いかにも、という感じの校長が話を始める。

年齢のせいで縮んでしまった背を伸ばして、白髪の老人が話し始め

る。

「例年入学式で手渡すはずなのじゃが、今年は届くのが遅れてしまつてのお。」

と言つて懐から小さな、ビー玉ほどの透明な玉が取り出された。

それは本当に透き通つた丸い玉であつた。

「これは、魔法玉と言つてなまあ要するに補助機能があるんじゃないよ。持ち主の魔力に呼応して姿を変化させるじゃ。たとえばわしの持っている魔法玉は……」

と言つておもむろに手元の杖を頭上に掲げた。

それは木でできていた。

コレほどまでに魔法使いに似合う杖はないだろうというのが琥珀の感想だつた。

「まあわかりやすい例だな。そして先についている玉の色は淡い紫色でこれはその者の特徴を表しとるんじゃない。」

さて、これから一人ずつ渡すからもらったものから教室に帰るようにな。」

と校長が言つと生徒達が声を上げ驚いていた。

おもちゃを買い与えられる子供のようだつた。

琥珀たちもそれぞれ魔法玉を受け取ると込み合っている体育館からすぐに教室に戻つた。

その間も手の中にある魔法玉に変化はなかつた。

おそらく何かの呪文が必要なのだろうと明と教室に帰りながら話合つていた。

教室の中にははしゃいでいる生徒が多く、騒然としていたが教師が

来るといつものように静かになった。

「まあうれしいのはわかるが、とりあえず落ち着いて聞いてくれ。もらった魔法玉をみればわかるように、今は何の変化も現れていないはずだ。」

そこで今からこの魔法玉を発現させることをするわけだな。つてことで冴原ちと前に来てくれ。」

自分の席でのんびりと聞いていた琥珀はきよとんとした顔のまま前に出て行った。

まあ普通に考えて例みたいなものだろうと勝手に解釈していた。おそらく名前を呼ばれた理由は闘技大会だろけども…と内心ため息をつきながら再び話し出した話を聞く。

「簡単に言えば魔力こめればいいわけだがな。そういうことだ、とりあえずありったけの魔力込めてみる。」

明らかに適当な教え方にもう慣れてしまったクラスメイト達は何も言わない。

そしてそのことを教師はありがたく思っているのだろう。そこで琥珀は思考を止めることにした。

まずは目の前の課題をこなすことに集中する。

ありったけの魔力と言っても、空たちに比べれば微々たる物しかないわけだが…

と手のひらに乗せていた魔法玉から光が放たれる。

一瞬強く光り、そしてやがて収まった。

「と言うわけだ。各自始めてくれ。」

担任が言い終わる前にはクラス中の生徒が取り掛かっていた。

明の魔法玉は土属性を表す緑の玉に
東條の魔法玉は淡いブルーの玉になった。

「ふむ、それにしても君はたいしたものだ。Fクラスでいきなり発現をするのは珍しいよ。」

と言って琥珀の手の中にあるものを覗きみる。

そこには全長が140cm、柄が40cm、刃渡り100cmの漆黒の刀が握られていた。

そう、刀身もすべてが漆黒だった。

「え？でも他の人も魔法玉の色は変化してますよ？」

確かにクラス中の人間の持つ魔法玉の色は透明なものから変わっていた。

ただ違う点は琥珀のように何らかの形を表してはいなかった。

「魔法玉の発言とは君のように形状も変化するものだ。

そしてそれに必要なことは魔力の大きさではなく制御する力だ。

中途半端な力では魔法玉から力を引き出すことはできない。

まあSクラスは別格だけどね、あのクラスの大半は一回で発現するんだよ。」

琥珀に話しているのかそれともクラスの生徒に話しているのかは判断がつかなかった。

それでも伝えようとしていることは全員に伝わったようだ。

さつきよりも真剣に、集中して魔法玉に魔力を送る生徒たちによってその日の授業は潰れてしまった。

それを教師達はわかっていたことのように気にもせず授業を行っていたことに琥珀は毎年のことなのだろうと勝手に解釈しておくこと

にした。

~~~~~

放課後

今日は明もクラブ活動は休みで、みんなでカフェに来ていた。

「そういえば私、明君がクラブに行ってる所見た事ない気がするんだけど…」

「あつ、それ私も思った。」

と空の言ったことに同意をしたのは同じクラスの東条美代

「あー、活動自体が休日中心なんだよ。」

その代り行く時は土日2日ともってことが多いけどな。」

琥珀は頼んだコーヒを飲みながら友人たちの会話を聞いていた。そして会話の流れは自然と今日の魔法玉の話となった。

「・・・」

その会話に乗らない空

大体の理由は琥珀はすぐにわかった。

「空、発現しなかったんだろ？」

「えっ！？いや、そんなことは・・・」

かまをかけてみると意外とすぐに引っ掛かった。

「まあ空は魔力制御は苦手みたいだしなあ。」

「琥珀のいじわる。」

と言ったときり空はプイッと琥珀から目をそらして手元のケーキを食べ始めた。

「大丈夫だ空、明も発現できてないから。」

「あい、それはフォローになってないどころか俺に対しての嫌味なのか？それを言うなら東条もじゃねえか。」

と、どんどん火花が飛び火していく。

そして残念なことに東条が被害にあう。

「ちよっ！!!」

「まあそついうことだ、空も気にするな。」

と改めて琥珀がフォローを入れると、

「…琥珀は？」

「えっ？」

「琥珀は発現したの？」

「…」

しばらくの無言ののち、再び空が顔をそむけた。  
そしてその日は永遠と琥珀は空への謝罪に追いやられることになり、  
最終的に今度デザートバイキングに連れて行くと言つ密約によって  
事なきを終えた。

「・・・1つ聞いてもいいか？」

冷静になった明が3人に話しかけた。

その言葉が異様にリアリティがなく、夢であつて欲しいとの願望がありありと表れていた。

「なんだ？」

先を促したのは琥珀だった。

もちろんこれから何を聞かれるのかの予想は大体付いていた。

それでも聞き返すのは礼儀であるうと思つての琥珀の心意気だったのだろう。

「ここはどこだ？」

その言葉を明が発した瞬間、4人の間に乾いた風が吹いた。

その風には一切の水分が含まれていないようなカラカラな風で、か  
つ一番の問題はその風に粉塵が紛れていることだ。

見渡す限り何もない　　ということはなかったが、むしろそれよ  
りもタチが悪いかもしれない。

「……………」

明以外の3人は口を開かない。

つい5分前までは近代的な建物の中にいたはずで、衣食住の心配な  
どしたことがなかった人間たちにこの状況は厳しいのかもしれない。  
建物は何世代前の素材でできているのか琥珀たちには全く見当もつ

かなかった。

「とりあえず…」

と琥珀がおもむろにポケットから携帯端末をとり出す。

最新式と言っわけではないが、これでも衛星回線との通信は可能である。

理論上は地球上のどこにいても自分の居場所がわかる、例外としては地下など電波が届かないところは別であるが。

何度か手元の端末のボタンをいじる。そしてそこに映し出されたのは…

「・・・」

「お、おい、ここはどこなんだ琥珀。」

一瞬端末に表示された場所にわれを忘れてしまった琥珀が明の声で目を覚ました。

そして告げるそれはこの状況では絶望的な発現であろうことを知りつつも…

~~~~~

時間をさかのぼること1時間前

今日は3泊4日の研修旅行の始まりの日である。

朝の9時にまず学園の体育館に集合となった。

10分前に到着した時にはすでに中は熱気に包まれていた。

「うわー、すごいね。」

琥珀の隣で素直に感想を漏らした空の顔をちらっと見てから、壇上に魔法によつて作り出された立体ホログラムに目を向ける。どうやら組み合わせ発表がすでに行われているようだ。

それを見た空が荷物をその場に放り出して、駆け寄っていった。

「よお、琥珀。」

やれやれと朝から溜息を零した琥珀に声をかけたのは明だった。少し前から来ていたらしい明は荷物をもって近寄ってきた。

「おはよ。もう見たのか？」

「ああ、琥珀は…まだみたいだな。」

「空が先に走っていつちゃったからな。で、俺は誰となんだ？」

とりあえず明に聞く琥珀に、

「お前は見に行く気がないのか。」

と返されてしまった。

「行きたくないわけじゃないけど、コレ放っておくわけにいかないから。」

と言つて琥珀は近くにある空の荷物を指差した。

それを見た明は苦笑しつつも、教えてくれた。

「俺と琥珀と東条と空ちゃんだ。なんとなく意図を感じなくもないが……」

教えてもらったメンバーに若干戸惑いつつも、空と同じというところに安堵をおぼえたのは琥珀は自分の心の中に留めておいた。

「まあ・・・気心が知れてる仲間でよかったと言っべきじゃないのか？」

と琥珀は適当に流しておくことにした。

そのあとすぐに空が戻ってきた。

相変わらず楽しそうにはじける笑顔を振りまきながら、周りの男子の視線など気にすることもなく。

そして琥珀は再び心の中で溜息をつくことになった。

「それじゃあ今からレポートするから、グループごとに指定された場所に行くように。」

と学年主任の教師が全員に向かってマイクで話した。

琥珀たちが指定されている場所はグラウンドの一角でそこまで4人でのんびりと歩いて行った。

空と東条は共に女の子ということもあったので自然と琥珀は明と話すことになった。

「まだ俺たちは良い方だよな。」

と言われて改めて周りを見渡すと、

「なんでお前となんだよ。」

などと喧嘩を始める班さえあった。

それを見た琥珀は、確かに、と心の中で明に同意した。

指定の場所には1人の教師が待機していた。
わざわざ場所を話す理由は、互いの魔法が干渉しないようにとのことだろう。

「じゃあ転移魔法つかうから、4人で固まってくれるか？」

と指示されたように4人が近寄る。

「じゃあ始めるぞ。」

地よ、かの地と繋ぎて道となせ、テレポート」

一瞬の地面の隆起の後に、4人は浮遊感に包まれる。
どこまでも落ちていくようなそんな感覚に

~~~~~

「「「「「「「「」」」」」」」」

琥珀の予想通り、3人は黙ってしまった。

恐らくはテレポートを担当した教師の属性転移魔法によるせいなのだろうが。

ゲートとテレポートの違いは、主に移動距離で分類される。

明確な距離の差はあまり重視はされないが、ゲートは長距離移動には向かない。

そしてテレポートの中でもさらに難易度が高いものを属性転移と言ったりもする。

4つの属性の特徴をうまく使って転移させる魔法で、たとえば今のように入属性の転移を行えば必然的に土属性と結びつきが強い土地、つまり今琥珀たちが置かれているような場所に出るわけである。

ただ欠点としては、細かい場所指定が難しくこういう風にわけのわ



からないところに転移してしまう可能性はおおいにあるわけで……

「……だ、ダリア王国……」

その言葉を言いながら3人は崩れ落ちた。

ダリア王国は、ユーラシア大陸の中東地方に位置する、あたりを4つの国に囲まれた小国である。

国内情勢は最悪の一言に尽きる。

周りの国からの侵略、宗教対立による内紛そして政治不信によるクーデターが重なり、いまや国連ですら手がつけられない状況になってしまっている。

「ま、まあとりあえず近くの町に行ってみよう。」

と、はたから見ても明らかに動揺している声で励ます琥珀

そしてそうするしかない状況にうなだれる3人を連れて近くの町まで歩くこととなった。

「これは、町なのか？」

土で作られた家が立ち並ぶ町

そしてその家はほとんどが壊れている。

それでも人が生活しており、おそらく強奪などが絶えないのだろうと琥珀は直感的に理解する。

ほかの3人はこんな地獄のような場所には来たことがないだろうか  
らわからないだろう。

「とりあえず寝るところの確保だけ……」

と言いかけて琥珀は、現実を見る。

泊まれるようなホテルなどは存在するのだろうか。

そもそもお金など持ち合わせていない。

レポート後に換金する予定がごとごとく崩れ去ったからだ。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

誰も口をひらかない。

それでも野宿はまずいと琥珀は3人を鼓舞して宿探しが始まった。

~~~~~

「・・・宿どうしよう。」

夕方になり4人で町はずれに出た。

宿は結局見つかることはなかった。

初日からとんだスタートである。

「しかたない、魔法でやっちまうか。」

と明が言って立ち上がった。

確かに魔法で家造ってしまうという最終手段しかないと思われた。そして4人ともそれは薄々感じていたものの、此処へきてやっとなんか心がついた。

明の作り出した家は町にあるものより新しくはあったが、それでも4人で寝るにはギリギリの大きさしかなかった。

素材は土で、町から100メートルほどの所に建てた。

「次は食べ物だが・・・」

と琥珀は最大の問題点を挙げることにした。

近くに川も海もない。魚は期待できないことと、お金がなく食材を
買うこともできそうになかった。

「あーお菓子ならあるけど。」

と空が救いの手を伸ばす。

「背に腹は代えられないな。とりあえず今日は我慢してまた明日か
らどうするか決めよう。」

琥珀の案に全員うなずきその日の散策は終わった。

ご飯代わりのお菓子を食べ、それぞれ自分の寝る場所へと向かった。
一応男子と女子は部屋が分かれてはいるが、これはどうなんだろう
との思いを琥珀は抱いた。

布団などなく、そのまま床へごろ寝となって明と部屋で寝転んだ。
サバイバル部で慣れているのか明は少し話しているうちにすぐに寝
てしまった。

そして次第に琥珀の意識も混濁していく。

ゆっくりと闇に包まれていく感覚を味わいながら琥珀は眠った。

E P I S O D E 3 - 3 T r a g e d y

琥珀の目を覚ましたのは朝陽でも友人の声でもなかった。
何かを壊す音

人々の逃げまどう足音、悲鳴、怒声・・・

そして人を殺す武器の奏でる音

それは重い崩れ落ちる音もあれば、軽い破裂音もある。

「ん・・・」

かすかな音に意識を取り戻した琥珀はすぐに状況を把握する。
それは日常ではない非日常

冴原琥珀としてではなく、コードゼロとして感じる空気
起きて数秒後には琥珀は明を叩き起していた。

「なんだよ・・・。」

ぐっすり眠っていた明には状況は掴めない。

それでも琥珀は空たちを守るべく走り出した。

明はその後を寝ぼけたままの頭で追いかける。

耳に届くかすかな音を聞きながら。

「空、東条さん起きて!!」

二人のいる場所に向かいながら声を出す。

あまり余裕は感じられない。

「明、二人を守ってくれ!!」

それだけを言い残して琥珀は外へと走り出た。

明はそれでも状況が理解できず、とりあえず空と東条を起こすことにした。

部屋で無防備に眠っている二人にドギマギしつつも、琥珀の様子が尋常ではないことを感じてすぐに思いを断ち切る。

「二人とも起きて！！なんか大変なことになってるみたいんだ！！」

明の大声にやっとのことで2人が目を覚ます。

空はぼんやりと起き上ったが、東条は目を覚ますや否やすぐにただ事ではないことに気づいた。

それは明の様子からだったのか、それとも別のことだったのかは明には判断がつかなかった。

「とりあえず今琥珀が外の様子を見に行つて

るから部屋で待つてて

と言つ前に東条が扉まで駆け寄つた。

それをあわてて止める明の横をさらにやっとなら起きた空が走り去つた。

「ちよ、空ちゃん！？」

バタンッ

ドアが開け放たれた。

空に続いて明と東条も外へ出た。

一瞬、いや、どのぐらいだろうか

3人の口から言葉を発せられることはなかった。

3人の視線の先には、黒い日本刀を握りしめた琥珀が立っていた。

~~~~~

「……う、そ……」

やっとの思いで口から出した言葉だった。

目の前の光景は受け入れることができなかった。

いや、受け入れられなかった。

力なく笑った琥珀の顔には、黒いシミが付いていた。

それをただの汚れだと信じたい。

「ごめんな。」

そう言ったとき琥珀は町のあつた方に向かって走り去っていた。

明君も美代ちゃんも私と同じように思考が止まってしまっている。

きっと、こんな光景は誰も受け入れられないよ。

頬を温かいものが通り過ぎる。

私は力なく地面に崩れ落ちる。

「そん、な……」

そこで私の意識はなくなった。

暗い暗い闇へと引きずり込まれた。

~~~~~

崩れ落ちた空を明が抱き上げる。

そして東条に向かって、

「空ちゃん頼めるか？俺は琥珀を追いかける！！」

「わかった！家の周りに結界張っておくから！」

東条の結界という単語を聞いて疑問に思いつつも、目下の課題は琥珀を追いかけることだった。

去り際にいった”ごめんな”という言葉が明の心に刺さる。

それはとても淋しそうな瞳で懺悔するような顔で、俺でもなく東条でもなく空ちゃんを見ていた。

倒れた空を東条に預けて明は走り出した。

琥珀が走って行った方向、町のあった所に向けて。

あえて近くにドス黒い海を作り出している場所に目をそむけつつ

・

~~~~~

明から空を預かった東条美代はすぐに家の中に空を連れて行き、寝かせることにした。

さつきまで眠っていた所に連れて行き、毛布をかけた。

そして再び家の外へ出る。

家の周りを取り囲むように陣を描く。

それは魔法陣ではない。

大まかな形は同じであるが、その理論体系は全く異なる。

円の周りに漢字ともアルファベットとも取れない文字を描く。

そして魔力ではない力を込めた紙を撒いた。

一つ一つには何か書かれている。

家の周りに撒き終わった東条は次の段階に移る。

「臨 兵 闘 者 皆 陳 列 在 前」

呪文とともに手で印を結ぶ。

「急急如律令」

言い終わると、家の周りが薄い膜のようなもので覆われる。  
それを見届けて、

「ちゃんと守っててね。」

そう呟きながらポケットから式神を3、4枚放った。  
紙が地面に着く前に紙から人の形を模した物体に代わる。  
それを見届けて東条も琥珀と明が走りつた町に向けて歩を進めた。  
その眼には地面を転がる物体を映すことはなかった。

~~~~~

明に空たちを任せて家の外に飛び出した。
今日宿探しをした町で火が上がっていた。
それと共にかすかな悲鳴が聞こえる。

「・・・」

近づいてくる足音が3つ
おそらく街を襲っている奴らの仲間だろう。
3つとも焦りがない

「（来い、クロツチ）」

琥珀の手に魔法玉から発現した黒い日本刀が握られる。
漆黒の刀、両手を広げた幅より少し短い長さ
闇にまぎれてその刀身すら見ることができない

琥珀が3人の男を見る。
いずれの人間もその手には武器となるものが握られている。
それを確認した瞬間

「風よ、わが身を疾風のごとく動かせ、ムーブ」

囁くように、呟くように、独り言のように
誰にも聞かれないために
そっと自分の世界に行くように
己の気持ちを切り替える。

トンッ

と言う音を残して琥珀はその場から消える。
下段に構えた刀をためらうことなく振りぬく。
肉を断つ感触の後に、骨の硬い抵抗を受ける。
それでも琥珀の腕力と魔法での加速を最大限に生かして肉体を切
断する。

2人の仲間が振り返った時には仲間の一人の上半身と下半身が分
割される。

その一瞬後に

「ぐ、ぎゃあああああ」

叫び声をあげた男はすぐに動かなくなる。
あたりに黒い海をう作り出す。

『おい！！どこだッ！！』

理解できない言葉で騒ぐ

仲間のうちの一人が闇雲に持っていた斧を振り回す。
迂闊に近づけない。

「（ならもう一人を狙うまで）」

その男から少し離れたところにあたりをキョロキョロと見渡す男がいる。

手には鉞が握られているが、小刻みに震えている。

おそらく初めて狩る側から狩られる側になったのだろう。

風と自分の肉体を限界まで動かし男に迫る。

今度は中段に構えた刀が男を貫く。

何の抵抗もなく。

「うわああああ」

ぐちゅ

何かをつぶすような音がした後に男が騒ぐ

そしてわずかに引き抜く際に内臓に傷をつけるように刀を抜いた。

離れ際に男を蹴飛ばして琥珀は再び闇夜に紛れる。

『どこだ！？どこだ！？』

男は騒ぎ続ける。

それを冷めた目で見る琥珀は誰にも聞こえない声で呪文を紡ぐ。

言葉の一言一言には感情が込められる。

殺意、憎悪、嫌悪、憎しみ

そのどれもが当てはまり、そのどれもが外れる

「風よ、すべてを切り刻め、ソニックムーブ」

上段に構えた刀を真下に振り切る。
その先から幾重もの風の刃が穿たれる。
地面を抉り、男の肉体を刈り取る
幾度も何度も執拗に
すべてが終わって琥珀が立ち尽くす。
気がつく顔に生暖かい感触が残る。

バンツ！！

ドアが開いた音がする。
振り返った先には空が立っていた。
琥珀の顔を見た空の瞳からは大粒の涙がこぼれおちる。

「ごめんな。」

琥珀の口から言葉がこぼれおちる。
それは謝罪なのか懺悔なのか
琥珀自身にもわからない、それでも言わずにはいれなかった。
そして空をおいて町へと駆け出した。
困惑する3人を残して

EPISODE 3 - 4 Human

目の前には人が人を蹂躪する光景が広がる
そこにあるのは純粹な死ではない
死ぬ寸前まで痛めつけられ、
意識がなくなれば叩き起こされ
笑い、奪い、殺し
それだけの行為を楽しむ人間の姿

「・・・お前たちは人間じゃない・・・」

誰にも聞こえない声で
それでも強い意志をもって
少年の手はその力を解き放つ

~~~~~

明と東条が町にたどり着いたとき、すべては終わっていた。  
傷ついた人たちが集まって互いの傷を癒していた。  
腕や足、顔から血を流しそれでも懸命に生きようとしていた。  
そこは戦場だった。  
壊し壊される場所  
殺し殺される場所

「琥珀ッ!!」

明の声が響く

振り向いた少年の服にはべったりと黒いしみが付着している。  
白地のTシャツは真黒に変色して

いつの間にかその手に持っていたはずの黒刀がなくなっている。辺りには砕け散った魔法玉の欠片が地面に散らばっていた。

「・・・」

その眼には優しさの欠片も存在せず、見知らぬ少年が立っている。顔にも鮮血がこびり付いていた。

ゆっくりとした動作でポケットからイヤリングを取り出すとそれをおもむろにつけた。

その瞬間に無暗に振りまかれていた魔力がなくなった。

明も東条も一言も発しない。

「魔法玉・・・割れちゃったな。」

力なく言葉を紡いだ少年の顔はいつもの冴原琥珀に戻っていた。表情は悲しみに満ちていた。

3人の中に再びの静寂が訪れて数秒

一人の住民が話しかけてきた。

老人で褐色の皮膚に真っ白の髪、優しそうな表情を浮かべて琥珀に話しかける

「！！！」

力なく振り向いた琥珀にかけられた言葉の意味はわからない。

それでも老人の顔もほかの住民の顔も一様に明るかった。

それは圧倒的な力に対する畏怖も、恐怖も含まれていない。

それを見た琥珀はにっこりと一瞬だけ笑って町から歩いて出て行くとする。

「待てっつてんだろおおおおお！！！」

いきなり琥珀は後ろから殴られた。

「!？」

振り向いた瞬間に頬にぶち込まれた拳は軽々と琥珀を吹き飛ばす。1メートルほど先にお尻をつきながら琥珀は殴られた頬を左手で触る。

何が起きたのか理解できない。

「待てよ、どこ行くんだよ。」

そう言った明の顔には心配の色が浮いていた。

それは東条にも当てはまった。

「とりあえず家に戻る？空ちゃん置いてきちゃったからさ。」

そう言って笑う東条の顔はいつものように輝いていた。

この場所に似つかわしくない表情

土で作られた家や木造の家屋に飛び散ってこびり付いた血しぶきそれでも2人は琥珀に笑顔を向けた。

そして帰ろうと言ってくれた。

「・・・うん。」

一言だけ

ポツリと零した琥珀にさらに笑顔を向けて3人は歩きだした。と、そこで思い出したように琥珀が立ち止まる。

琥珀の近くに来ていた町の老人に話しかける。

ポケットの中から携帯端末を取り出して、ソフトを起動する。

いくつかのボタン操作の後に琥珀は話し始める。

『余計な事をしてすみませんでした。』

頭を下げながら琥珀はその老人に向かって話す。

携帯端末は琥珀がしゃべった日本語をマイクから取り込み、そしてそれを現地の言葉に翻訳してスピーカーから発した。

それを見ていた老人は一瞬驚いてから、再び話し始めた。

『お礼を言うのは我々の方です。少し前から度々襲撃を受けてきたんです。』

ですが私たちに彼らを倒すすべも、力もありませんでした。』

そう言った老人の眼には悲しみの光が放たれていた。

おそらく今までに多くの住民が殺されたのだろう、と琥珀はすぐに理解した。

そこで琥珀は少し違和感を覚えた。

それはさっきまで気付きもしなかった些細なものを・・・

再び例を言われて琥珀が立ち去ろうと視線を戻すと明が壊れた家の修復を行っていた。

東条は回復魔法は使えないものの、自己修復力を促進する魔法を使っていた。

いつか琥珀が傷を癒すときに用いた魔法を。

それを見届けると、琥珀は散らばっていた魔法玉を拾い集める。

もともとはビー玉ぐらいの大きさの真つ黒の球体だったものがばらばらに砕け散っていた。

それを丁寧に拾い終えたときには2人の作業は終わっていた。

「帰るか。」

明るく言った明の言葉にうなずいて3人は昨日魔法で作った家に向かった。

~~~~~

「なんだこりゃ。」

明が建てた即席の家の周りには薄い膜のようなものが創り出されていた。

それに反応を示したのは明だった。

たしかによくよく見てみるといかにも不可思議な光景である。

「それは私のせいだよ。」

みんなには言ってなかったけど、私って陰陽師なんだよ。」

いきなりの東条のカミングアウトに

「「えっ!?!」」

思わず明と共に琥珀も驚いてしまった。

その二人を見て東条は隣でゲラゲラと笑いこけている。

東の空にはうつすらと太陽の光のせいで明るくなりかけている。

ひとしきり笑い終わった東条は満足げに一回咳ばらいをした後に、建物に向けて手のひらを差し出して小さく口の中で言葉を紡いだ。

「~~~~~」

その言葉は届かなかったがその東条の動きに反応してうすい膜状の結界は解かれた。

その結界にどれほどの効果が隠れているのかはわからないが、それ

でもきつと空を守るために張った東条がこの場所を離れるほどに安心なものなのだろうと琥珀は勝手に納得して扉を開ける。中で寝ている空の顔には涙の乾いた跡が残っていた。悲しみて流した涙なのかはわからないが、それでも琥珀はやりきれない思いを隠せなかった。強張った顔を見た二人はそつと琥珀たちから離れた。

「よかつたのか？」

家の外で明と東条は今日あったことを話し始める。

それは琥珀の事とも取れるし、今の部屋の中に男女が1人ずつという状況に対してともとれる。

「少なくともあの二人なら大丈夫でしょ。」

それよりも本題はソツチじゃないよね？」

いたずらっぽく笑う東条にもあまりの急展開のせいでいつものような元気はない。

それでも努めて明るく振る舞う彼女に対して明は感謝していた。壁にもたれてポツポツと話し始める。

「まあな。ただどうしたらいいのかわかんねえ。」

さっきはあんなこと言ったけど、冷静になるとやっぱな・・・」

表情は硬く、視線は遠くの山間に向けられている。

その山からは少しばかり太陽が顔を出し始めていて、自然とその眼は細められている。

隣に腰を下ろして、東条美代も話し始める。

「そつだよね。いきなりあんな光景見せられたらまいっちゃんよね。」

その表情は明とは異なる。

遠くを見るではなく、足もとに転がる石を見ていた。

砂っぽい地面に転がっている石は「ごつごつ」としていて、それでいても脆かった。

「・・・？」

明の視線が一瞬東条をとらえる。

「でも」

と続ける東条

「琥珀は琥珀だよ。」

空ちゃんにただ甘な鈍感男だよ。」

意地悪そうに笑う彼女の顔に明は救われたように、さっきまでの硬かった表情は崩れる。

「そだな。うっし。」

と言って立ち上がる明

「とりあえず・・・」

立ち上がった明につられて東条も立ち上がる

「とりあえず?」

東条をみながら明は笑顔で彼女に告げる
いつもの日常に戻るために

「寝るか!?!」

その言葉に笑いながらうなずき、二人はさっきまでいた家に戻って
いく。

~~~~~

入れ替わるように出てきた琥珀は血だらけになった地面を凝視する。  
朝の空気は冷たく、肌を抜ける風も冷たい  
その風が少しずつ血を拭い、何もなかったように全てを隠していく。

『はいはい、どうしたんだい?』

男の声は眠そうに対応する。

それは決して適当ではないが、それでも疲れは隠しきれない。

「少し調べてもらいたいことがある。」

何の抑揚もなく告げる声

年の割に落ち着いているが、その声に含まれた感情は良いものでは  
ない

むしろその逆である

電話口の男の気が引き締まる。

現実的に相手の気配などわからないが、それでも次に返ってくる男の声は先ほどとは全く違う感じが見受けられた。

『……詳しく話してくれ』

太陽の半分は山から顔を出し、地面を明るく照らしていた。そして一日が始まる。

EPISODE 3 - 4 Human (後書き)

遅れてすみません。

実は今インフルエンザという強敵に襲われています。

ほぼ治りましたが、皆さんも体調には気を付けてください。  
では読んでくれてありがとうございます。

朝、目が覚めると眠る前と同じ光景が広がっていた。

となりで眠っている美代ちゃん寝顔は可愛くて、思わずいたずらしたくなつたことは本人には内緒だ。

とても怖い夢を見た気がする。

突然誰かに襲われる夢

そう、あの時みたいにしてすべてを奪われるかもしれない体が強張つた。

でも、起きたらそんなことは全然なくて、

寝てる美代ちゃんを見てたら、

ああ、あれは夢だったんだってそう思えた。

ただそれだけのことなのにひどく私の心に安堵の思いが広がった。

「(きつといつもと違うところで寝てたからだよね)」

自分にそう言い聞かせて、体にかかっていた毛布をどけた。

太陽はもうすっかり昇っていた。

と言ってもまだ8時ぐらいだろう。

みんなはさすがに時差と昨日の宿さがしのせいでお疲れみだつた。

音をたてないようにそつとドアを開けて外に出ると、そこには先に起きていた琥珀があくびをしながら立っていた。

「おはよ。」

いつものように挨拶をした。

琥珀は突然声をかけられてびっくりしたのか驚いていたけど、その顔が面白くてつい笑ってしまった。

「ねえ、おはようは？」

「あ、おう、おはよう。」

やっといつもの様に返事を返してくれた。

そのことに満足になった私は一回伸びをしてから朝の空気を胸一杯に吸い込む。

少しそらした胸を見つめて・・・

大きく息を吐いた。ひとつは吸った息を吐くために。もう一つは自分の未成熟な部位に向けての溜息を。

そんなことを知らない琥珀は隣でぼけっと山を見ている。

日本のように緑があるわけでもなく、景色がいいというわけではない。

むしろ一面砂の色一色と言った方がわかりやすいと思う。

「なあ・・・」

「うん？」

突然話しかけられて、視線を琥珀に向けると目がふらふらと泳ぎだした。

これは何か隠している時か、言にくいことがある時だ。

こんな時の琥珀に何かいい報告を受けたことはなかったような気がする。

「あ、いやなんでもない。2人を起こしてくるよ。」

そう言って琥珀は家の中に逃げ込んでしまった。

しばらく彼の入って行った家を見ていたが、飽きてまた伸びをして

朝の情景を楽しむことにした。

~~~~~

空が外に出るためにドアをあけた音で目が覚めた。

昨日のことを唐突に思い出す。

走ってドアを開け外に出た空が見た光景

琥珀を追って町に行った時の光景

前者は言ってしまうえば本物の戦場だった。

後者は・・・戦場なんかではなかった。

襲ってきた奴の姿も、その形跡すら残っていなかった。

まるで最初から存在しなかったかのように消されていたように感じた。

「（なんだったんだろ・・・）」

疑問は拭えないものの、とりあえずは朝ごはんの心配をしようと思
ち上がった。

そうときまればやることは必然的に決まってくる。

まずは・・・

「明起きろ！！朝だ！！」

まだ眠り呆けているこのアホを起こすことからだ。

私と同じで昨日の惨状を見たひとり。

ただ決定的に違うのは私は明とちがって・・・

「うおうっ！！！！」

「起きたか。」

ニヤリと笑って起きた明の頭を軽く叩いた。

「朝ごはんの材料探しだ。もうお菓子は勘弁して欲しいからな。」

そう言っただけで寝ぼけたままの明を引きずって外に向かおうとドアを開けようとする、勝手にドアが開いた。顔をあげると、ぶつかりそうなほど近くをドアが通過する。危うく鼻が削り取られるところだった。

「ああ、琥珀か、おはよ。」

と、声をかけて外を見るとこちらを見ている空の姿が目に入った。おそらく話をしていただろうが・・・

「ああ、おはよう。」

どうにも表情が読み取れない。

あまり琥珀は会った時から顔に表情が浮かぶことが少ない。ただ一つ例外なのが空の前では例外ということらしい。

「様子はどうだった？」

気になって直接言葉にして琥珀に投げかける。

こういうときは遠回りな言葉よりも直球の方がずっといい。

「うーん、覚えてないみたいで・・・」

と返した琥珀の答えには少々驚いた。

あれだけしつかり見たのものを覚えていないということとは……

「おそらく夢か何かと勘違いしたんだろうね。

それで、琥珀はどうするの？昨日のこと伝えるの？」

私の言葉に琥珀は即座に否定の言葉を告げた。

わかっていたことを二度聞いた気分だった。

「わかった。そういうことなら私たちも任せておいて。」

そう言っつて傍らで寝ているアホの頭を一度叩いて、朝食の確保に向かった。

~~~~~

冴原琥珀は家から数キロ離れた山間にいた。

表情は厳しく、ただ一点のみを見ている。

そこにあるのは山に沿って作られている横穴の入口。

そこには2人の見張りの男が立っていた。

どちらも琥珀とそれほど変わらない年の少年だ。

二人ともこの土地の人間らしく肌の色は浅黒い

頭に片方は帽子、もう片方は布を巻きつけていた。

「……」

琥珀は何も言わずに歩き出す。

だらりと垂れた左手、耳元に持っつていかれた右手

表情のないまま二人の男の前に現れた。

三者はすぐに理解する

お互いから血の匂いがすることを

そして琥珀はためらうことなく右手に力を込めて己を縛る鎖を千切った。

「・・・消えちまえ。」

ぼそつと口から漏れ出た言葉を二人の少年が理解することはできなかった。

耳に届いた瞬間には琥珀の目の前にあつたはずの山と男たちの隠れ家は跡形もなく消え去った。

残骸など一切残さずに

すっばりと地形自体が変わってしまったように

一滴の血も

一本の髪も

すべてを消し去った後だけが残っていた。

それをただ見つめるだけの瞳は一度閉じられると、再び表情を消したまま琥珀は歩き出す。

次の目的地へと・・・

~~~~~

結果から言うと大収穫であった。

おそらくそれは昨日の出来事があったからに違いないが、それでももらえるものはもらっておこうというのが私の考えだったりする。

「いやあ、大量大量。」

明と両手いっぱい食材を持ち帰った。

それを見た空はびっくりして私たちを指さしてパクパクしていた。その顔をゲラゲラ明と二人で笑いながら朝食の準備に取り掛かる。

「・・・明、鍋とかは？」

「・・・んなもんあるかよ。」

まだ驚いたままの空を放置してのバトルが繰り広げられた。

いわれのない暴力に明も負けじと対抗する。

さすがにそこまでなつて空が制止に入つてなんとか平静を取り戻した。

「どうすんだよ。」

と初めに言い出したのが明だった。

「明はサバイバル部とか入ってんだから何とかならないの？」

と続けたのは私

「まあまあ、とりあえず朝はそんなに手間のかからないのにしようよ。」

フォローしたのは空だった。

琥珀はいつの間にかふらつと出て行ってしまっていた。

まあ心配するだけ損だ、と勝手に思いつつ手近にあった野菜を食べる。

もらう時に聞いたのだが、雨の少ないこの地方にも数年前にやっとの思いで河川を引いたらしい。

けれど、その河川も昨日の山賊などに荒らされて大変らしい。そんなことを思い返しながらさらに食べる。

「ねえ明。」

「なんだよ。・・・もふもぐ・・・」

食べながら話す明に呆れつつ気にせず話し続ける。

「このお礼にちょっと川の整備してきなさいよ。」

「・・・もちろんお前たちも手伝ってくれるんだよね？」

「・・・」

「そつだよな!?!」

「・・・」

「おい。まさか弱いからできませんなんて言い訳は聞かないからな。」

それだけを言うと明は止めていた手を再び動かして朝食を食べ始めた。

一言も返事をしていないのにその日は三人での村への奉仕になってしまった。

なぜ三人かと言うと、琥珀はふらっと出かけて帰ってきたのはもう日も暮れかけていた頃だった。

もちろん三人からの鉄拳制裁が琥珀を待ち構えていたわけだ。

「つつかれたー」

荷物を降ろして明が大きいため息をついた。

三泊四日の研修旅行を終えて今さつき学園に戻ってきた。

ただ行きとは違うのは帰りは自分たちの力で戻ってくることになっていたところだ。

もちろん近いグループの方が楽で、遠くなればなるほど帰るのが大変なわけだ。

「それにしても遠すぎだよおー」

東条美代が空のとなりでぶーぶー文句を言いながら地面にへたり込んだ。

研修旅行は一日目を除けばおおむね困ったこともなく、平和だった。

ただそれは他のグループと比べるとどうかということは考えるまでもない。

でもそのおかげで地元の人たちと親交を深めたとも言えるわけだが・・・

「にしてもムサビさんいい人だったなー」

明の言葉にみな一様にうなずき返す。

ムサビさんとは村の長老さんのことである。

山賊の襲撃を助けたことで仲良くなった人である。

食べ物とかに困っていた琥珀たちを自分の家に招待しているいろいろを使ってくれた、どちらにとっても恩人ということになる。

「それでも最初はどうなるかと思ったよね。」

空の呑気な発言の陰には一日目の山賊の襲撃は夢だったというこ
とで結論が出ているからだろう。

それを琥珀も東条も明もあえて真実を教えずに、空が夢だと思っ
ているならそれでいいという合意のもとで秘密にされていた。

「だよなー。村人がみんな冷たいんだもんなあ。」

「でも何で次の日には優しくなっただろうね?？」

「まあ・・・人見知りだったんだろ、きっと。」

明のごまかしに東条も琥珀も乾いた笑いを返すことしかできない。

「ふーん。そういえば琥珀の魔法玉どうするの?壊れちゃったんで
しょ?？」

「ああ、見事に粉々だ。さっき先生に言ったら後で呼びに来るって
な。」

空が言い終わり、さっき自販機で買った紅茶を飲んだ。

周りにも結構な数の生徒たちが帰ってきていた。

それはおそらく学園から近いところだったからだろう。

とは言え、日本ではないのだが。

「ん、琥珀呼ばれてるぞ〜」

だるそうに名前を呼んだ明の方を見てみると担当の教師が手招き

をしていた。

疲れた体を無理やり持ち上げて立ち上がった。

「じゃあちよっど行ってくる。」

それを告げて疲れきっている友達に話しかけた。

空はまだピンピンしていたが・・・

やっぱり出来が違うんだなと一人納得しながら琥珀は学園長室に通された。

~~~~~

2、3度ドアをノックしてからドアノブをひねった。

さすがというほどの重々しい扉を開いた。

室内は下品ではない程度に装飾がされている。

「失礼します。」

振り返って琥珀はドアを閉めた。

室内には学園長と琥珀だけ。

さっきまでいた教師はいつの間にか姿を消していた。

「おお、来よったか。まあ疲れたじゃろつてまずはほれ、そこに座れ。」

やさしそうな微笑を浮かべながら、大きないすから立ち上がって部屋の中央部にあるソファを指差した。

自らもソファに座りなおすためにこつちに歩いてきた。

「まずはお帰りと言わねばならぬな。」



座る前に近くにあったティーカップに紅茶を注ぎながらゆっくりと話し出した。

「それで集会もあることだし単刀直入に本題を話すでしょうか。」

その言葉で琥珀の顔は一気に引き締まった。

出発前に注意されていたこと、それは極力魔法の使用は控えること今の琥珀のおかれている立場はそれを堂々と真正面からぶち壊してしまっている。

「……すみませんでした。」

謝罪の言葉しか話すことができない。

明らかな違反行為である。

「ふむ。何か勘違いをしているようじゃがな。」

と学園長が続ける。

「わしは極力使うなど言っただけじゃ。誰も使うなどは言っておらん。

それに事情はちゃんとして聞いておるぞ。」

その学園長の言葉に思い当たるものが琥珀にはあった。

「……やっぱり付けてましたか。」

「ほお、気づいておったか。」

と言って学園長はほっほっほ、と笑い出した。

「・・・西野先輩ってところですね？」

「そこまで気づいておったか。西野もまだまだじゃのお。」

と、そんな話は今は良いのじゃ。重要なことはおぬしの持っていた魔法玉じゃ。」

「はい。」

と短く返事をする。

「あれはそうそう簡単に壊れるものじゃないんじゃないよ。」

その言葉に続く言葉を琥珀は気づいていた。

「・・・」

けれどもその理由を話すことはなかなかできない。

「もちろん物理的な破壊も用意ではない。」

そして西野くんからの報告から推測するに・・・

「たぶんお考えのとおりだと思います。」

と、それだけを告げて沈黙が二人を包んだ。

そして学園長がおもむろに、そして驚くべきことを琥珀に告げた。

「そのイヤリングをはずしてくれるかの？」

「……!？」

驚いて琥珀は話すべきことを見失った。

「わかっておる。じゃがこの学園なら多少の魔力ならば問題にはなるまい。それにの……」

という前に学園長にせかされて琥珀はしぶしぶ言われたことをすることにした。

もちろん危険かもしれないが、まあ一学園の長ともなれば大丈夫なのだろうと無理にでも思うことにした。

それでも無事でいられるかは保障できない。

「……はあ、わかりました。」

と言っておもむろに右手で耳のイヤリングをはずした。

ゆっくりとした動作だったが、はずした後の出来事は一瞬だった。

学園長室の中の空気が張り詰めた。

ピリピリとした空気で満たされる。

「……」

「おお、噂以上じゃのお。」

と暢気に笑って見せた学園長。

「この程度ならば大丈夫じゃる。」

と立ち上がった学園長をよそに琥珀は目を閉じてゆっくりと息を整える。

それは魔法遣いが集中力を高めるときにする行為である。するとさらに部屋の空気が変わる。

それは先ほどまでのピリピリと肌に感じる程度ではなく・・・

~~~~~

空はまだ待っていた。

なかなか帰ってこない琥珀にいい加減痺れを切らした空は、

「探してくる。」

とだけみんなに言ってから立ち上がった。

それをとめることもなく美代も明も手を振るだけだった。

帰るために魔法玉の魔力と自らの魔力を大量に使ったからだ。

「もう、いつまで話してるんだろ。」

行き先はたぶん学園長室だろうと見当は付いていた。

魔法玉を壊したとあればそこしかないと思っていた。

最上階の5階にある学園長室を目指して校舎の中に足を踏み入れた。

目の前に続く階段に一步踏み出そうとした瞬間に学園を包む莫大な魔力に体が強張った。

それだけなら空にも驚いた程度で済んだが、次の瞬間その魔力が爆発したように空には感じた。

もちろんそれは物理的な爆発などではなかった。

「・・・な、なに・・・これ。」

足が震える感覚に陥る。

圧倒的な魔力、圧倒的な威圧感、そして言い知れぬ恐怖感が空を襲った。

ただ立っているだけでも辛く感じる。

場所は離れているはずなのに、これほどのプレッシャーなど今まで感じたことがない。

「あ、うつ・・・」

うまく空気が吸えない。

おそらく他の人間ならばすでに倒れていたかもしれない。

動かないどころか震え出した足に無理やり力をこめてかろうじて立つ。

廊下に崩れかける一瞬手前にあたりを包み込んでいた魔力が急速に減退していった。

最後にはその存在さえ消えてしまうほどに。

「はあ・・・はあ・・・」

何度か息を整えてから、再び恐怖で震えていた足に力をこめた。今度は立つためではなく、歩き出し階段を上るために。

先ほどの時間に比べるとあっという間に学園長室の前に着いた。

そしてノックをして琥珀がいることを確認しようとしたところ、中からよく知った声が漏れてきた。

それを盗み聞きするつもりは空にはなかった。

それでも聞こえてしまった。

琥珀の声が

EPISODE 3 - 7 Unexpectedness

イヤリングを再び右耳につける琥珀の顔は普段と同じ表情をしている。

それに対して学園長の表情は硬く強張っていた。

難しい顔といった表情で何かを真剣に考えていた。

それは何に対しての思考なのか琥珀は薄々感付いていた。

「ふん。少しまっとなれ。」

それだけを言い残して学園長は隣の部屋に姿を消してしまった。

それは何分ぐらいだったろうか、学園長がひよっこりと顔を出した。

その手には前と同じような丸い玉が乗っかっていた。

「魔法玉ですか？」

それは前回と同じ大きさ形の魔法玉だった。

「その通りじゃが、それはちと特別製でのちよつとやそつとの魔力では壊れん。」

と言うか、これを壊したやつは存在せん。」

と言いながら琥珀にその玉を渡した。

「……いいんですか？」

とりあえず琥珀は学園長に尋ねた。

それは万一壊してしまう可能性と、本当にもらってもいいのかと

いう確認をこめて。

その玉は透き通った透明な玉だった。

「もちろんじゃ。さ、用事は済んだの。集会をするから早く行かねばの。」

と言って腰を浮かせた学園長は何を思ったのか再びソファにおろした。

おもむろに先ほどとは違う声で話し始めた。

「あまり開放するではないぞ？」

まだ完全に制御できてないおぬしには副作用があるはずじゃ。」

とそこまで言われて琥珀は観念したのか少しだけ話すことにした。それは最低限何かあったときのためにフォローしてもらおうという打算からでもあったのだが。

「・・・許容量を超えて使用すると、記憶が消えます。」

部屋は誰もしゃべらないために静まり返ってしまっ。

「ただ本当にそうなのかわかりません。何せ肝心の記憶がないですから。」

それだけを言って琥珀は立ち上がって学園長に一礼した。

その間も学園長は特に何かをいうことはなかった。

「魔法玉、ありがとうございました。」

それだけと言って静かに部屋から出て行った。

その姿を部屋に残った一人の老人は見つめていた。

「もういいぞ。と言ってもおそろく気づいていたみたいじゃがの。」

その声に反応して、部屋の中に一人の少年が姿を現した。

琥珀よりも2つ年上の学園一の實力の持ち主。

西野哲平がいた。

「俺もまだまだやなあ。」

いつものふざけたような関西弁で話し始める西野は学園長の顔を見てひとつ苦笑をもらった。

「そうじゃの。と言ってもあの子はどうも特別みたいじゃの。ほっほっほ。」

「どこまで気づいているんや?」

敬語もへつたくれも無いしゃべり方にも、老人は起こる気配は無い。

そこはさすがの年の功だろう。

「さあのお。どうも最近はおケが激しくてのお。」

と笑ってごまかされていた。

西野はため息をこぼすと静かにその部屋から出ることにした。

~~~~~

空は必死で走っていた。



さっきの魔力は琥珀のものだったのだろうか。  
学園長室から聞こえた琥珀の声はいつもと違って真剣だった。  
そして言っていた事

”記憶が消える”

その言葉が強烈に空に突き刺さっていた。

(それじゃあ・・・それじゃあ・・・)

と言ってさっきまでいた明と美代がいた場所に知らないうちに戻  
ってきていた。

「空？」

美代が突然走って帰ってきた空の様子が変なことに気がつく。  
それは今にもなきそうに歪んだ表情をしていた。

心配する美代を他所に空の意識はどこか違うところにあった。  
さっきまでの会話・・・  
今の空はそれがすべてだった。

(消える？記憶が？そんな・・・でも琥珀はいつも魔法使ってたし、  
それでも記憶が消えたことなんかなかったはず・・・)

足元が崩れそうになる。

自分の存在が、

琥珀の中にある一条空という存在が消えるような感覚  
不安定な足元に恐怖を感じる

「い・・・よ。」

「えっ!?!どうしたの???空??」

美代の呼びかけにも答えることも無く空は呆然としている。

つむぎ出す言葉は小さすぎて聞き取れない

例え聞き取れたとしても理解はできないだろう。

ただ事ではない様子に気が付いた明も疲れなど忘れて2人に近づいた。

その間も美代は必死に空をなだめようとしているが、効果はまったくないようだった。

「空ちゃん大丈夫か??しっかりしろって!!」

明の声にも空は何の反応も示さない。

空はまだうつろな目で何も無い空間をたださまよっているだけ。

そして口からは言葉にならない音がただ出されるだけ。

唯一聞き取れた言葉は

「あ……う……い、や……」

いや、と言ったったの二文字だけだった。

美代も明もどうすることもできずにただ空に声をかけることしかできない。

誰かを呼ぼうとか、そんな考えはまったく頭に思いつかなかった。途方にくれていた二人の目に琥珀が校舎から出てくる姿が映った。そして明が一言

「琥珀ッ!!早く来いッ!!」

琥珀は手元にあつた魔法玉をポケットにしまいつつ怒鳴り声が出た。明のいるであろう方向を見た。

「えっ……」

手元の魔法玉をうつかり地面に落としそうになった。視線の先には空がいた。

ただ空の様子はいつもとは違った。

明と美代の二人の存在など目に入っていなかった。

ただ体を震わせ、子供のように何かにおびえる空の姿があった。

「そ、ら……？」

うまく言葉にならない音を口から吐き出す。

足は地面に縫い付けられたように動かない。

頭の中では今すぐに駆け寄りたいとは思っていても体は動かなかった。

「おい琥珀！！」

明の怒声でやっと自分をとりもどした。

それまでの間は数秒だったのか数分だったのか琥珀には考える余裕もなかった。

はじかれたように空に駆け寄った。

肩に両手を置いて空をゆすりながら声をかける。

「空？どうした？なにかあつたのか！？」

何度かの末によろやく空がうつむいていた顔を上げた。

その瞳には今にもこぼれだしそうなほどの涙を蓄えて  
その口からは言葉の断片らしきものがこぼれていて  
それでも琥珀を見た彼女の表情は一気にダムが決壊したように崩  
れた。

涙があふれ、嗚咽が漏れ、空は琥珀に抱きつきながら泣いていた。

「よしよし、もう大丈夫だから。」

そういつてあやす琥珀の表情は優しくかった。

その光景をただ黙ってみているしかない二人にも、あやしている  
琥珀本人にも空の泣いた理由はわからなかった。

しばらくの間続いた空の号泣は次第に収まった。

「もう大丈夫か？」

琥珀が空に優しく声をかけた。

「うん。でも……」

と空が言いにくそうに口ごもる。

「どうした？」

終始やさしく問いかける琥珀に、空は恥ずかしそうに小さくつぶ  
やいた。

それは明と美代には届かなかっただろう。

「……恥ずかしくて顔見せれない……」

琥珀にだけ聞き取れる音量の声で話す空を琥珀はやさしくなでて

いた。

~~~~~

集会も無事終了した。

別グループだった桜井要と泉あきらとも合流して少し会話をした。二人とも別々で、桜井は赤道近くの国に、泉はオーストラリアだったらしい。

ただ二人に共通していたのは、どちらもたいした苦労はなく平和だったということだった。

それを聞いたときの明と美代の顔はやはりどこかうらやましげで、また少し引きつっていた。

おそらく思い出したのだろうと、琥珀は思っていた。

その日は帰ってきたばかりだったので、みんなすぐにそれぞれの家に帰宅して行った。

「もう大丈夫か？」

みんなと別れた後空と琥珀だけになった。

二人だけの空間で琥珀はさっきのことを空に聞いた。

「うん、もう大丈夫。急にごめんね？」

「いや、大丈夫。あんまり無理するなよ。今日は早めに寝るよな。」

それだけ言っただけで琥珀は何も言わなくなった。

そんな琥珀の隣で空は彼を見ていた。

3年前の事故でなくしたものは彼女には大きすぎた。

一人で背負うには重過ぎた。

それでも今この瞬間に隣で歩いている少年を見て空はフツと微笑

んだ。
誰も気づかないうちに

数日後

研修旅行の疲れもあり、琥珀は特に何もすることもなく家でただらと過ごす日々が続いていた。

とはいえ、毎日の空との魔法の練習を疎かにする事はなかったが・

そして大型連休の最終日である今日はいつものおなじみメンバーでの食事の予定が入っていた。

「あっ、やば。」

現在時刻 11:00

待ち合わせの時間まであと30分を切っていた。

琥珀はまだ自宅にいた。

朝の練習が終わった後いつものように調べ物をしながら過ごしていた。

気が付いたのはつい数十秒前

「・・・あ、時間。」

と言う事ですぐさま着替えを済ませた。

朝に一度鍛錬の後にシャワーを浴びていたので寝癖の心配はない。

「服は・・・いつも通りで大丈夫。

財布は・・・よし。

んじゃ行くか。」

残り時間はあと28分

急げばギリギリ間に合う。

ここから待ち合わせの駅前までは歩いて30分
ちなみに空は泉や東条たちと買い物に行っている。

勢いよく入り口のドアを閉めて鍵をかける。

鍵と言っても生体認証のために旧世代の持ち歩く鍵ではない。

「あー、やばいやばい。」

一応街中での魔法の使用は極力控えなければいけない。

禁止ではないが、いろいろと大人の事情らしい。

しばらく走ると琥珀の額に汗がうつすらと浮かび上がった。

さすがに5月にもなると気温は高くなる。

「なんとか間に合いそうだな。」

ダッシュから速度を落として歩きに変える。

駅前の近くの商店街を通る。

一時期は大型デパートなど複合店舗が増えた時代もあった。

しかしやはり人間は人と人とのふれあいが大事だったのか、再び
商店街と言う旧世代のものを作り上げた。

などとのんびりと歩調を遅めた琥珀はぼんやりと考えながらふと
聞こえてきた声の方を振り向いた。

「・・・め・・・さいッ!!」

「(カップルのケンカかな。)」

それとなく向けた視線の先をよく見た。

なぜか周りを歩く人は一瞬だけ目を向けて、今度は足早にその場
から去って行く。

またある人はオロオロと周りを見渡しているだけ。

「（ああ、なるほど。）」

さっきの声の主は一人の女の子だった。
いわゆるナンパだったりするわけだ。

「だから、放してください。」

「いいじゃねえよかよお。ちょっと俺たちに付き合ってくれただけ
でいいんだからさあ。」

「そうそう。別に変なことしようって思ってるわけじゃないんだか
らさあ。」

「へへへ。」

と、こんな感じで絡まれていたりする。
もはやナンパではなく、誘拐なんじゃないか。
そんなことを思いながら周りを見渡したが誰も助けに行く様子
はない。

そんなことをしている間に女の子は手をつかまれて路地裏に連れ
て行かれてしまった。

そして琥珀は思わず口から言葉が漏れた

「……な、なんてべたな展開……」

~~~~~

やっぱり世間なんて冷たいものだ。

それを今日この瞬間に身にしみて感じた。  
とおり過ぎる人は、見て見ぬふりをするかもしくは誰か別の人に頼ろうとする。

たしかにその気持ちはわからなくもない。  
というかむしろわかる。

逆の立場なら私は何もできないだろうから・・・

「い、痛いッ！！」

さつきから掴まれている右手首が痛い。

やっぱり護身術ぐらいできないと危険なのかなあ。

と、そんなのんきなことを考えている時点で私はこの現実から目を背けているんだろう。

そりゃドラマとか漫画みたいに突然イケメンな人が助けってくれなくてもいいけど、せめて1人ぐらい助けてあげようとする人がいてもよかつたんじゃないかと思ったりなんかしてる訳だ。

ニヤニヤしながら手を引く男は最悪である。

「へへ、まあそんなこと言うなよ。もうすぐ着くからさ。」

そう言いながら見えてきたところは明らかに人通りが少ない通りに建っているビルのようなものだ。

機能しているのかわからないが、見た目は廃ビルのようだ。

ああ、初めては絶対に大事にするって決めてたのに・・・  
と半ばあきらめかけた私を無理やりビルの中に引きずり込んだ男たちの目は心なしに血走っている。

しかもさつきは3人しかいなかったのに、なぜか5人に増えている。

「さあ、着いた着いた。これからゆっくり楽しもうや。そういやお

前の名前は？」

まさに今からピーなことをしようとする男の顔は気持ち悪いぐらいの笑みである。

周りにいる男も似たようなものだけだ。

正直なところ私はこの状況から逃げ出す自信などない。

かと言って素直に従う気もないけれど。

「・・・」

黙りこくっている私に何をするわけでもなく無言で近づいてくる男

ああ、神様

と、別にキリスト教でもなんでもない私はすがり付いてみたりする。

もう絶望的な状況に頭が付いて来ない。

「！？誰だテメエ！？」

男の一人が私の頭上を見ながら訳のわからないことを言う。

はっ！！

もしかしてこのビルってお化けがでたりとか・・・

男たちの顔は特に恐怖と言うわけではなく、むしろ怪訝な表情だ。

「いや、ただの通りすがりです。」

「はあ？何テメエ意味わかんねえこと言ってるんだ？ここは立ち入り禁止だぜ？」

一人の男が笑うとすぐにそれにつられてほかの男たちもゲラゲラと笑い出した。

とりあえず振り返ってその人物の・・・  
足が生えているのかを確認  
ここでもしなかったら、と思ったら背中に冷たい何かを感じた。

「まあいい。テメエも始末しないとイケねえなあ。」

男の声を合図に3人の男が飛び掛る。

いやコレはどう考えても通行人さんは勝てないっしょ。

と、さっきから振り向くことはためらっていた私は思い切って飛び掛って行った男たちの方を見た。

ここで予定ならば1人の男の人がフルボッコにされているはずだった。

普通はそう思うはず。

「な・・・」

後ろから聞こえた男の声は詰まっていた。

目の前に広がっているのは本来見えないはずの風。

と言ってもその通りすがりさんの体の周りを激しく風が渦巻いていた。

そして3人のイカツイお兄さんたちはみっともなく地面でお寝んねなさっていた。

もつ言葉が出ません。

「・・・」

と、私が呆然としていたところにさらに声が降る。

「テメエ、なめんなよ!!」

「へへへ。」

と言いながら二人の男たちはそれぞれポケットと懐から何かを取り出す。

一人の痩せ気味な男はポケットからバタフライナイフ

なんて古典的な！！

と思わずツツコミたくなる衝動を抑えて隣を見ると、リーダー格の男は胸元からあるう事かハンドガンを取り出した。

もしかして、本物でしたか！！

にもかかわらず通りすがりの少年、いや青年？

同年ぐらいの男の子は顔色を変えない。

そして今頃気付いたが、もう私は完全に蚊帳の外

「・・・はあ。」

とだけ言っつて風は収まり、それを見た男はナイフを持ち青年に飛び掛る。

それを軽やかな動きでかわした。

その直後に飛び掛ったはずの男が静かに崩れ落ちる。

「えっ？」

明らかに今何もしてないのに倒れたよね？

なんでなんで？

と思っっている暇もなくもう一人の男がハンドガンの銃口を向ける。

これはもうさすがに・・・

「なめたマネしやがって。なるべく使う気はなかったんだけどなあ。」

いやいや、使う気満々で懐入れてましたやん！

私の心の中のツッコミなどわかるはずもなく、トリガーに置かれた人差し指に力が込められた。

その刹那

パンッ！！

男の右手の先に握られたものから煙が吐き出される。

あれが世に言う硝煙なのかと冷静に見る暇もなく、撃たれたはずの青年を見る。

が、すでにそこには姿はなく男の後ろで悠然と立っていた。

おお、私は生まれて初めて瞬間移動と言つものを見ました。思わず端末のカメラを向けていた。

今冷静に考えると瞬間移動つて撮れないじゃん。

「それじゃあ。」

と言つて振り下ろした手刀で襲ってきた5人組は全員地面に倒れていた。

その間はわずかに十秒程度だった。

そのとき不意に私の頭をある言葉がよぎった。

それはもちろん、

「お」

「お？」

私の言葉を繰り返す通りすがりさんを他所に続けた。

「王子様！...」

「えっ？」

「遅れてゴメンなさい・・・」

素直に謝る琥珀

それも駅前での通りで

もちろん行きかう人の視線はばっちり注がれるわけで  
待たせた5人はなぜか笑顔

「いって、いって。」

そう言つて笑顔で肩をたたき明は一言で言つてしまえば変  
まあ大体の展開はわかつていた。

「じゃあ行くつか。もちろん琥珀のおごりでね。」

かわいい笑顔を浮かべながら悪魔のようなことを言つたのは空だっ  
た。

泉はせめてもの善意からか苦笑しながら何とか励ましてくれようと  
していた。

桜井要も微笑を浮かべている。

このおとこの場合はなまじ外見がいいだけに絵になつたりする。

「みんなの良識に期待する・・・」

とだけ答えてぞろぞろと駅前のファミレスに向かった。

中は連休最終日だからなのか、それとも関係ないのかはわからない  
が混んでいた。

何分か待つてからの入店になった。



さすがに6人だと大変で机を3つ繋げての食事になった。

『いただきまーす。』

話題は予想通りと言うかなんというか研修旅行である。

どこに行った〜とか、どんな感じだった〜とか。

その間も明は何度目かもわからないドリンクバーに行った。

「えー、何でみんなそんなにいい所なの？」

当然ながら出る不満、もちろん空から。

それに東条も同意する。

「たしかにあんまりいい所とは言えなかったけどなあー。」

見渡す限りの砂、砂、砂

たまに山

年頃の女の子にはつらいところだろう

「そうだよー。カラカラなところでさあ。って何かのど渴いちゃった。」

と言ってコップをもってドリンクバーの機械があるところまで歩いていった。

そして入れ替わりに明が帰ってくる。

話題は琥珀の魔法玉へシフトする。

「それで、どうして琥珀さんの魔法玉が粉々になったのですか？」

あいつも変わらず丁寧な話し方をする要。

そういえば最終日に壊れたこと言ったなあ、と琥珀は思いながらど  
うい答えるかを考える。

少しの間後、飲んでいたジュースを口から離す。

「さあ？不良品だったんじゃないかな？」

とりあえずごまかしておくことにした。

後々厄介なことにもなりかねない。

それに粉碎した現場は誰も見ていない。

「そういえば新しいのもらえたの？」

東条が琥珀に尋ねる。

空のことがあってもらったことはまだ伝えてなかった。

「うん。コレ。」

と言ってポケットの中から魔法玉を取り出す。

みんなのものより心ばかり少し大きい気がする。

まだ魔力をこめていないソレは透き通るような透明である。

これだけでもそこそこの価値はありそうだった。

「おお、新しいな。ってかまだ魔力注入してないのかよ。」

明はガブガブジュースを飲みながら聞いてくる。

泉は相変わらず寡黙である。

いや、引っ込み思案なのかもしれない。

「ああ、疲れてたしな。」

「なら今やっちまえよ。」

明はズルズルと空になったコップのストローを吸っている。空がテーブルに戻ってきた。

どうせだから、と琥珀は魔法玉を軽く握った。

「ん……」

琥珀のにとって魔力を収束させることは造作もないことだ。ほんの数秒だった。

握った手の指の間から一瞬だけ光が漏れる。

「終わった。」

ゆっくりと開いた手の平の上には真つ黒な魔法玉が乗っていた。明と東条は特にリアクションをしなかった。

「黒、ですか。」

しゃべったのは要だった。

泉と空もそれを見る。

「ホントですね。」

やわらかいしゃべり方は泉の特徴

「まあ前も黒だったよな。」

あまり興味なさそうな明

「でも珍しいんじゃないかなかったっけ？」

と言っつのは東条

「そうですね、珍しいといえば珍しいですね。」

要は話し終わるとグラスのお茶を飲む。

「でもそれってどうして珍しいんだ？」

一番馬鹿っぽい発言をしたのはもちろん明  
それに答えるのはやはり要だった。

「それは魔法遣いの属性に大きくかわることはご存知ですよね？」  
要の立ち位置は最近解説が多くなってきたように思う。

グラスが空になるまでストローを吸いながら琥珀は要の解説講義に  
耳を傾ける。

もちろんそれは知らないからではなく、なんとなく聞かざるを得な  
い雰囲気だからだ。

「火は赤を、土は黄、水は青、風は緑を表しますよね。それと魔法  
玉の色の一番重要な要因は遣い手自身の特性です。」

たとえば僕の魔法玉の色は淡いグリーンです。これは風の属性と水  
の属性を表していますが、ここで重要なのが色合いです。

淡いグリーンということはベースは風属性ですが、それに少し水属  
性を表しています。」

「ん？つまりはどういうことだ？」

「簡単に言つと色の濃さによってその属性の適正がわかるのです。もつとほかの例を出しましょう。明さんの魔法玉は黄色ですよね？それはつまり土属性の才能があるということなんです。」

「ふんふん。」

「ここで少し考えてみてください。」

赤、青、黄、緑の色を混ぜると何色になりますか？」

明は少しの間考えた末に答える。

「・・・黒、か。」

「そうです。つまりそこから導き出される答えは・・・」

「・・・4属遣い《カルテット》ですね。」

琥珀と空以外が一瞬黙り込む。

琥珀はのんきにあくびをしながら外を見ていた。

「でも俺の場合は完全な黒じゃなくグレーって感じだな。」

今まで聞きに徹していた琥珀がつぶやく。

たしかに魔法玉の色はうつすらとしている。

「それでも珍しいことには変わりないですよ。」

最後に要が付け足してこの話題は終了した。

そして話題は次へとシフトする。

「そついえばもうすぐ中間テストだよね。」

東条がのんびりと話す。

ちなみに学園の中間テストは6月1日からだ。

「それが終われば学園祭の準備だね。」

空が言う。

うちの学園の学際は近くの普通の高等学校と合同で行われる。

名目上は交流と言う事だが、実際はもつと大人のじじょうがあるのかもしれない。

未だに魔法を使える人間と使えない人間の差は大きい。

「まあ一番の問題は中間テストだよな。ってなわけで頼んだぞ琥珀。」

明は始まる前からすでにあきらめムードに入っていた。

「あついいな！私もよろしくね。」

と、乗ってきたのは東条だ。

二人とも筆記はあまりできる方ではなく、むしろ……

「まじめにやるなら考える。」

「もちろんだ！！いやー、助かったな東条。」

明と東条は二人して喜んでいた。

「それならいつそみんなでやろうよ。」

言いだしつぺはもちろん空だ。  
それにみんなも賛成する。  
とんとん拍子で物事が進んで行く。

「じゃあ一週間前からはじめましょうか。」

要の落ち着いた声も聞こえた。  
相変わらず泉の口数は少ない。  
それでも楽しそうにみんなの話を聞いていた。

こうして連休の最終日は終わっていった。

~~~~~

「・・・」

冴原琥珀は口を開かない。

ただ車の助手席に黙って座っているだけである。

「ごめってば、ホントに悪いとは思ってるんだよ？」

運転席からご機嫌斜めな琥珀を必死でなだめる声が聞こえる、榊だ。
榊は琥珀のいる組織の室長を勤めているが、まったく威厳と言つもの
が足りていないと思うのは無理からぬことなのかもしれない。
とは言え一応上司なのであまり無視を続けるわけにはいかない訳で、

「それで？今日の仕事内容はなんです？」

それでも多少の嫌味を込めながら琥珀は榊に話しかける。

ちなみに組織とは言っても、どこかの犯罪組織などではない。表向きは存在しないことになってはいるが、正式に政府組織である。

「いやホントに悪いと思ってるんだよ・・・」

「いつまでも謝ってないで内容を詳しく話してくださいよ。」

いつまでたっても謝ってばかりいた榊に琥珀は少しいらいらしながら聞く。

「うん、今日の仕事はね」

「

EPISODE 3 - 9 in the ... (後書き)

相変わらずのろまな更新で申し訳ないです。

テスト編を書こうか、そのまま学際編を書こうか迷っていたりします。

どうしたもんですかねー！。

「ねえ、それ何？」

朝一の空の発言である。

「うん？卵以外に何に見える？」

飄々と答える琥珀。

「いや、そんなことは見てわかるけど、肝心なことはどうしてそれを持っていくかと言う事であって・・・
ってかそれって鶏の卵じゃないよね？」

研修旅行から帰ってきて数週間がたった。

今日からみんなで中間テストの勉強をする予定になっている。

その日の朝に琥珀はいったん家を出たものの、この卵を家にとりに帰ったのだ。

「そうだと思うけど、よくわからない。」

「・・・」

あまりに変すぎる琥珀の行動に空は何も言えない。

そして顔を引きつらせながらさらにたずねる。

「それをどこで拾ったの？」

「あれ言ってなかったっけ？研修旅行の最終日に近くの山で拾った

んだよ。」

「じゃあ何で胸ポケットに入れてるわけ？」

「だって温めると孵化するかなって。」

「・・・」

再びの沈黙が襲う。

あまりの琥珀の突拍子もない行動に空は黙り込んだ。突っ込むべきか、それとも暖かく見守るべきかと。

「そ、それで、孵化しそうなの？」

「うん。どうだろう。」

ポケットとしながら歩き続ける琥珀を見ながら空は大きくため息をついた。

琥珀のことだからいろいろと調べたのだろうけど、それでもわからない卵って何だろうと空まで気になってしまった。

~~~~~

放課後

みんなで琥珀の家に来ている。

理由は簡単、家が広くて使い放題だから。

『おじやまします。』

と、それぞれ一言ずつ言いながら家に入ってくる。

場所は居間になった。

6人もいると普段広く感じる部屋も手狭に感じてしまう。

「お茶か、紅茶か、コーヒーかどれにする？」

琥珀がいったん部屋に行つて荷物を置いて戻つてきて尋ねる。

それぞればらばらな答えにも琥珀は淡々と準備を始めた。

さっそくまじめな要と泉が勉強を始める準備を始めている。

「なあみんな勉強とかしてんの？」

明の早くも投げやりな発言に

「それなりにね。」

「困らない程度には。」

「す、少しは……」

空、要、泉の順に明に答える。

さすが”S”クラスと言つた所だろうか。

それに対して残つた東条は

「いや、ぜんぜん。」

と答えてしまう辺りに差が現れているのだろう。

琥珀はぼんやりとお茶を入れて、お盆に乗せて居間に持つて行った。

「琥珀はどうなんだ、勉強やってんの？」

「ぜんぜん。」

と答える辺りやはり同じクラスなのだろう。

「じゃあ仲間か。」

とうれしそうに肩に手を回す明に空は笑いながら、

「でも琥珀は勉強できるよ。」

と言った。

「おい。それは裏切り行為だぞ。」

と責めてくる明。

視線だけが責める東条。

どうやらこの勉強会の方針がたった今決定した。

「じゃあ明と東条さんはがんばって。」

とだけ言っつて琥珀は自分の勉強を始めた。

それぞれの場所でもみんなが勉強を始める。

「……」

開始30分

『……わかんない。』

明と東条が脱落した。

それを見かねた泉と要がそれぞれフォローにまわる。

琥珀は一通りざっと目を通したテキストを置いて、胸ポケットに入っている卵を取り出す。

「ねえそれって孵化するの？」

「さあ、どうだろ。」

朝のやり取りの続きが始まる。

空の言葉にみんなが一度琥珀の手の中にある卵を見る。鶏の卵より少し大きい程度の卵である。

「それはどこで手に入れたんですか？」

不思議そうに要が尋ねる。

「研修旅行で拾ったらしいよ。そのときはまだ温かったから孵化させようとしてるみたい。」

それを聞いた明はゲラゲラと笑い出す。

「いやどう考えても無理だろ。」

まったく持って夢がない明である。

それに対して要はまじまじと琥珀の手にある卵を見る。

「これは面白いことになるかもしれないですね。」

「桜井君わかるの？」

と食いついたのは空だった。  
意外にも気にしていたのかと、琥珀は内心で思った。

「ええ、少しだけです。でも生まれたときの楽しみをとるのは忍びないので秘密です。」

爽やかな笑顔と共に要は会話の流れを断ち切った。

期待に胸を膨らませる空と、意外にもじっと見ている泉。

東条は勉強疲れでダウンしている。

琥珀は琥珀でぼんやりと卵を見ていた。

~~~~~

そんなこんなでテストが始まった。

連日の琥珀の家での勉強会に明も東条もそれなりにがんばって勉強していた。

琥珀もなんだかんだと勉強はしていた。

相変わらず胸ポケットに入っている卵を気にしつつもテスト問題を解く。

「・・・」

テスト中の教室は普段では考えられないほどの静けさである。
クラス中の生徒が机にかじりついている。

日程は3日間で、今日は最終日の最後のテスト。

魔法基礎理論の筆記テスト中だ。

実技試験のテストは授業中にそれぞれ行われている。

「（テスト終わるまであと5分か。）」

一通りの問題を解き終わった琥珀は念のための確認作業を行う。
チラツと目に入った明も必死に机に向かっていている。

キーンコーン……

「うええ〜」

気持ち悪い声の後に明と東条が机に崩れ落ちた。

おなじみの一番後ろの席の人間がテストを回収に回る。

ちなみに琥珀が一番後ろだったりする。

「おつかれ。」

明に軽く声をかける。

ぐったりとうなだれたまま顔だけを上げて明は返事を返してきた。

「お、う。もう無理だ。」

「んじゃ打ち上げのご飯に行くか。」

昨日決めたテストの打ち上げに3人で向かう。

「東条さんもおつかれ。」

「……おつかれ。」

ワンテンポ遅く返事が帰ってくる。

そうとう疲れたらしい。

苦笑しつつ待ち合わせ場所の校門へと向かった。


~~~~~

『おつかれー!!』

打ち上げが始まる。

そしてなぜか琥珀のうちで開催と言う事になった。

「どうでもいいけど何で俺の家？」

琥珀はとりあえずさっきからの疑問をぶつけることに。

『落ち着くから。』

「・・・」

全員の言葉がハモる。

机の上に並べられたお菓子とジュースの山を見ながら琥珀はため息をひとつこぼしてあきらめモードに入った。

ちなみに言うと明日は学園が休みになっている。

まず間違えなく夜通しになりそうな予感を感じていた。

「今日はどうするんだ？」

琥珀がみんなに尋ねる。

「どうするって・・・決まってるだろ。」

『もちろんフルコースで。』

こうして琥珀の一日が終わる。  
それはもうどんちゃん騒ぎで、近所さんに怒られないかと冷や  
冷やしていた。

~~~~~

「誰か携帯なってるぞ〜。」

明がお菓子を食べながら左手で鳴っている携帯を掴みあげる。

「ああ、俺のだ。」

琥珀は明から携帯を受け取りディスプレイを見る。

「・・・」

榊

とディスプレイに表示されていた。

その画面を見ながらしばし硬直した琥珀は、ため息をついてから
部屋の外へでた。

「・・・はい。」

『何で今日も不機嫌なのかな？今日でテスト終わったはずだよね？』

「仕事ですか？」

琥珀は榊の返事もせずに続けざまに言葉を投げかける。

『まあそついつことだね。』

「何時からです?」

『できれば早い方がいいかな。』

「はあ、わかりました。すぐに行きますんでいつもの場所で。」

『了解。』

それだけを言うと琥珀は携帯を切った。

またため息をこぼして部屋に戻って行く。

着替えを済ませてからみんなのいる居間に戻る。

「悪い、ちよつと用事入った。すぐ戻ってくるから勝手にやっけてくれ。」

それだけを言うと琥珀は家から出て行ってしまった。

言葉を返す暇もなく出て行ってしまった琥珀に戸惑う。

「えーつと・・・」

明が戸惑いを隠さずに話す。

「まあ僕たちは琥珀さんが戻ってくるまで待っていきましょう。」

爽やかな要の提案にうなづくものの、みんな少なからず落ち着きを失っていた。

それも少しの間だけで、すぐにさっきまでの盛り上がりを取り戻す。

ただ空だけがその場に取り残されて・・・

EPISODE 3 - 10 test test test test (後書き)

どうもです。

とりあえず急いで書きました。

誤字脱字があれば報告してください。

EPISODE 3 - 11 dragon

「さて、多少予定は狂ってしまいましたが・・・」

と、改まって話し始める東条。

そして全員の視線が彼女に向かう。

その時口元がにやりといやらしく歪んだ。

「空ちゃん!!」

突然自分の名前を呼ばれて驚く空

「は、はいっ!!」

なぜ自分が呼ばれたのかわからない空を他所に東条はさらに続ける。

皆が何を言い出すのかと見つめる。

「ぶっちゃけ琥珀とはどうなのよ。」

「えっ?」

意外なことを聞かれて戸惑う空

オロオロと周りに助け舟を求めるが皆楽しそうに見つめ返すだけ。泉も少し戸惑いながらも空の顔を見る。

「まあまあ、とりあえず落ち着きなよ。」

未だに美代の顔からはニヤニヤとした表情は消えないものの、あわてる空にコップに入った飲み物を渡す。

受け取った空はこの話題をごまかすようにコップの中の液体を一気に煽った。

「ぶはっ。」

「うわ、酒くせさー！」

空の息がかかった明が思わず顔を背けた。

そして次に見た空の顔は真っ赤になっていた。

「おい、酒飲ませたな？」

「えへへ。」

明が東条に問い詰めるものの、すでに手遅れだった。

そんな状況になっても要は相変わらず爽やかな笑顔を崩さずに雰囲気を楽しんでいた。

そしていつの間にか・・・

「おい、何で泉まで顔が赤いんだ。」

琥珀のいなくなった打ち上げはすでに明の手では収集が付かない事になっていた。

どうにでもなれと、東条が持っていたチューハイを喉に流し込む。果汁の甘い味と、アルコールの独特の後味が舌に残る。

それを要はニコニコと見ていた。

「それで、空ちゃんと琥珀の関係はどうなのかにゃ〜？」

東条が聞き出そうと真つ赤な顔の空に詰め寄る。

それでも最後の理性が残っていた空は頑なに口を開こうとしない。

「桜井君も泉ちゃんもきになるよね？」

「そうですね、興味はあります。」

「……は、はい。少しは……」

ほらね、と言わんばかりの東条の表情に空は一瞬だけ戸惑ったが、やがてゆっくりと話始めた。

「わ、私は……」

~~~~~

「ただいま。」

琥珀が家の玄関を開ける。

時間はもう日付が変わろうかと言つ時間である。

「うわ、臭いな。」

開けた途端鼻に付くアルコールの臭いが琥珀を襲った。

顔をしかめながら靴を脱ぐ。

そのまま居間に入って行くと、中には顔を真つ赤にして倒れている屍が4体。

そしていつものように笑顔の要が座っていた。



「要だけか。」

冷蔵庫から冷えた麦茶を取り出してコップに注ぐ。

「みなさんお酒で酔いつぶれてしまいました。」

コップの中身を口に含む。

冷たい液体が近頃暑くなってきて火照った体を内側から冷ましていく。

「そか。何か俺らは乗り遅れたな。」

と言つて部屋中に散らばったごみを拾って行く。

人気のお菓子はすでに空っぽ、それに対して残っているモノはイマイチだったようだ。

机に掘り出されているコップを流しに持って行き、その後机を拭く。

「盛り上がっていましたよ。」

「まあそうみたいだな。」

一通り片付け終わった琥珀はソファに腰を下ろした。

時期から言っても風を引くことはないだろう。

わずかに残っていた缶チューハイを要と飲む。

「お疲れ様ですね。」

少し飲んだところで要が話題を振ってくる。

顔にはほんの少しだけ疲れの色が伺える。

「ん、まあな。」

あまり深いことは言わない。

それは琥珀のいる組織の決まりであり、また巻き込まないための琥珀なりの配慮である。

要は微笑をして手元の液体を飲む。

「・・・つと。」

琥珀が突然声をあげる。

「どうしました？」

「いや、何かコレが動いた気がして・・・」

胸ポケットから卵を取り出した。

それははじめと全然変わらないう見た目。そつと膝の上においてみる。

「生まれるんじゃないですか？」

「うーん。つとまた動いた。」

じつと覗き込む。

要は離れたところからチラッと見るだけである。その時、

パキン

と何かが割れる音と共に卵の中に白い生き物が見えた。

「うおっ。」

「生まれましたね。」

相変わらずあわてることもなく要が笑顔になる。  
そしてその殻の中にいる生き物を覗いて見る。

「えっ……」

琥珀の表情が固まる。

「なんでしたか？」

「あ、いや。俺の見間違いかもしれないけど、ど、ドラゴンが見えるんだけど……」

驚いたままの顔を要に向ける。

「やはりそうですか。」

と、これも驚きの発言をする要

しかしそのことに驚いている場合ではなかった。  
琥珀の膝の上で小さな白いドラゴンが鳴く。

『びびぢー』

鳴き声にまったく威嚇はない。

それでもどこからどう見てもドラゴンである。

「えええー。」

さすがの琥珀も大声を上げた。

その声を聞いて今まで屍と化していた空たちがのっそりと起き上がる。

「何何？どうしたの？」

まだ驚いたままの琥珀を全員が見る。

要だけが笑顔のまま膝の上のドラゴンを見ていた。

もう一度見る琥珀の視線を全員が追ってまた声をあげた。

『えええー。』

~~~~~

「ん、じゃあとりあえず名前付けてあげようよ。」

落ち着いたところで空の提案が出た。

生まれたばかりの白いドラゴンは今琥珀の胸ポケットに入っている。

大きさは卵のときよりも小さく、すんなりと収まっている。

眠そうに目をしばしばさせている。

「そつだな。やっぱり名前ないと不便だしな。」

「名前ねえ。」

琥珀が優しく指先で軽くなでる。

『びぎやー』

「んー、じゃあシロ。」

「えっ、何その犬みたいな名前。」

とすぐに空に否定された。
が、結局シロに決まった。

「と言う事でシロだ。」

『びぎやあ。』

そつと頭を撫でてやる。

ドラゴンと言っても蛇みたいによろしているわけではなく、
物語によくあるようなドラゴンの小さい版のような感じだ。

「まあとりあえず・・・寝るか。」

もう時間は1時前になりそうである。

「どつする？めんどくさいからここで寝るか？」

琥珀は確認のために全員に聞く。

「そうですね。時期も時期ですから僕はここでもかまいませんよ。」

と言う事で全員雑魚寝。

その日は結局全員2時を過ぎるまで寝ることはなかった。

EPISODE 3 - 11 dragon (後書き)

果てしなくグダりました。

とりあえずエピソード3はここまでにします。

次は学際ですが・・・まあ受験だったりなんだから少し更新が遅くなると思います。

その辺は許してくださいね。

ではでは

季節が流れて7月になった。

制服もすでに夏服になって1ヶ月が過ぎた。

忙しかった中間テストも無事終わり、今日からは学祭の準備期間に入る。

うちの学園は少し特殊で、近くの東高校と合同実施なのだ。

学園は広いが生徒が少ない、東高は生徒が多いが敷地が狭い、お互いの利害関係で成り立っていたりする。

大人の事情はさておき、学祭が9月実施なのに7月から準備期間とは少々早いかもしれないが、学園としてはあまり授業に影響が出ないようにとの配慮だそうだ。

「遅いな。」

H R 教室ではなく特別教室で東高の生徒を待つ。

しばらくは午前が魔法関係の授業で、午後からは東高と合同で普通の授業が行われる。ちなみに全校生徒は来られないので、1学年で3クラスの計9クラスのみが学園に来る

残りはそのまま高校に残って授業と準備をするらしい。

「どんな奴らが来るんだろうな。」

朝から必要以上に張り切っている明。

明ほどではないが落ち着かない様子の東条。

興味がなく、シロと遊んでいる琥珀の順に右から並んでいる。

いつもの教室よりも随分と広く、まだ東高の生徒が来ていないので閑散としている。

「相変わらずシロは琥珀にベッタリだね。」

東条が恐る恐るシロに手を差し出す。

その様子に気がついたシロはじっと見つめる。

そして次の瞬間、

かぶッ

東条の右手の中指が噛み付かれた。

「あ痛、やっぱダメかあ。」

噛まれた指をさすりながらガツカリする東条。

生まれた日から琥珀以外には容赦なく噛み付き、その度に琥珀は謝っている。

空と東条はどうしてもスキンシップを取りたいようで、めげずにたまに触ろうとする。

泉と要と明は諦めて見ることに徹している。

「悪いな、これでも頑張ってるんだけど。」

ポケットから机の上へ移動させる。

トテトテと歩きながらキョロキョロと周りを見ている。

「おっ、来たみたいだぜ。」

明が嬉しそうに指をさした。

特別教室は大学のような作りで、扇形で後ろにいくほど高くなっている。

琥珀たちは一番後ろの左端に座っている。

席は3人で1列、計20列ほど散らばっている。

「来たようなので授業始めるが、まあ初日と言うことなので自己紹介からやるか。」

数学の中年の男性教師が提案を出した。

その間にゾロゾロと入って来た生徒が適当に席につく。

前の1列には女子3人が座った。

学園の制服よりもかわいい感じのブレザーで、スカートも短めだった。

「かわいい制服だね。」

小声で東条が明に話し掛けていた。

明はキョロキョロと見渡している。

男はかなしい生き物だとつくづく思いながらも、琥珀はシロとじやれあっていた。

「　　です。」

前の席の自己紹介が終わる。

次に明と東条が自己紹介をしていた。

終わって琥珀が立ち上がって当たり障りの挨拶をしようと口を開いた。

「あーっ！！」

唐突に琥珀の声が妨げられる。

声のする方を見ると、前の席の真ん中に座っている生徒だった。

大声に一瞬静まり返る教室。

「あっ、えっと・・・すみません。」

女の子が謝って、琥珀が何もなかったように自己紹介をする。名前と特技、と言っても特に何ができるわけでもないけど。

あと胸ポケットにいるシロの紹介をして再び席に座った。

その後はつつがなく自己紹介は続いていった。教室に生徒は合わせて60人程いる。

学園生が25人で残りが東高の生徒である。

うちのクラスは特別問題がある生徒が集まっているが、それでも有数の魔法学園の中での話だ。普通の人からするとFクラスであっても立派なエリートだったりする。

東高の生徒も興味津々と言った様子で食い入るように見ている。

授業自体は50分なので、大体一周する頃には授業時間も終わりに近づいていた。

「よし、とりあえず一通り済んだな。まあそういうことだ、仲良く頑張ってくれ。」

切りよくチャイムがなり、担当教師が教室から出て行った。

ちなみに今日は6時間授業なので、あと1時間授業が残っている。

琥珀は大きく息を吸って座ったままで縮こまっていた体を目一杯のばす。

その時、前の席の3人組が一斉に琥珀の顔を覗き込む。

「ん？」

両手を上げたままの姿勢で琥珀は固まった。

いきなり見知らぬ3人の女の子にじっと見つめられて困ってしまった。

「……あの、えっと」

掛けるべき言葉を探してみたものの、見付からず結局戸惑いがそのまま出てしまった。

そんな様子をポケットからシロが覗いている。
同じように明と東条も見ていた。

『……』

6人の間に沈黙が訪れる。

一番始めに口を開いたのは真ん中に座っている女の子だった。

「あの……この間助けてくれましたよね？」

真つ直ぐ琥珀の顔を見ながら言う。

「あの時はありがとうございます。お礼も言いそびれちゃって。」
深々と頭を下げた女の子は、髪は肩ぐらいまでの長さで、黒よりも少し明るめの色をしている。

目は大きく、空とはまた違った可愛さをして、むしろ美人という方が似合っている。

「琥珀、お前いつの間に……」

いち早く反応したのは明だった。

そしてとてつもなく勘違いをしているであろう事は手にとるようわかる。

「えーっと・・・」

琥珀は言い淀む、それはもちろん明に対してでなく、目の前の美少女に対してである。

「覚えて、ないんですか・・・？」

すごく悲しそうな表情をする、それだけで琥珀としてはこの上ない罪悪感を抱かせる。何をしたのか自問自答してみるものの返事はなく、ただ申し訳なさが募るだけだった。

それを見て美少女がさらに言葉を続ける。

「5月の連休の最終日でした。」

その日はこの2人と遊びに行く為に待ち合わせ場所に向かっていたんです。

でも、その途中で何人かの男の人に無理矢理連れていかれたんですけど、それを助けてくれたんです。

覚えていませんか？」

少しずつ思い出されていく記憶と、その時に助けた人の顔を思い出す。

「ごめん、あの時急いでたからあまり顔をよく覚えてない。」

素直に謝る琥珀に少女は少し驚いてから、優しく笑みを零した。

それがあまりにも綺麗で、明は東条の隣で見惚れていたのに琥珀は気が付いた。琥珀自身もあまりの綺麗さに驚いた程だ、明のことは気にしない事にした。

「俺、何か変なこと言ったかな？」

突然笑い出したことに疑問を持った琥珀はそれを素直口に出した。

「あつ、いえ違いますよ。」

ただ、打算や下心がなくて純粹に助けしてくれたことがうれしくて
つい・・・。」

と、ごまかすように笑った彼女の顔も魅力的だったことは明を見ても一目瞭然だったことは言うまでもない。

~~~~~

「それじゃあ・・・。」

『かんぱーい!!』

紙コップにジュースを入れたものを教室の全員がかかげる。

放課後になって、予定していた歓迎会が行われている。まだ全然名前を覚えていない琥珀は隅の席に座ってシロと遊んでいた。

「何で端っこにいるんですか？」

琥珀に話し掛けてくる。

「ああ、神崎さんか。」

顔を上げて彼女を見た。

神崎双樹

たまたま危ないところを助けた時に出会った人  
明るく友達も多い

というのが琥珀の認識だった。

「他人行儀は嫌いです。

双樹って呼んでくださいよ。」

頬を膨らませて拗ねる彼女はさぞかわいらしいのだろう。

と思っっている辺り琥珀は彼女に、というか女に興味を持っていない。

「はあ。

ところでどうしたんですか？」

会話の流れを無理に変える琥珀に嫌な顔をせず双樹は答える。

「出し物を決めるから少し来てほしいって。

何するか楽しみですよね。」

弾ける笑顔とはこの事だろう。

コロコロと変化する表情を琥珀は見つめていた。

EPISODE 4 - 2

「あの・・・考え直したりと言うことは・・・」

琥珀が最後の希望にすがりつくように放つ一言に、

『それはない!!』

と教室中の反論を喰らうことになった。  
事の発端は10分程前になる。

「じゃあ何か案のある人。」

一応学園のことをよく知っている委員長が議長となって話は進められていた。

そしてそこで出された、

「やっぱり劇がいいと思います。」

東高の生徒の一人が手を挙げながら言う。

そこまではまだまだ普通だったので、琥珀はなんら文句はなかった。

「ならば、魔法使った劇だよな。」

違う生徒がさっきの意見に付け足す。

ここまでも文句はなかった。

「でもそれだと普通過ぎてつまらないよね。」

この一言が今になってしてみれば余計だったのだと琥珀の中に思  
い出される。

そして最も不必要な事を言ったのは、

「なら男女配役を入れ替えたら面白そうじゃない？」

よりもよって双樹だった。

明るい彼女はクラスの人気者ですぐにその案が承認されたことは  
説明するまでもない。

「それじゃあ具体的な劇の内容を決めましょうか。」

琥珀はあくまでも耳を貸す程度にしか聞いていなかった。

そして内容は決まり、肝心の配役へと移る。

内容は良くある話だった。さらわれた国の姫を助けるために、各  
国の国の国王が姫を助けに行く。

けれども途中に出る魔物や敵のために一人また一人とやられてい  
く……

とまあ最後を省いてもよいほど良くある話だ。

琥珀がぼんやりとしている間に配役はどんどん決められていく。

「なら国王は神崎さんね。」

姫を助け出す役、つまりはメインキャストに双樹が選ばれていた。  
まあ似合っているかもと琥珀は思いながら、大道具に立候補しよ  
うとする。

「あの一！一！」



双樹の突然あげた声に一瞬止まった琥珀、今思うとあれがいけないかったと琥珀は考え着いた。

そして自分を取り戻す前に双樹がとんでもないことを口にする。

「お姫様を冴原琥珀くんにやってほしいです。」

向き直って言う彼女の顔は本気で、琥珀は一瞬何と答えるべきかと悩んだ。

そうこうしている内に事は更に最悪な方向へと突き進む。

「面白そうだな。」

「そうだねー、見てみたいかも。」

明と東条だった。

この時ほど二人を恨んだことはない琥珀は、はっきりと断言できらるだろう。

そして連れてこられたのは同じ階にある空き教室。

今から行われるのはテストと称した余興、つまりは琥珀のお姫様姿は見るに堪えるのかを確認する作業

平たくいえば琥珀に女装させようということだった。

教室には双樹と東条、双樹の友達2人とクラスメイトと女子が数人、琥珀を取り囲んでいる。

一様に笑顔・・・というか楽しそうな顔をしている。

止める琥珀の言葉を聞かずに、唐突に詠唱されて琥珀の意識は刈り取られた。

~~~~~

「ん・・・あ、ね。」

意識を取り戻した琥珀を見つめる顔はみな呆然としている。そして考えるヒマもなく東条と双樹に腕を取られて教室まで引きずられていった。

その間も琥珀を見てはうなだれるクラスメイトに琥珀は止めるように言いつづけたが、ついにその願いも虚しく教室のドアを開けられた。

きっとその時の教室中の表情を琥珀が忘れる日が来るとは思えないだろう。

『・・・』

こういう沈黙は漫画とかそういう話の中だけのことだと思っていた琥珀は戸惑うばかりだった。

何秒かたった後にポツポツと誰かが何かを呟く声が聞こえはじめた。

主に男子生徒の声

「うっそ・・・」

とか

「いや、良く考えろよ。」

別人つてこともありえるだろ。」

「ちょっと待て！！明！！何で鼻血出してんだ。」

琥珀に言われて初めて気が付いた明は咄嗟に背を向けて鼻に手を

持っていく。

そして手についた血を見て慌てて袖で拭き取っていた。

「どうしたんだ？」

「どうしたって・・・いや、オマエその格好・・・」

明に言われて自信の格好を見た琥珀は・・・

~~~~~

「人として大事なものを無くした気がする・・・」

あれからすぐに着替えて顔を洗った琥珀は教室の隅にいた。予想を反して琥珀の女装には人気が出ていた。

「私よりかわいかったよ。」

意地悪そうな顔で東条が琥珀の前の席に座った。

「・・・うれしくない。」

あれから琥珀の機嫌は目に見えて悪くなった。

結局役は琥珀に決まり、相手役は双樹に決まった。

そろそろ歓迎会もお開きになるだろうと、琥珀は帰る準備を始める。

「まあまあ、そんなに怒らないですよ。」

なだめるつもりならそのニヤニヤした笑いをやめてくれ、と思いつながら琥珀は東条を無視する。

そんなことを気にもしない東条も帰る準備をし終わると明と3人で教室を出た。

いつものように3人校門で空たちを待っていると、そこに双樹とその友達を通り掛かった。

「（確か、チカとミチルだったかな。）」

曖昧な記憶を改めて思い返して、大量の情報の中から2人の名前を拾い上げる。

チカと思われる子の特徴は、長い髪を後ろで1つくりにしていて、いわゆるポニーテールがポイントだ。

一方のミチルの方は、下手をすると小学生と間違われるほどの身長の高さと、あどけない顔立ち。

「あれ？どうしたんですか？」先に教室を出た琥珀達が校門で待っている姿を見た双樹が3人に声をかけた。

「友達待ってるんだよー。」

答えたのは東条。

と、そこへ空、泉、要の3人がやってきた。

「ごめんごめん。っとそつちの人は？」

人懐っこい空は双樹の姿を見てすぐに尋ねてきた。

「あつ、私は東高の神崎双樹です。」

それと、チカちゃんとミチルちゃんです。」

2人の紹介も双樹が済ませてしまつて、名前を呼ばれた後に2人は頭を下げていた。

チカのポニーテールがぴょんと跳ねた後に空達も順に自己紹介をしていた。

「それで、何で琥珀は不機嫌なの？」

それに明くんも鼻にティッシュなんか詰めて喧嘩でもしたの？」

「……」

「いや俺のはその……なんて言うか……」

「ぶっ……くっくっ……」

必死で笑いを堪える東条

気まずそうに笑みを浮かべる双樹、チカ、ミチルの3人

そして再び詰めたティッシュを赤く染める明

不機嫌に拍車がかかる琥珀

「えーっと……」

さすがに聞いた空も戸惑うほどにみんなの様子はおかしかった。それが判明したのは双樹たちもいれて琥珀の家に着いたあとだった。

「何で俺の家？」

「気にするなよ。」

何か最近ずつとそうだったからよお。」

慣れたものでみんなぞろぞろと入っていく。

それでも常識的な要と泉は、おじゃましますと一言かけて入って行った。

「？、神崎さんたちもどうぞ。」

玄関で止まっていた双樹に琥珀が声をかける。

何となく新鮮な反応だな、と思いながら靴を脱いで家にあがった。

~~~~~

「双樹、チャンスだよ！！」

私以上に気合いの入っているチカちゃんと、よく見るとミチルちゃんも何となく目が輝いている。

ミチルちゃんはあんまり感情出さないからよくわからないけど。

「ち、チャンスって言うても……」

「何言ってるのよ。」

琥珀くんのこと気になってるんでしょ？」

うつ、やっぱりチカちゃんは鋭いなあ。

ってことはミチルちゃんも気付いてるんだよね。

「それは、そう、だけど……」

「私は空さんも琥珀さんのこと好きなんじゃないかなって思います。」

「

「やっぱりミチルもそう思う？」

ほら、双樹も頑張らないと取られちゃうよ？」

それは やだな・・・

「でもでも、琥珀くんにもう彼女がいるかも・・・」

『それはない。』

私が言い切る前に2人がきっぱりと言い張る。
ちよつと琥珀くんかわいそうだな。

「えっ？どうして？」

「そんなの見てればわかるよー。」

これでもチカちゃんの勘は割とよく当たる。
それに私よりもいっぱい恋をしてるみたいだし。

「ミチルちゃんもそう思う？」

「ん、おそらくいない。」

「よし。」

じゃあその辺の事も今日しっかり調べちゃおう。」

と、当の本人をそっこのけでチカちゃんとミチルちゃんが盛り上がっている。

ああ、どうなっちゃうんだろ私・・・

EPISODE 4 - 2 (後書き)

誤字脱字の報告をお願いします。

「ねえ、やっぱり琥珀くんも魔法使えるんだよね？」

「って、私何普通のこと聞いてんの!？」

魔法学園の生徒だから当たり前だよー

何か話さないといけないって思ったなら何も思い付かなくてつい・

「空とか要とか泉さん程凄い訳じゃないけど、俺も一応学園の生徒だからね。」

へえー、やっぱり琥珀くんも凄い魔法使いさんなんだなあ。

いいなあ、私も魔法使えたら一緒に学校通えたのになあ。

「何言ってるんだよ琥珀。」

「この中じゃ一番強いんじゃないの？」

確か明くんだったかな？

活発そうな琥珀くんとは違った感じのカッコイイ人。

あともう一人の要くんは優しそうな感じがするなあ。

「そうですよ。」

「僕も負けちゃいましたしね。」

えっ!？」

琥珀くん要くんに勝っちゃったの!？」

「でもでも、要くんってSクラスだよな？」

チカちゃんが思わず要くんに聞いた。

「はい。」

僕と空さんと泉さんはSクラスです。」

やっぱり空さんって凄いんだ・・・

何だか魔法使えて、それに成績も良いなんて憧れちゃうな。

でも、何で琥珀くんはSクラスじゃないんだろ。

要くんに勝てるぐらい凄いのに。

「やっぱり魔法いいなあ・・・」

「双樹ちゃんも頑張ったら使えるかもよ？」

私の咳きに返事をしてくれたのは美代ちゃんだ。

「でも私、適性ないって・・・」

私は昔、魔法の適性検査で結果が出ている。

その結果を踏まえて進学などが決まってくるわけである。

「確かに適性とかは関係あるんだけど

」

美代ちゃんが言葉を詰まらせたのを見て、今度は要さんが続ける。

「あくまで適性とは向き不向きを調べるためのものです。」

「じゃあじゃあ、私たちにも使えたりするのかな？」

要くんの言葉を聞いたチカちゃんが身を乗り出して尋ねる。

きつとチカちゃんがしなかつたら私がしてたかも。

「それはわかりませんが、可能としては考えられますね。」

「そもそも魔法って何なんですか？」

隣で聞いていたミチルちゃんが今度は尋ねた。

「そついやあ俺もあんまり考えたことねえなあ。」

「私もー。」

明くんと美代ちゃんも話にのってくる。

正直、魔法が使えない私にとってかなり興味がある。

「なら簡単に説明しますね。」

まず魔法を使うのに何が必要かわかりますか？」

「それは魔力だよね。」

私が要くんに答える。

「じゃあ東条さん、魔力とは何ですか？」

少し難しい質問をする。

「えとー、なんだっけ？」

「そうですね、精神エネルギーと呼ばれてはいますが詳しくはまだわかっていません。」

そして魔法が使えるかどうかは、この魔力を蓄積できるかどうか
と云うことに関係しています。」

「どういうことですか？」

ミチルちゃんが要くんに問い掛ける。

私は早くも話がわからなくなりつつある。

「魔力は誰の体でも精製されているんです。

ただ、魔法遣いと呼ばれる人の体は少々違いがあるんです。」

「ファクターと呼ばれる因子」

琥珀くんが話しはじめた。

何かを思い出すように。

「魔法遣いの体にはファクターと言う因子が存在する。

この因子の役割は発生した魔力を体に蓄積することができる。

逆にこの因子がなければ精製された魔力は体に蓄積されずに霧散、
つまり蒸発する。」

まあ解りやすく言えば蓋が有るか無いかということだ。」

うわあ、琥珀くんの説明わかりやすいなあ。

あれ？でもそれじゃあ

「なら適性なしと言われた人にはその因子はないんじゃないですか
？」

私が考えつくより先にミチルちゃんが口にした。

「適性検査は向き不向きを調べると言いましたよね？」

つまりは向いてはいないが、因子はあるかもしれないんです。

元々因子はみな多少なりとも保持しています。

ただその量には個人差があつて、多い人は向いているというだけです。」

要くんが最後まで丁寧に言葉を繋いだ。

もしかしたら私にも使える魔法つてあるのかも！！

なんかそう考えただけでもテンションあがってきたかも。

「ただあまりに少ないと魔法が発動しないし、下手をすると倒れちゃうかもしれないけどね。」

えー！？

要くんちらつと怖いこと言つてるよ！？

「ある程度練習すれば元素を操ることぐらいはできると思いますが……」

「要くん、あんまり煽るようなこと言つたらダメじゃないの？」

空ちゃんが要をたしなめた。

でも、すでに私の中では魔法が使えるかもということとで頭がいっぱいだった。

「魔法使いすぎちゃった時つてどうなるの？」

チカちゃんがさっきの要くんの言ったことに反応した。

もしかして使い過ぎたら死んじゃうとか……？
なら怖いなあ。

「魔法の過剰行使は・・・疲れて気絶しちゃいますね。」

もしかしたら死んじゃうとか思ってた私は何なの!?

「ですがあまりムリをすると本当に体を壊してしまいますよ?」

話が一段落して、目の前にある紅茶を一口飲むと、少し冷たくなつた液体が口の中を潤していく。

「ところで琥珀くんと遊んでるあの小さい動物ってやっぱりドラゴンなの?」

チカちゃんがシロと遊ぶ琥珀くんを目を向ける。

手の平サイズのドラゴンなんて聞いたこと無いよ。

でも白くてかわいいなあ。

さつき触ろうとしたら噛まれちゃったけど。

「それとも使い魔さんとかなの?」

私もチカちゃんの話の流れに乗る。

ドラゴンってもっと怖いもの想像してたのに、実際見てみると琥珀君のポケットの中に入ってるようなかわいさだもん、違う意味でびっくりしちゃったよ。

「うーん、どうだろ。」

琥珀さんはシロさんと契約したんですか?」

少し離れたところで遊んでいた琥珀くんに要くんが声をかけた。

琥珀くんってもつと寡黙なイメージだったけど、シロちゃんと遊んでる時の顔かわいいな・・・

なんてこと言ったら怒られちゃうかな？

「いや、してないけど。」

「やっぱした方がいいのか？」

「そうですね、ドラゴンといえども魔法生物ですからね。」

魔力の供給を受けないと生きていけないんですよ。

その点を考えるやはり契約をして安定的に供給をする方がよいのではないかと。」

琥珀くんと要くんの会話は私にはよくわからなかった。

契約とか魔力の供給とか。

「んー、ならちようどいいし今からやるか。」

「そうですね、神崎さんたちに見てもらおうという意味ではいいかも
しれませんね。」

えっ？えっ？

今から契約っていうのが見れるの！？

それを聞いてチカちゃんもミチルちゃんも興味津々だ。

そして琥珀さんはごそごそと何やら準備を始める。

部屋にある紙とか軽いものを片付けていく。

「よし。」

なら始めるから少し下がってて。」

部屋の中の開けた場所にシロちゃんを立たせ、その正面に琥珀くんが膝立ちになる。

それから右手の手の平を天井に向け、そのうえにグレーのビー玉の様なものをそっと乗せる。

琥珀くんが静かに目を閉じた。
空気がピリツとした気がする。

「盟約を交わし、我と契りを交わさん」

そつと琥珀くんの口から優しく言葉が紡ぎだされる。

それがなにを示しているのかは私には直感でしかわからない。

手の平の玉が一瞬だけ輝く、そして琥珀くんとシロちゃんを囲むように線が空間を走った。

やがてその線は円を描き、さらに円の中に不思議な幾何学模様を作り出す。

不思議と私は安心できた。

「シロ。」

円の中にいる琥珀くんがシロちゃんを呼ぶ。

そして琥珀くんは左手を伸ばしてそつとシロちゃんに触れると、弾けるように2人を囲んでいた魔法陣が消え去った。

「つと、これで終わりだ。」

「すっごーい！ー！」

「すっごいすっごい！ー！」

私とチカちゃんが一齐に声を出す。

今日の前でファンタジーの世界の中だけに起こるような現象を見て私の気持ちは押さえられなかった。

魔法かぁ、私も使えたらいいのになぁ・・・


~~~~~

「マスター。」

碧眼の女が傍らに座っている男に口を開く。

長く延びたブロンドの髪は暗い部屋にわずかに窓から差し込む光に反射してきらめく。

ゆったりと椅子に腰かけている男はその様子を見ることもなく言葉を返す。

「首尾の方はどうなっている。」

「はい、我らの同胞が現在準備に取り掛かっています。」

ですが、やはり日本の学園は中々難しいようです。手こずっています。今しばらくお待ちいただくことになるかと。」

「そうか。」

期待しているぞ。」

短いやり取りを終え、再び女が広い部屋から出ていく。

中に残された男はただ黙って椅子に座っていた。

目を閉じ、何かを思い続けて。

学園祭の準備が始まって2週間が過ぎた。

私たち東高の生徒は今日から夏休みに入る。

でも、学園の琥珀くん達はまだ8月に入るまでは今までと同じように午前中は授業で、午後からは学園祭の準備か、休みのどちらかになっているそうだ。

ちなみに今日は準備はなしで、私とチカちゃんミチルちゃんと買い物に来ている。

少し前に開店したショッピングモールは、元々は商店街だった場所をきれいに改装して、若者向けになっていた。

「へえ、綺麗になったね。」

チカちゃんは一目見てすぐに気に入っていた。

品ぞろえも中々よく、かわいい服も揃っている。

これからは夏ということもあり、水着が全面的に強調されている。

「水着か・・・みんな海とか行きたいな。」

私が店先のショーケースに飾られているかわいい水着を見ながらつぶやく。

「ならみんな誘って行けばいい。」

それを聞いたミチルちゃんがいつものように静かな声で言うと、チカちゃんもそれには賛成のようで、

「それいい!!」

「じゃあさつそくみんなに連絡だー!!」

チカちゃんはカバンの中から携帯端末を見つけると、すぐに電話帳を開く。

何度かボタン操作をして、端末を顔の前に持っていく。

しばらく呼び出し音が流れた後に、一人の女の子と映像が空中に描き出された。

「あつ、美代ちゃん？」

「はいはい、どうしたのチカちゃん。」

「実は今シヨッピングモールに来てて、みんなで海に行きたいなって話をしてたんだ。」

「おー、それいいね。」

「で、私はほかのメンバーに声をかければいいわけだね？」

「さつすが、お願いできるかな？」

「もちろん、今シヨッピングモールだっけ？」

「ちょうど授業も終わったことだし今からみんなで行くよ。」

「私も海に行くなら水着欲しいしね。」

「うん、わかった。」

「ならまた近くに来た時に呼び出してね。」

「了解しました。」

「では。」

あつという間に海に行くことが決定した。  
っていうか、みんなの予定とか聞かなくてもよかったのかな？

「すこし時間かかりそうだから私たちはお昼にしようか。」

近くにあるファミレスを指さしながらチカちゃんが私とミチルちゃん顔を見た。

そして3人で入口をくぐって中に入っていく。

ウエイトレスさんに禁煙の席に案内してもらって、席に座る。

独特の少し硬いソファに、木のテーブル、その上には立体ホログラムの画面が映し出されていて、最近流行りの歌手のPVが流れている。

3人ともすぐにメニューが決まって、出来上がるまでの間の時間を話しながら待っていると、

「さて、それでは第一回双樹、琥珀くんらぶらぶカップル作戦会議を始めたいと思います。」

唐突に始まったわけのわからない会議に私はあせって飲んでいた水をチカちゃんに吹きかけてしまった。

それは見事にもう・・・

「な、な、なに言ってるの!？」

わかりやすいぐらい動揺してる私に、2人は意地の悪そうな顔でいやミチルちゃんはいつもと変わらないかも、とりあえずそんな顔で私を見てくる。

そりゃ私だって琥珀くん・・・その、少しぐらい・・・

「へへへっ、やっぱり双樹は琥珀くんにメロメロなんだね？」

「ち、チ力ちゃん!!」

「まあまあチ力の古臭い言い方はともかく、それじゃあ作戦会議を始めるとうしましよう。」

ミチルちゃんの一声で、私の意志を無視した形で開始された。

~~~~~

「うわあ、これかわいい!!」

作戦会議という名の私を弄る時間が過ぎ、琥珀くんたちがやってきた。

いまはみんなでショッピングモールの中で水着を見ていた。琥珀くんと明くんは少し疲れた様子で、要くんは相変わらず爽やかな笑顔で私たちの買い物に付き合ってくれている。

「ごめんね、大丈夫?」

離れたところにいた琥珀くんのところに行って声をかける。

「ああ、大丈夫。」

神崎さんはもう決めた?」

「あの、えっと。」

「?」

「こっちとこっち、どっちがいいかな?」

単純にどっちも可愛くて迷っていたということもあるけど、本音を言っちゃえば琥珀くんの好みの水着を着たかった。

両手にある水着を少し見たあとに、

「どっちも似合うと思うけど、こっちな。」

と言って、右手に持っている方を指差した。

白を基調としたもので、左の胸元に少しデザインが施されたものだ。

ビキニを選ぶ辺り琥珀くんはやっぱり男の子なのかな？と思いいながらも素直に選んでくれたものを購入した。

「じゃあ行く日は、今週の日曜日だからね。」

帰り際に美代ちゃんが私たち以外の5人に、日時と集合時間を告げた。

伝え終わると今日はモールで解散となった。

私はもう少し見て回ろうとみんなに声をかけてから再び店の並ぶ道を歩きだした。

~~~~~

）

ポケットにある端末が呼び出し音を奏でる。

特にいじることもなく、初期設定のままの音はやけに質素に感じられるのは気のせいかもしれない。

そして、そう感じさせる一因ともなっているのは呼んでいる相手のせいでもあるに違いない。

ディスプレイに表示された名前を見て思わずため息が出た。

こんな時に限って呼び出しがかかる。

そう思っているにも、出ないわけにもいかず、琥珀は渋々通話ボタンを押す。

「はい。」

榊は連絡の際、決して顔を表さない。

音声通話のみで、要件をつけてすぐに切るという徹底した秘密主義だ。

おそらくそれはお仕事上の防衛策なのだろう。

「ああ、仕事だよ。」

「内容は？」

そのくせ口調はフランクである。

「うん。」

今回はちよつと厄介で、誘拐立て籠もりなんだ。」

嫌な響きだと琥珀は再びため息を零す。

それは恐らく榊にも聞こえただろうが構わず続ける。

「最近リニューアルしたショッピングモールなんだ。」

「また何てタイミングで。」

でも立て籠もりなら警察が動くべきでしょ？」

榊の言葉を聞いて、琥珀はさきほどまでいたシヨツピングモールを思い出す。

あと少し帰るのが遅くなっていたら誰かが巻き込まれていたかもしれない。

「まあそうなんだけど、今回は少し事情があって警察の特殊部隊が突入できないんだよ。」

「事情、ですか。」

特殊部隊が突入出来ないようなところに行かされるのか、と頭を抱えなくなった琥珀にさらに榊が付け加える。

「正確には特殊部隊がそちらに行くことが出来ないんだ。」

「どづいづいことですか？」

普通ならばそんなことは有り得ない。

常時3部隊を待機させているのだから。

「同時に10ヶ所だ。」

君に行ってもらおうモール以外にも、半径10キロ以内でだ。」

「!？」

そこまでの組織力に心当たりがない。

おそらくは近隣諸国、主に朝鮮半島か中華あたりのシンジケート、マフィアだろうと瞬時に思考を巡らせる。



「そこで、警察と合同で同時突入を敢行する。  
ただ安心してくれ、君の素性については極秘扱いだから。  
それにすでに現場は封鎖してある。」

それから琥珀は具体的な場所と作戦内容を聞いて携帯端末をポケットにしまい込んだ。

空たちは先を歩いている。

そこに歩いていき、急用をつけて琥珀は急いでショッピングモールの方へと戻って行った。

~~~~~

「どうしたんだろ。」

みんなと別れてからしばらくモールをぶらぶらと歩いていたところ、もう帰ろうかと引き返してきた一角に大勢の人が集まっていた。口々にみんな何か話している。

「立てこもり。」

「中にまだ客が。」

「警察。」

そんな普段聞かないような単語が飛び交っている。
ただその現場はここからでは見えない。

どうも封鎖されているらしく、一般人はここから先へは行けない。
ただ私がいっても事件が解決するわけでもないし、とりあえず私も事件に巻き込まれないように早く帰ることにした。

少し遠回りだが、手前にあった細い路地を迂回することにした。

「っと、ここか。」

聞きなれた声、私を助けてくれた人の声が聞こえた。

ぶつきらぼつそうだけど、本当はやさしい人。

その声に呼ばれるかのように足は勝手に声の聞こえたほうに向かっていった。

EPISODE 4 - 5

PM 19:45

琥珀はショッピングモールの現場の少し離れたところに待機していた。

指定された時間はもうそろそろのはずだ。

アクセサリとして装飾され、ひもを通して首から下げている魔法玉を取り出す。

学園ではもらった魔法玉が発現したらこうやってアクセサリの一部にするのが流行っているらしい。

琥珀の場合は空たちに半ば強引に引きずられるようにして店先に連れて行かれたのだが。

とは言え、こんな市街地でいきなり発現させて日本刀を持つのはさすがによろしくないのだからまだ手に持った状態だ。

ちなみに胸ポケットの中にはシロがスヤスヤと眠っている。

「・・・」

人の気配に振り向いた先に琥珀には驚く光景が見えた。

「要？お前帰ったんじゃないのだったのか？」

桜井要が立っていた。

いつもと同じように笑顔のまま。

「ええ、ですが呼び出されてしまって。」

「呼び出された？」

「はい。」

改めまして、特務室所属諜報科、桜井要です。」

「……はあ、お前諜報科だったのか。」

「あんまり驚きませんね。」

突然告げられた事実にも特に琥珀は驚く様子もなく要に接する。

「身近な人間に1人ぐらいはいると思っていたからな。

まあそのことは後でもいい。

もう時間もあんまりない、ブリーフィングするぞ。」

普段とは違う引き締まった様子と口調で琥珀が話を先に進める。

要もそれに従い、すぐさま本題に入る。

「ターゲットがいるのが、ここです。」

要の持つ携帯端末にこのあたりの詳細な地図が映し出される。

ちようどそこは新規参入した女性向けの店だった。

その次に店内の詳細な見取り図が映し出された。

「先ほど調べてきましたが、犯人の人数は5人。

人質として中に10人の人がいます。

配置としては、入口に2人、裏口に2人、リーダーらしき人間は人質の近くにいます。」

見取り図からすると中の構造は単純で、正方形に近い店舗の道路側に正面入り口、その逆に裏口がある。

裏口の近くにスタッフの休憩室やら、更衣室がある。
またブティックらしく中には試着室もあり隠れるところはありそ
うだ。

半径100メートルは危険領域として一般人及び警察官の立ち入
りはしていないそうだ。

「よくこんなに詳しく分つたな。」

「僕の専門は風系統ですから、こんな諜報活動は得意なんですよ。」

なんとなく寒気を感じた琥珀はそれ以上何も聞かず、作戦開始時
刻を待っていた。

~~~~~

P M 19:50

「なんや、5人かいな。」

あまり聞くことのない関西弁がやけに耳に付く。

琥珀のいるショッピングモールから少し離れたところにファース  
トフードの店がある。

そのファーストフード店から少しばかり離れたところに1人の青  
年が立っていた。

ガラス張りの店内は丸見え、中には4人しか見えないがおそらく  
は5人だろうと西野哲平は予想した。

「まったく、こんなクソ忙しいときに・・・いい迷惑やで。」

生徒会長という自分の立場と、裏稼業としての仕事。

特に今は学際の準備期間も重なって特に忙しい時期である。  
自らの感情を心のうちにとどめようという気もなく誰もいない空  
間に向かってしゃべる。

哲平はツーマンセルで仕事をすることはほとんどない。  
またそのような繊細な仕事を任せられるわけではないのも事実だ。  
専門は殲滅戦、いわゆる壊し屋だ。

「あと10分か、暇やの。」

哲平はその場に腰をおろして、再び店内を見回した。  
その顔はやる気に満ちているとはとても言い難い顔をしていた。

~~~~~

P M 19:55

哲平のいるファーストフード店とは反対方向に信用金庫がある。
ただ本来ならばすでに営業時間は終わっているはずのそこはまだ
煌々と蛍光灯に照らされている。

しかし、ただの銀行強盗ではない。
同時立てこもり犯、犯人たちは同時に10か所にも及ぶ場所に立
てこもっていると連絡を受けたのはつい20分前のことだ。

急いで指定の場所に来るとそこには見慣れた人物がいた。
ただその人物はただ一緒に仕事をする、と言う繋がりのもとの
見慣れた人物だ。

M 20:00
さっそくその人物から詳しく説明を聞いたところ、作戦決行はP
1分以内に犯人を制圧するというものだった。

「あ、ありがとうございます。」

泉あきらはいつもの様にオドオドと礼を告げ、問題の立てこもり現場を見る。

ただこの場合の見るとは、ただ眺めるだけではない。

魔力の流れを肌で感じ、そして店内を魔法で覗き込む。

原理は、熱の屈折を用いた即席の望遠鏡を空气中に作り出す、説明は簡単だが微細な魔力のコントロールを必要とする技術だ。

店内には報告通り5人確認することができた。

「では気をつけて。」

それだけを言うと、あきらの傍らにいた男がその場を離れた。

そのことを感じてあきらは自らの意識のすべてを手繰り寄せように束ね始めた。

~~~~~

PM 19:58

「じゃあ後のことは任せた。」

琥珀くんはそれだけを要くんに伝えると足早に去って行った。

その場に残されたのは物陰に隠れた私と、要くんだけになった。

私としては琥珀くんに付いて行きたかったが、要くんがいる以上出ていくわけにはいかなかった。

「さて、神崎さん。」

突然名前を呼ばれた。

焦って前屈みだった私の体が一気に伸びる。

それはもうバネ仕掛けの人形の如く・・・  
とか考えている暇はなかった。

「出てきてくれませんか？  
さすがに誰もいないのに話していると思われるのは辛いものがある  
ので。」

そこまで言われてはもう私の選択肢は、出て行って謝る、しか残  
っていないかった。

恐る恐る要くんの顔を覗いた。  
うん、いつも通り笑顔だ。

「ご、ごめんなさい！！」

あの私、その、立ち聞きするつもりとかなくて・・・その。」

段々と小さくなる私の声に、要くんは怒ることなく聞いて、そし  
て丁寧に言葉を返した。

「いえ、怒るつもりはありませんよ。  
ただ、今見たことと聞いたことを誰にも言わないで下さいね。  
さて、そろそろですね。」

要くんは手元の携帯端末を見る。

PM 20:00

デジタル表示の時計が入れ替わった瞬間に辺りに轟音、とまでは  
いかないものの大きな音が鳴り響いた。

~~~~~


PM 20:00

デジタル時計が時間を告げる。

瞬間的に膨れ上がらせた魔力を一気に収束までもっていく。魔力量で勝てない琥珀が唯一長所としている部分だ。

「すべてを包み、あらゆるものを隠せ、ウォーターブラインド」

火と水の混成魔法。

効果としては霧を発生させ相手の視界を奪うものだが、恐らくこの相手には効果は薄いだらう。

だが琥珀としては一瞬だけ隙が出来ればよかった。

「我が思いし者をこの場へ誘いざなへ、シテーション！」

琥珀が1つめの魔法を顕現させ、すぐに次の魔法を顕現させた。

そして次に琥珀自信が建物の中に入って行った。

5分もしないうちに再び要の所へと戻ってきていた。

「人質も無事ですな。」

「ミッションコンプリートです、お疲れ様でした。」

要の声で無事に仕事を終えたことを確認してから、琥珀は家へと歩いて行った。

琥珀が使った2つ目の魔法、ある地点にいるAというモノを術者の近くの空間へと転移させるというものである。

いわゆる召喚魔法なわけだが、人物特定が難しくあまり使う人はいない。

残された要は、事件をいそいそと始めた。

~~~~~

「琥珀くん……」

あのあとすぐに私は要くんに家に帰るようにと言われた。

けどそれについて悩んでいるわけではもちろんない。

特務室、諜報科、桜井要、冴原琥珀

私の知らないことだらけだった。

「……」

モールを出てからの足どりはいつにも増して重かった。

手には琥珀くんが選んでくれた水着が入っている。

もしかしたらさつき見たことは全部嘘だったんじゃないかか思えてくる。でも本当は今見た琥珀くんたちが本物で、私たちが知ってる琥珀くんたちが偽物だったのかな。その日の私は夜遅くまで寝付けなかった。

悩んでもお腹は空くし、眠たくもなる、それを体感した数日間だったような気がする。

いつかの立て籠もり事件は同じ日に計10件にも及んでいた。

そのどれもが警察の魔法対策班による突入にやって解決されたと報道されたのを私はテレビで見ていた。

琥珀くんたちが解決したはずなのに、そのことは一切公表されておらず、遂に最後まで私たち一般人に知らされることはなかった。

「うーみだー!!!」

隣のチカちゃんのはしゃぎ回る声が聞こえる。

今日はこの間決めていたみんなで海に来る予定だった日だ。

けど、正直私はそんな気分ではなかったのは言うまでもない。

良い意味で言えば琥珀くんということで頭が一杯、悪く言えば不安だった。

家から電車で1時間ほど行った所にある有名ではないけど、ミチルちゃんオススメの海水浴場。

人はシーズン中ということもありやっぱり多いけど、それでもテレビで見るとような砂浜が埋まるほどはない絶好のポイントだ。

「じゃあ先に男子は着替えてきてね。」

美代ちゃん的一声で、要くん、明くん、琥珀くんが近くの簡易更衣室に向かって行き、しばらく待つと中から水着姿の3人があらわれた。

「双樹、顔赤いよ。」

「ふえっ!？」

チカちゃんの声でやっと意識が戻ってきた。

正直琥珀くんに見とれてたよお。

無駄のない体に程よく筋肉がついてて・・・ああ、私変態さんみたいだ。

「次は私たちだよ。」

私は美代ちゃんに引きずられる様にして更衣室まで連れていかれ、着替えることとなった。

「（あーあ、もつと自信持てる体型だったらよかったのにな。）」

チカちゃんと比べると余りにも・・・なんと言うか・・・ひ、貧相と言うか・・・。

着替えながら落ち込む私を置いて、早くも私以外の女性陣は水着に着替え終わっていた。

「ねえチカちゃん。」

「どした、双樹？」

「泣いても良いかな。」

美代ちゃんとチカちゃんと空ちゃんは、私と違って女っぽいし、あきらちゃんとミチルちゃんはかわいいし・・・

「大丈夫だ双樹、そういうのがタイプかも知れないよ。」

こうしてみんなそろっての海水浴が始まった。  
ちなみに言っておくと、男性陣の反応は以下の通りだった。

「うおおおお。」

と意味不明な叫び声をあげた明くん。

「みなさん素敵ですね。」

と浜辺の他の女性の心までも射止めた要くん。

「・・・」

特にリアクションもなかった琥珀くんだった。

これには美代ちゃんもチカちゃんも猛講義をしていた。

~~~~~

『いただきまーす!』

海と言えば海の家

もちろん言い出しっぺは明くん。

みんなで近くの海の家で昼食をとることになったわけですよ。

着いて着替えるなりみんなおおはしゃぎで、お腹の空き具合はいつもより3割り増しなぐらいだ。

ただ、琥珀くんだけは荷物の近くでゴロゴロしてたけど。

「やっぱり海の家と言えば焼きそばだよね。」

チカちゃんが口いっぱいに麺を頬張っている。

それはさすがに女の子として如何なものなんでしょうか。

みんな思い思いのメニューを笑顔で食べている。
その中でも、どうしても私の視線は琥珀くんに向かってしまう。

「神崎さん、どうかした？」

あまりに見すぎていたのか、琥珀くに気付かれてしまった。

「えっ!？」

いや、何でもないです。ハイ。」

言い終わってから自分のいかにも動揺していた発言が恥ずかしくなった。

俯いた私をチカちゃんとミチルちゃんだけが面白そうに笑っていた。

本当は聞きたいよ、琥珀くんのことを、もっと沢山、色んなこと。

~~~~~

「なんか最近いろいろと流されてる気がするなあ。」

海岸で琥珀は一人スポーツドリンクを飲みながらみんなが遊んでいる様子を見ていた。

ちなみに明は少し離れたところで東条と空によって砂に埋められていたりする。

意外なことに要は城塞作りに没頭していた。

ほかのメンバーは海の中でビーチバレーをしたりしていた。

「琥珀くんはみんなと遊ばないんですか？」

不意に横から声を掛けてきたのは少し前まで海の中にいたはずの神崎双樹だ。

琥珀の中での神崎双樹という少女は明るくて表情が豊かだ。

どこことなく見ていて心配になるタイプの人間である。

たとえば将来変な詐欺師に引っかけかりそうな人ナンバーワンだったりする。

「いや、俺はここで荷物見てるから。」

正直言つと遊ぶのは勘弁してほしいかった。

この間の事件からバイトの時間が増えて睡眠時間が減っているのだ。

事件らしい事件は今のところ起きてはいないが、それでもあれだけのことが起きれば警戒レベルは上げざるを得ない。

「なら私もいてもいいですか？」

「わざわざ聞かなくてもいいのに。」

ニッコリ笑って双樹は琥珀の隣に腰を下ろした。

普段と違って水着姿の双樹に琥珀は少しばかりドキドキしていた。

・・・ということはなかった。

それどころではないぐらいに疲れていたし、少しでも時間があれば朝も寝ていたのだ。

双樹はパラソルの下のクーラーボックスを開けた。

氷を敷き詰めておいたクーラーボックスからはひんやりと気持ちのいい冷気が漂う。

「うん、コレかな。」

中からジューズを取り出してふたを開けた。  
昔は石油を使ったペットボトルだったそうだが、今は石油を使わずに化学繊維を用いた生分解性ペットボトルだ。  
つまりはその辺にポイ捨てしたとしても数カ月後には土に戻るすぐれものだ。

「ねえ、聞いていい？」

「うん？」

海をぼんやり見ながらウトウトしていた琥珀に声が掛けられた。  
もちろんその主は双樹だ。  
双樹は海ではしゃぐ友達を見ながら言葉を続ける。

「琥珀くんはどうしてあんなことしてるの？」

あんなこと・・・

普段なら何の事だかわからないような単語だが、今の二人にはその言葉が何を指しているものなのかは理解している。  
つまりは先日的事件に琥珀と要がかかわっていたこと。

「・・・」

どう答えるか悩んでいた。

正直に言おうか、それとも適当にごまかそうか  
考えがまとまらないうちに再び双樹が口を開く。

「私ね、最初に会ったときから琥珀くんは違うなって思ってたの。  
それは単に助けてくれたからかもしかかもしれないけど、それでもやっぱり



りそう思ったの。」

「……」

「学際の準備で一緒に授業受けたりしてて、琥珀くんも普通の人なんだって思えるようになったの。」

でも、

その一言で双樹が言わんとすることがわかった。

「……」

最後まで何も言わない琥珀に双樹はまた笑顔を見せた。

「それでも良いの。」

でもね、一つだけ約束してほしいの。」

「約束？」

「うん。」

琥珀くんはもっと自分を大事にして欲しいの。」

「……ああ。」

そんなあいまいな返事しかできなかった。

それでも双樹は満足そうにみんなのところへ走って行った。何事もなかったように。

残された琥珀は、さっきの双樹の言葉を反芻していた。

もっと自分を大事にして欲しいの。

「・・・もつと、大事に、か。」

琥珀の消え入りそうな声は波の音に消されて、誰かの耳に入ることはなかったけれど、確かにその響きには大きな気持ちがかめられていた。

~~~~~

「うっし、帰るか!!」

荷物をまとめ終えた明の声が響いた。

荷物は基本的に男子が持たされている。

小さな着替えなどは各自が持っているが、大きなものは意外とかさばって邪魔になる。

「うーんっ。」

大きく伸びをした空は疲れきった体をブラブラしていた。

「遊んだね。」

もうクタクタ。」

東条が駅のベンチにドツカリと座った。

シーズン中は普段よりも本数が増えたと言っても、それでも都市部に比べて電車は少ない。

ちなみに次の電車はタイミングがよかったため、10分後だ。何人かに分かれてベンチに座った。

「そうですね、疲れました。」

珍しく疲れた顔をして泉が東条に同意した。
それに無言で琥珀を除いた全員が肯定した。

「でも琥珀さんだけがずっとパラソルの下でしたね。」

若干陰っているが、それでも普段の笑みを消すことなく要が話を振った。

「ああ、最近寝不足だな。」

そう言いつつも、琥珀の顔色は行きに比べてずいぶん良くなっていた。

少しの間話をしていると、すぐに次の電車が来てそれに乗り込んだ。

電車自体はそれほど混んでおらず、みんなが座れた。

「……ん？」

座って数分して琥珀が隣を見ると、見事に全員が眠りこけていた。それを見て琥珀も再びまどろみの中へと向かうことにした。

EPISODE 4 - 6 (後書き)

お久しぶりです、こんにちわ。

センターも近いことですからまだまだこのペースは続きそうです。
申し訳ないです。

EPISODE 4 - 7

「ふうっ。」

肺に入っていた空気と共に白煙が空中に舞う。

体に悪いと何度か禁煙したものの、結局今のところ辞める予定はない。

こういう仕事をしている人間はどうにも喫煙率が高いらしい、職場には匂いが染みついていて。

榊俊彦はデスクチェアに腰掛けながら煙草をふかしていた。

「いい加減にしないと本当に早死にしますよ？」

榊に辛辣な言葉をかけたのは彼の補佐役である二宮だ。

少し前に派遣されたにも関わらず、すでにこれほどまでに先輩を敬わないというのは如何なものかとも思いながら榊は肺に空気を送り込んだ。

先端が赤く光り、二宮が諦めたように溜息をもらした。

「彼らのデータですか？」

榊のデスクにあるデータを見ながら二宮はコーヒーを啜った。

榊は目を向けずに軽くうなずいた。

「この冴原琥珀についての記載が極端にすくなくいですね。どづいづいことですか？」

「ああ、まあ仕方ないんだよ。

コイツに関しては・・・な。」

再び煙草をふかした後に、それを灰皿に押しつけた。
さつき捨てたばかりの灰皿に新たに追加された吸殻は、細い煙を
上げながら榊と二宮の間を漂った。
ポツポツと話し始めた榊の言葉を聞くために、二宮は手近な椅子
に腰を下ろした。

「あいつに初めて会ったのは3年前だ。」

~~~~~

!!

「緊急事態、船橋ホテルビルにて災害発生！！  
特殊対策室は緊急出動せよ。  
繰り返す。」

フロアに響く盛大なアラーム音に眠りかかっていた脳が強制起動  
させられた。

このところ大した事件もなく、気が緩みきっていたことは否定で  
きない。

それにしてもこの異常なまでの状況はなんだ？何が起きたんだ？

・  
・  
・

「な、なんだ・・・これ。」

俺が現場に着いたときに見たのはまぎれもなく惨状と言えるもの  
だった。

ホテルは原型もとどめないほどに倒壊していた。  
さらに俺たちを驚かしたのは

「榊さん!!」

当時俺の補佐をしていた後輩が現場に先着していた部隊から報告  
を持ってきた。

「何かわかったのか？」

「それと負傷者はどうした？さつきから救急隊員は何をしてるんだ  
？」

瓦礫を見たまま放心している隊員に目を向けながら補佐に聞いた。  
しかし、ソイツの顔はお化けでも見たような顔をしていた。

「そ、それが・・・」

「2人だけなんです、負傷者。」

「それ以外は人がどこるか死体すら出てきていないそうなんです。  
・・・」

「おい、どういうことだ!？」

「わ、わかりません。」

「・・・ただ事件の目撃者から取れた情報だと、ビルの崩壊の少し  
前にビルを取り囲むように何か文字のようなものが目撃されていま  
す。」

「文字？」

「魔法か？」

現場の状況から言ってもまず間違いなく魔法が関わっていることは間違いない。

だが、俺はこんな状況を作り出す魔法なんか聞いたことがなかった。

「わかりません。」

ただ状況からの判断ではそうとしか考えられません。」

「そうか、何かわかったら教えてくれ。」

それとその2人の生存者はどこだ？」

「それなら先ほど病院の方へ。」

それと未確認情報ですが、どうも崩落の際に強い発光現象もされたようでそのおかげで2人は助かったみたいです。」

一通りの報告を受けると、俺は早速病院へと赴いた。

先に意識が戻った一条空という少女から話を聞いた。

「覚えている範囲でいいから、何が起こったか話してくれないか？」

腕と頭に包帯を巻いただけの軽傷の少女は少しずつ当時のことを話し出した。

あれだけの惨状にいて、これだけの怪我、疑わずにはいられなかったさ。」

~~~~~

「そうか、ありがとう。」

肝心な部分はわからなかったが、大まかなところは掴めた。

崩壊の寸前に現れたのはまぎれもなく魔法陣だったこと
ただそれは見たこともなく、現代の魔法とは異質なものだったこと
そして、少女を救ったのは一緒に助け出された冴原琥珀という少
年だということ

ただ俺が冴原琥珀と面会できたのはそれから数日たった後のこと
だった。

「始めまして、まあケイサツだな。」

「……」

少し濁した言い方にも少年の反応は薄かった。
いや、なかったとも言える。

「いきなりで悪いけど、事件当時のことを聞きたいんだ。
覚えている範囲でいいから教えてくれないか？」

「……ない。」

「えっ？」

聞き取れないほどの声で呟いた少年は、目を合わせることなく窓
から外を見ていた。

桜が花びらを咲かせ、スズメが鳴いている。

「覚えてない。」

「覚えてない？」

そう言った少年の瞳にはその桜もスズメも映っていないかった。

ただその目は外に向いていただけだった。

そのあと聞いた話だと過剰な魔法行使による副作用で記憶自体が消失してしまっていたらしい。

ただこんな症状は医師も今まで出会ったこともなく、それ以上の診断は不可能だった。

「ああ。」

「何も？」

「全部、事件とやらも、自分の名前さえも覚えていない。」

「・・・!？」

「ただ一つ覚えているのは」

そう言っつて冴原琥珀は右手を耳に持っていった。
そして数秒たった。

ゾワッ !!

病室の空気が一変した。

冷たく張りつめた空気と満ち満ちた殺気が

「 ッ!」

「これだけです。」

再び手を持っていくと、辺りの空気が急速に萎んでいった。
背中と額には冷や汗が浮き上がりそうになっていた。

ただの魔力の放出でこれほどまでの・・・

「ねえ君」

~~~~~

「まあそんな感じだ。」

二宮は最後まで何も話すことはなく、黙って聞いていた。

「じゃあ冴原くんは榊さんがスカウトしたってことですか。」

「まあそういうことになるね。」

ただあの時は彼のことを危険視していたということもあったよ。何しろあれほどの力だ、悪用されでもしたらと考えるとね。」

苦笑いをした榊は話を終わらせるかのように一口コーヒーを飲むと、デスクの上の資料に再び目を向けた。

先日の騒ぎのことだ。

「二宮、お前先日的事どう思う？」

視線はデスクに釘付けのまま言葉だけを向けた。

「ああ、あの事件ですか。」

そうですね、明らかにおかしいですよね。

あれだけのコトをした割に要求は大したことはなかった。」

「そうだな。」

何か裏があるはずなんだが・・・」

電子ペーパーに映された膨大なデータ  
事件の詳細な場所や時刻がびっしりと表示されていた。

「さ、無駄話もほどほどに仕事やるか。」

「そうですね。」

カップの中の液体を二宮は一気に飲み干すと、少し離れたところ  
にある自分のデスクへと戻って行った。

## EPISODE 4 - 7 (後書き)

あけましておめでとうございます。

今回は割とサイドストーリーな感じですが。

違うパターンの没ネタもあったんですが・・・

何となく年が明けて恋愛ネタの小説も書いてみたいです。

案外これが今年の目標かも。

まあダラダラと書きましたが、今後もお付き合いをお願いします。

E P I S O D E 5 - 1

海水浴から数日経った。

結局あの日は空も双樹も進展はなかったようだ。

「お帰りなさいませ、お嬢さま。」

学校から帰るなり私を出迎えたのはウチの使用人達だった。

東条家は平安時代から続く陰陽師の家系で、数百年間絶えることなくその血は脈々と受け継がれてきた……らしい。

正直私にはそれほど関心はない。

と言うのもだいたいぶと歳の離れた兄が居るおかげで、私には後継ぎだ、何だと言われたことはない。

ただ、東条家始まって以来初めての魔力と東洋で言う気の両方を持ち合わせた子供なのだそうだ。

そのために私は魔法学園に通わせてもらっている。

「ただいま。」

世間的には時代錯誤も甚だしいのかもしれないが、私個人的には今の暮らしに何一つ不満などない。

「お嬢さま、お嬢さまに依頼がきてございます。」

依頼、と言うものを除けば。

その内容は多岐にわたる。

お被いなどに始まり、果ては悪鬼退治などの依頼までやってくる。

普段は次期頭首である兄の仕事なのだが、人手不足はいかんともし難いらしい。

なのでこうして代わりに私が依頼をこなすのである。

「内容は？急ぎ？」

海に行った帰りとなるべくならば急ぎでないで欲しいが、そうは上手く行かないみたいだ。

「至急、このことですが、少し今回はやっかいそうでした・・・」

言い淀む使用人の茂じいは、久しぶりに見たかもしれない。

ちなみに茂じいとはウチの中でも一、二を争う古株だそうだ。

私が小さいときから茂じいはおじいさんだった。

「危険なのね。」

「はい。」

どうにも学園の裏手の山に、物の怪の類が出たそうでした、その退治をとのことです。」

「そりゃ大変。」

「すぐ用意して行くね。」

急いで自室に戻り、すぐさま準備を整えた。

準備と言っても漫画みたいに仰々しい着物などは着ない。

あんなものは正式な行事のときだけだ。

なので私は格好自体は変わらず、小さなかばんを取りに帰っただけである。

「今回は事が大きい故、私も同行させて頂きます。」

と言い、<sup>よわい</sup> 齢70を迎える茂じいも一緒に行くことになった。  
基本的に危険度が増せば必然的に人数は増えるもので、逆に2人  
というのは異例とも言える。

~~~~~

私たちが学園近くの山道にたどり着いたときにはすでに時刻は9
時を少し過ぎたころだった。

山に一度足を踏み入れると、たちどころに淀んだ気の流れを感じ
た。

これほどまでに淀むことはめずらしい。

と言うより寧ろ変である。

「かなり酷いね。」

「こりゃ悪鬼も出るよ。」

と、愚痴を零しつつも、早速仕事に取り掛かった。

陰陽道と魔法とはそれ程までに大きな違いはない。

簡単に言ってしまうえば、燃料の違いというやつだ。

茂じいに辺りの警戒をしてもらいながら、私は早速この歪みの原
因の調査に取り掛かった。

予め家から持ってきていたモノの中から一枚の紙を取り出した。

それには大きな円が2つ、その円の間を12分割し、子^ねから亥^いま
での方角に関する文字が、また円の外側には行書体で様々な文字が
ギッシリと書き連ねられている。

ただ、円の内側にはポツカリと空白になっていた。

紙を地面に置き、鞆からもう一つの道具、小刀を取り出し躊躇い
なく美代は自分の指を軽く切った。

浅くとはいえ、左手の人差し指からはうっすらと血が滲み、その

滴を紙の空白部分に落とした。
紙はすぐ紅く染まった。

「示せ」

声が森林独特の湿った空気を揺らした。
すると紙に広がったはずの血は一点にあつまると、ゆっくり移動して丑うしと書かれた文字の上を再び紅く血塗った。

「出たよ。」

近くで警戒に当たっていた茂じいにすぐさま探知結果を伝える。

これは日本古式の陰陽道と、中国伝来の風水を独自に組み合わせた東条家独自の術式である。

使用者の血を媒介に使い、搜索、または探知などを行える便利なものであるが、欠点として対象物の情報が必要で意外と使い勝手は悪い。

今の場合は探知目標である気が辺りに充滿しているのでこの点ではその短所はカバーしている。

「左様ですか、それで如何でしたか？」

警戒心は保ったまま近くで警戒に当たっていた茂じいにすぐさま探知結果を伝える。

これは日本古式の陰陽道と、中国伝来の風水を独自に組み合わせた東条家独自の術式である。

使用者の血を媒介に使い、搜索、または探知などを行える便利なものであるが、欠点として対象物の情報が必要で意外と使い勝手は悪い。

今の場合は探知目標である”気”が辺りに充滿しているのでこの

点ではその短所はカバーしている。

「左様ですか、それで如何でしたか？」

警戒心は保ったまま美代に聞いた。

「北北東だつて、それとやっぱリコレは人為的に起こされてるみたい。」

「そうですね、とりあえず急ぎましょう。

日没もきになりますので。」

「うん、早く帰つてご飯食べたいしね。」

お気楽な私を他所目に、茂じいは渋い顔をしていた。それを見て、私は心配しすぎだと内心で思っていた。

~~~~~

三島明は月見山にいた。

月見山というのは魔法学園の裏手にある山の別名で、クラブ活動の一部としてきていた。

サバイバルなどと言っておきながら、今日は山頂まで行って再びふもとまで戻ってくるタイムトライアルだ。

ただし各人が10kgの重り持ちながら行くと説明を聞いたもの、

「うげ、これ結構きつい・・・」

魔法の行使は原則禁止だが、自分の身を守るためなら例外的に許

可されている。

とは言え、こんなところでは使うこともないだろう、と甘く見ていた。

それにさっきから人どころか、生き物を見かけることもない。

夏もそろそろ本格的になってきているのにコレは明らかに様子が変わると明は思いながらも、最下位になったら罰ゲームというルールのためにひたすら頂上をめざしていた。

「はあ、はあ、はあ・・・」

山道から外れたひと際険しい獣道を登りながら、甘く考えていた自分に呆れつつも明はその歩みを止めることはない。

青々と茂る木々の間を縫うようにして歩く、葉っぱと自分の体が擦れる音、布の擦れる音、空気を吐く音が響く。

背筋を伝う汗は乾く前に新たに湧き出てくる。

ガサッ

自分の後ろで葉の擦れる音がした。

どうせ小さな動物だろうと振り向くこともなく歩き続ける。

ガサッ

ガサッ

しばらく歩いても後方からの音がついてくる。

「何だ？」

と明は後ろを振り向いた。

~~~~~

「ねえ行こうよ」

琥珀は空に腕を引かれながら、いや、引っ張られながら歩いていった。

事の始まりは放課後、今日は珍しく空の執行部の活動もなく早く帰れるというので琥珀は正門で空を待っていた。

どうせ何だかんだと引っ張りまわされると思っていたが、

「ねえねえ、何か裏山にお化けでるらしいよ？」

「見に行こうよ!？」

と言われて、琥珀は呆れた。

そしてすぐさま

「行かない。

お化けなんかいない。」

と言いきをおいて帰ろうかと歩きだした。

「待ってよ。」

もしかして怖いのか？」

ニヤッと笑った空に、琥珀はうんざりしつつも

「わかったよ。」

溜息をしつつも、すでに腕を掴んで歩きだしている空に並び琥珀

は歩きだした。

EPISODE 5 - 1 (後書き)

お久しぶりです。

センター試験のためしばらくお休みしてすみません。

と言いつつ次は2次試験のためにお休みになりそうです
笑”
気長に見てもらえるといいかな、と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0513i/>

国立魔法学園

2010年10月9日22時50分発行